
求婚 ≠ ロマンチック!? 【オムニバス】

直江 アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

求婚≠ロマンチック!? 【オムニバス】

【Nコード】

N5405W

【作者名】

直江 アキ

【あらすじ】

「キスはキス、求婚は求婚。たとえ人命救助の人工呼吸だとしてもね」

キス⇨求婚の一族に育ったヨルナ。馴染みの青年キリクの十三回目の求婚を拒んだ日、女装の美少年クライドを夜の海から助け出す。断るものと思っていたがクライドは求婚を快諾して――。

《章》ごとにオムニバス形式で進んでいく予定です。現在《第三章》→天使にご用心→第3話まで進んでいます。

＋＋＋《第三章》＋＋＋

「お前は未来の公妃として海洋公国フェルナに祝賀に行くがいい」
父王に命じられるままフェルナに向かったセトル王女マルゴット。
しかし婚約者であるフェルナ公太子ジエネローゾにはどうも嫌われ
ているようだ――。

〈第零章〉くグラボン大陸く（前書き）

書きためた短編をオムニバスにしてみました。誤字脱字等、あるか
と思いますが、どうかご寛恕ください。

〈第一章〉くグラオベン大陸く

グラオベン大陸。

大きく羽ばたく鳥に似た形をしており、骨格は山脈を表し、なだらかな台地は肥沃な平野へと変わる穏やかな大陸だ。その片羽と反らした尾羽に見立てられた二つの半島の中心が、コールヤ湾だった。大陸には大小幾つもの国があり、様々な人が日々の生活を営んでいる。

細く長い国土の殆どをコールヤ湾に面した海洋公国フェルナ。

大陸の国々の中でも一二を争う歴史を紡ぐ森と水の小王国セトル。かつてはセトルの一領でしかなかった豊かで広大な農業国ザクテン。

そしてコールヤ湾に暮らす人々――。

〈第零章〉くぐラオベン大陸く（後書き）

なるべく早く更新したいと思っています。今後もしよろしく願います。

〈第一章〉〈約束はお早めに〉? (前書き)

というわけで、オムニバスの一作目です。

《第一章》〈約束はお早めに〉？

ヨルナは夜空から続く同じ色をした海面に、ちらちらと瞬く満月の光を見るときもなしに見ていた。

大抵は朝までぐっすりだが、夜半に目覚めたのは昼の一件が尾を引いているのは間違いない。

苦い想いが渦巻いていて、不安で押し潰されそうだった。後悔、というのはどうしてこうも胸を苛むのだろう。ヨルナは普段は快活な娘だったが、こと彼のことだけは別だった。

このまま流れに身を委ね、甲板から見下ろす風に漂う木切れのように、何も感じずいられたらと思う。

馴染みの行商の青年キリクを突飛ばした感触と、彼が海に落ちた大きな波音が耳にこだまして離れなかった。

後悔が波のように寄せてくる。浅い眠りを繰り返し、結局眠るのを諦めた。

ぶるり、と震えて肩から羽織ったマントを巻き付ける。晩夏でも此処らの海上は昼夜の気温差が激しい。キリクが落ちたのが昼間だったのが救いと言えば救いだ。

何度目かの幻聴に反射的に海に目をやったヨルナは、波間に揺らぐ黄金の色が一点に集中していることに気付いた。絶え間なく聞こえる波音に異質なものも混じっている。眇るように鳶色の瞳を細め、ヨルナは日に焼け、日々の仕事で荒れた指先を驚愕に開けられた口許に押し付けた。

満月だ、明るい月の光だ、とばかり思っていた金色は女物のドレスのようだった。波に煽られ、あつちにゆらり、こつちにゆらり、徐々に《住まう舟》に近寄ってくる。

しかも。

それは漂流する人間だった。

ヨルナは慌てた。

水の冷たさに躊躇したのは瞬きより短い間で、マントを脱ぎ捨て勢い良く飛び込む。距離は決して長くはないし、元々寝衣は陸の肌着のように身体を覆う面積の小さいものだから水を吸っても重さはほとんどない。それでも、焦りから指の間から掻いた海水が抜けていく。

バシャバシャともがくように漂流者に近付いて、ヨルナは思わず息を飲んだ。途端に噎せながら、細い身体に手を回す。ググツと抵抗する金のドレスを脱がす余裕はない上に、脱がし方もよくわからない。

彼女を抱えて《住まう舟》まで冷たい水の中を泳いだ。

必死だった。

けれど、感嘆は消せない。

ちらりと見た容貌は海中だということを忘れて息を飲んでしまうくらい、美しかったのだ。

重量のあるドレスと身体を《住まう舟》に揚げ、そうして両手で自分もよじ登り、ヨルナは少女の呼吸を確認した。

「息してない……」

しかし、身体は芯から冷えていないようだ。今なら助かるかもしれない。

「胸骨、の下」

呟きながら両手を重ね、肘を伸ばして胸を強く圧迫する。二度、三度、ぐっ、ぐっ、と押していた薄い胸から掌を離し、少女の通った形の良い鼻をぐいっとな摘まむと、喉を反らせて口付けた。そのまま息を吹き込む。

「——どうした？」

水音を聞き付けたのか、気配に聡いネリが起き出してきた。

「兄さんっ、手伝って！」

コルセットの前をナイフで切り裂き寛げると、人工呼吸するヨルナの横で当然のように掌を胸に当てた未婚の兄ネリは、怪訝そうに眉を潜めた。

「何してんのっ！？ 早く！」

「あ、ああ。わかった」

ネリが強く押すことを繰り返す。合わせて何度か息を送り込むと、少女が咳き込んだ。

「よ、良かったぁ……！」

安堵の声は少女の唸りにかき消されたが、ネリが労うようにポンと頭を撫でてくれた。軽くそれに頷き返し、ヨルナは少女を覗き込む。

虚ろにさ迷う瞳は真っ青だ。どれほど凪いだ海を、暑い夏の空を映しても、これほどの青には染まらないのではないかと思うほど、青く、微かに縁だけが濃かった。それも白目との境が余りにはつきりしているための錯覚かもしれない。

青い瞳は、二度三度瞬きを繰り返し、そうしてようやくヨルナを見た。

金髪は細く、海水に濡れて光り、形の良い額にぺたりとはりついている。やや長めの前髪が、くつきりとした鼻筋を際立たせていた。早くに死んだ母は今まで見た中で一等美しかったと皆が言うが、果たしてこの少女を見た後に彼らが同じことを言えるだろうか。

色の冷えた薄い唇が戦慄き、言葉を紡ぐ。

「ここは……」

掠れても少女特有の澄んだ声を想像していたが、随分と低い。ようやく聞き取れる高さの呟きに小さく頷いた。

「大丈夫。あんたは助かったの。……ここは内海に浮かぶ《住まう舟》のひとつよ」

少女の瞳が周囲を見渡し、心得たように嘆息した。

「あんたは運が良かったわ。兄さんが見付けてたら助からなかったかもしれない」

噎せながら首を傾げようとし、ぎこちなく笑みを見せた少女から視線を外そうとしないヨルナに、ネリが視界の端で肩を竦める。

「俺はそこまで人でなしじゃないつもりだけど。それにヨルナ、言いにくいんだが……」

「なあに？」

「お前気付かなかったのか？ いや、その……」

いつも陽気なネリの言い淀む姿は殆ど見たことがない。口に出すのをひどく恐れているかのようで、ヨルナは躊躇いがちに先を促した。

「その……彼女は、いや、その人は……男性だよ」

耳を疑う言葉にヨルナは文字通り固まった。

「……………はっ！？ だってドレス着てるよ！？」

ぎくしゃくと首を巡らし黄金のドレス——初めて見る光沢の美しいもの——と、少女の端正な顔と、ネリを順々に見て、乾いた笑いを唇に乗せる。

ドレスは確かに女物だが、言われてみればその整った容貌は随分と中性的だ。何よりネリの同情的な視線に厭な予感を覚えて、ヨルナは恐る恐る少女に確認する。

「あんた……女よね？」

一縷の望みをかけてヨルナは少女を覗き込んだ。満月の下でも真っ青な瞳が真っ直ぐにヨルナを見つめ返し。

「僕は男だが？」

途端にヨルナは頭を抱えた。

「おめでとう、ヨルナ」

皮肉るようにネリが背を叩く。

——冗談でしょっ！？

確かにキリクを突飛ばしてまでキスを避けたが、だからといって他の男とキスしたいわけではない。

憎たらしい程清々しい笑顔でネリがひとつ頷いた。

「君も。助かって良かった。俺はネリ、このヨルナの兄だ。だから君の義兄になるわけだ。まあ君みたいなきれいな義弟が出来るなんて予想外だったけど」

「義弟……？ なんのことだ？」

ゆっくりと上半身を起こした美少女改め美少年は、うつとおしそうに水をまだぐつしよりと吸ったままのドレスの袖をまくりながら眉をひそめた。

頸になった腕は確かに少年のもので、均整がとれた筋肉がついている。キリクやネリのように焼けて引き締まっではないが、それでもドレスの袖から伸びるには不恰好な腕だった。

「俺たち海に住む奴等は最初のキスが求婚の変わりなんだな。昔は年頃の男女が出会う確率が随分と低かったから、今でもその風習が残ってるのさ」

「それと、僕が義弟になることと何の関係がある……？」

「それがあるんだ。この妹は君に人工呼吸をした。つまり——キスだ」

「あんなもんはキスじゃないっ！ あたしはキ……ど、ドレスを着た旦那なんてごめんよっ！！」

闇色をした髪から雫を垂らし、夜のような目をそらして小さくひとつ呟いた青年が脳裏に蘇る。

「冗談じゃないんだよ、ヨルナ。お前は昨日キリクの十四回目の求婚を断っただろ？」

「……十三回目よ」

「数は、うんまあいいけど。キスはキス、求婚は求婚。彼と結婚しなきゃお前は一生独身だ。それともキリクとキスしたのかい？」

「そんな……だって……あたしは……」

救いを求めて美少年を見下ろす。

そもそも、その髪と瞳の色やコールや湾の漁民が溺れるのを恐れて絶対に着ることのない丈や袖の長い服から、彼が陸からやって来たことがわかる。しかも服は明らかに裕福な家のものだ。富を持つ

陸の住民ならヨルナのような《住まう舟》の民と結婚しようとする者なんている筈がない。

「というわけで、君も諦めてヨルナと結婚してくれ」

僅かに翳った青い瞳に安堵を覚えて、ヨルナは彼が断つてくれるのを待った。

だが。

「喜んで」

かくん、とネリの顎が落ちる。ヨルナもまた驚愕に見開かれた目を白黒させた。

「僕には婚約者がいないし丁度良い。それに政争には飽き飽きしていたところだ」

「……いやいや、あのね。俺たちは君がびっくりする程貧しいんだよ」

ネリが乾いた笑いをあげ、追従しヨルナも頷く。

ここで何としても彼を説得しなければ。

だが美少年は半身を起こしたままぐりと《住まう舟》を見回し、瞳を眇た。

「わかつている。コールヤ湾に住む者は概して陸の者より貧しい。だが、そろそろ我が国も漁民と直接的な関係を築いても良い頃だ」

……どうしよう。

ネリと顔を見合わせて、ヨルナは小さく溜め息をついた。

「——今夜はその辺にしとくんだ」

「父さん!？」

振り向けば闖入者はこのノキア一族の《住まう舟》の舟長だった。今までの話を聞かれていただろうか。もしも聞かれていたのなら……考えたくない。

「ネリ、着替えを貸してやれ。海を漂ってたんなら相当疲れてる筈だ。ヨルナ、彼を空いている部屋に案内してやれ。全ての話は明日にしる」

「はい……」

眉根を揉みながらネリが返事をする。

「ノキアの《住まう舟》の舟長ふなおさワグだ。海から来た客人を歓迎する」

「クライド、クライド・ベッツィークだ。すまないが厄介になる」

漂流してきた美少年——クライドは、軽く頭を下げると立ち上がろうとした。水滴を垂らしながら金の髪を揺らし、途端によろける。咄嗟にヨルナはクライドを支え、心の内で嘆息した。

〈第一章〉く約束はお早めに？（後書き）

呼んでいただきありがとうございます。続きもよろしく願います。

《第一章》〈約束はお早めに〉？

朝までまんじりともせず――。

ヨルナの瞳は翳りが強い。顔色が悪いよ、とネリが心配するのすら鬱陶しかった。

「眠れなかったの？ クマも出来てる」

……眠れるわけがないじゃないっ！

むっつりとヨルナはネリを見上げた。

食堂では誰もが横目でヨルナを伺う。ヨルナがキリクを突き飛ばしたことは皆が知っているし、しかもどうやら夜半の求婚すら噂として駆け回っているようだ。舟長が言う筈はないから誰かに目撃されていたのだろう。

好奇の視線に晒されるのは嫌だったし、食欲もわからないから茹でた海老ひとつと水だけを口にし、足早に去ろうとした。

「ヨルナ、これをお前の婚約者に」

食器の音やざわめきが一瞬で静かになる。

額に血管が浮くのがわかった。錆びた歯車が動くように、ギギギ、と首を巡らし、ヨルナはネリに燃える瞳を向ける。

「朝飯だよ、彼の。持って行ってあげ」

やや歪んだ盆にスープが置かれていた。ヨルナはネリの手から盆を受け取り、腹立ち混じりにドンと足を踏み鳴らす。

「見世物じゃないのよっ！」

一族を弊睨し、鼻息荒くヨルナは食堂を後にした。盆の上でスープが揺れて溢れるのも気にせず、甲板に出る。

高い位置にクライドが昨夜着ていたドレスが干されているのを見て溜め息をついた。ナイフで裂かれた無惨なドレスはすでに乾ききり、風を孕んで膨らんでいる。もしクライドを搜索しているのであれば、とネリが目印に掲げたものだ。

ふい、とヨルナは視線を反らした。

《住まう舟》に当たって碎ける波音に混じり、深夜の漁に出ていた男たちが掛け合う労いや、女たちの水揚げを喜ぶ声がする。

「――聞いたか？ 長んこのヨルナが昨日求婚した話」

ぴくりと震え、ヨルナは彼らの視界に入らないように身を屈めた。積み上げられた木箱の影に隠れ、耳だけをそばだてる。

「行商のキリクの話だろ……？ 突き飛ばしちまったのはみんなが知ってるぜ？」

「いや、そうじゃねえ。俺達が漁に出てる夜の間のことらしい」

そうつと甲板を覗き込むと、忙しいにもかかわらず皆が手を止めわいわいと話していた。その向こうの青い海は風に煽られ白い波を立てている。

コールヤ湾はとても広大な内海だ。湾と言っても岸に近寄らなければ水平線しか見えない。ただ、湾を囲むように三日月型に突き出た二つの半島は対岸が見えるくらいに近く、その為外海より穏やかなのが常だった。ところどころにケルプ――海底から長く伸びる海藻――の緑が浮かぶ。湖より水資源が豊富な湾の深さは、水を五十回も掻けば底に届く程度だ。

《住まう舟》はコールヤ湾内に数えきれないくらいあった。こうしてヨルナが海を伺うと水平線にいくつもの《住まう舟》が見える。その周りを機動性の高い舟が行き交い、易を成していた。

その中に見慣れた舟を見付けて狼狽する。

波間のあの覚えのある舟。赤い日射し避けに《商》の印が染め抜かれ、甲板の上を幾人かが働いている。

ヨルナには一瞬でわかった。

キリクだ。

遠目にも均整が取れた身体。黒い髪を動きやすいように尻尾のようにくくり、大きく手を振っている。

昨日、睫毛についた水滴を拭って、ずっと伏せられた瞳。けれど今日はきつと黒い瞳をいつもと同じようにきらきらと輝かせ、焼けた薄い唇から歯を覗かせているのだろう。

舟はみるみるうちに近付いてきて、甲板にいる者たちもキリクに気付いた。多くの者が気まずそうに目を反らすのを不審に思ってた、キリクが目を眇る。

「なにかあったか？ 網でもやられたのか？」

逡巡する皆の様子にヨルナは祈るように目を瞑った。

——お願い、言わないでっ！

「そ、それがよ。ヨルナがな……」

——言わないでったら！

皆を止めようと木箱の影から出ようとするが、意に反して身体は全く動かない。

「昨日の夜にな、求婚したらしいんだよ」

「求婚！？ 誰に！？」

眉間に寄せられたしわと、見開かれた瞳から衝撃が見てとれる。

それはそうだろう。キリクは十三回も求婚を断られているのだから。居たたまれなくなつて、ヨルナは唇を噛んだ。

「俺たちもよく知らねえ。さっき漁から帰ったばかりなんだ。……気落ちすんなよ？」

気の毒そうに男が告げる。キリクが苦笑しながら嘆息し、肩を竦めた。

「……ま、仕方ないだろ。誰にも好き嫌いがあるさ。もういいんだ。俺には関係ない」

血の味がする。

盆から片手を離し、ヨルナは唇に触れた。指先をぬるりと赤い色が汚し、けれど噛み切った唇よりも締め付けられた肺と心臓が痛む。「お前さんだったら引く手数多だ。どれ、うちの《住まう舟》にも他に女がいるぞ」

「あたしがあと三十若けりやねえ！」

どつと喚声が上がリ、キリクを取り囲んでいた皆は水揚げに戻った。

ヨルナは胸を押さえたまま唇を戦慄かせた。

「キリク……」

思わず溢れた彼の名がこの距離とざわめきの中で聞こえた筈がない。けれど、キリクが視線を転じ――。

木箱の影から覗くヨルナと目が合う。ドクリ、と大きく心臓が鳴った。

一瞬強張った彼の唇が、ゆっくりと弧を作る。複雑そうに笑んだキリクは声を出さずに口だけを動かした。

――お、……め、……っ!?

何を言わんとするか悟って、ヨルナはそれ以上見たくはなかった。けれど、彼から目を離せなくて。

『おめでとう。良かったな』

ヨルナが理解したことがわかったのか、キリクはそれ以上近寄ることもなく舟に戻っていく。甲板に移される積み荷を数え、陽気に男たちと肩を叩き合い、ついでに水揚げを手伝うと食堂へ入って行った。

十　十　十

皆がいなくなってから、ヨルナはのろのろと立ち上がった。盆の上のスープはとくに冷めてしまったが、食堂に戻る勇気はない。今キリクを目にしたら人目も憚らず詰ってしまいそうだった。

――あたしにキスしようとしてたくせにっ!!

ぎゅっと盆の縁を握る。

……何が、おめでとう、よ!?　何が、俺には関係ないよっ!?　渦巻く想いに歯噛みしていたが、ヨルナの鳶色の瞳は段々と翳っていく。

……キリクなんて、キリクなんて、一生独身でいりゃあいいんだわ。あんな奴大っ嫌い!!

最初にキリクと会ったのは九つの時だった。

ケルプに足を捕られ、ヨルナは浮上出来ずに溺れた。十歳のキリクはその日初めて行商の舟に乗り、そして父親たちが休憩している最中に、もがき沈む子供を見付けたい。キリクはケルプの森に躊躇もせずに飛び込みヨルナを救ってくれた、とネリは言う。

実際に溺れた後のことをヨルナは覚えてはいない。意識を失ってしまったし、気が付いた時は寝台にいた。

それでもお礼を言うと、照れてそっぽを向いて赤くなったキリクに好感を持った。それは次第に好意に変わっていき、ヨルナはキリクがやって来るのが待ち遠しい程だった。

初めての求婚は十五歳の時。近付いて来た顔にびくりして押し退けてしまったのだ。真っ赤になったキリクに、しまった、と思ったがもうどうしようもなかった。

ただ、恥ずかしかっただけなのに。

落ち込み、もう会ってはくれないかもしれない、と思った。けれど、キリクはその後も変わることなく、それからは同じことの繰り返しだ。

ヨルナの恥ずかしさは変わらないのに、キリクは面白がっているようだった。それが腹立たしい。

一人もやもやとしていると、十七を前にしてキリクとネリの話聞いてしまった。

妹を救ってくれた感謝からか、それとも互いに陽気な質で気が合ったのか、ネリはキリクと急速に仲良くなり、今では親友の間柄だ。その二人の話はヨルナに衝撃を与えるには充分だった。怒りと僅かな悲しみを感じ、それからはもう素直にキリクと話すこともなくなっていた。

別にキリクが嫌いになっただけじゃない。けれど、彼と結婚するわけにはいかなかった。

昨日の昼間、珍しくふらりとヨルナの《住まう舟》に立ち寄ったキリク。

いつものからかうような表情ではなく、なにかひどく考え込んで

いる風でヨルナを落ち着かなくさせたキリク。

太くはないが精悍さの際立つ顎の線と、通った鼻筋に浅黒い肌。やや垂れた目尻を差し引いても、女たちが騒ぐのも無理はないと思う。

『俺と所帯を持つつもりはないか？』

そんな風にキリクが聞いてきたのも初めてだった。

いつもはふらつと顔を寄せてくるだけなのに。にやっと唇の端をあげ、至近距離で見つめられるとどうしていいかわからなくて。

けれど、こんなに真摯な瞳で見下ろされることなどなかった。

顔が強張る。狼狽し、何に動揺しているかわからないまま、ヨルナが硬直していると、首を傾けキリクの顔が近付いてくる。

反射的に厚い胸を強く押し、あっ！！と思つた時には、キリクの身体は海の中だった。

『それ程嫌か……』

甲板に上がり、そう呟いて瞳を伏せたキリク。黒髪から海水をばたばた垂らし――。

「なんでこんな惨めな気持ちになるの……」

見捨てられた、と思つてヨルナは愕然とする。

指が白くなる程強く盆を握りしめ、微妙な音がして盆がさらに歪んだ。溢れたスープにやつと気付いて、それでも食堂へもクライドの所へも行く気になれないでいると。

「ヨルナ、お前まだ朝飯運んでなかったのか。……なんで泣いてる？」

ネリが顔を覗き込んできた。目が笑っている。この兄のからかうような表情が、ヨルナに怒りを思い出させた。

「泣いてなんかないっ！！」

地団駄を踏みかねないヨルナの様子にネリは首を傾げ、盆を取り上げる。

「ほら、行くぞ。朝飯抜きじゃ可哀想だ」

歩き出したネリに仕方なしについて行く。

どうしても後ろを気にしてしまう自分に気付いて、ヨルナは力なく首を振った。そうして小さく飛んだ水滴に、涙を流していることを知る。

ぐいつ、と手の甲でそれを拭い、ヨルナはネリから盆を奪い取った。

「兄さん、キリク来てるよ。これはあたしが行くから」

少しだけ目を見開いたネリに笑い返し、ヨルナはクライドの元へ向かった。

〈第一章〉く約束はお早めにく？

クライドは寝台から窓の外を眺めていた。

束の間、ヨルナはそれに見とれる。

射し込む陽光が金の髪に乱反射し、淡く浮かび上がっているようだ。顔かたちが彫像のように整っているから神々しさが際立ち、余計に声をかけづらい。

扉を入ってすぐで立ち竦んでいるとこちらを振り向きもせずクライドが声を出した。

「そんなところに突っ立っていると朝食が冷めてしまうのじゃないか？」

「……ごめん、実は既に冷たかったりして」

寝台脇のテーブルに盆を置き、苦い思いを隠してヨルナは謝った。
「ほんと悪いんだけど、我慢してくれる？　それか、あつたかいのが欲しかったら食堂へどうぞ。でも案内は誰かに頼んでね」

「僕はこれでかまわない」

向き直ったクライドが微笑む。

感嘆すら覚える端正な笑顔だ。普段は余り美醜に頓着しないヨルナでさえ、一瞬言葉に詰まる。

「……あんた良い所のお坊っちゃんでしょ？　あたしなんかじゃなくともっと別の人を選びなよ」

眉尻を下げたヨルナは困った顔を隠そうともせず、単刀直入に頼んだ。

「昨日のあれはキスじゃなくて人命救助の人工呼吸なの。だから求婚なんかじゃないのよ」

「僕では不満か？」

「不満というか……」

言い淀み考え込んで瞳を伏せた。

適齡期はとうに過ぎた。

ヨルナはもう十七で一族では婚期を逃した娘だと思われるし、だから誰もがヨルナとキリクに興味を持っている。キリク以外に求婚者がいなかったわけではないが、キリク以外に応えるつもりもなかったのだ。

それは、キリクとネリの話を聞いてしまう前と変わらない。

「十三回も求婚を断っているのは何故だ？」

クライドが不意に声音を柔らかなものに変えた。

「おかしいでしょ？ 十三回も求婚されたらふらって来て当然だつて言われてるわ」

「別に。僕は結婚の打診をもう何十回も断っているからな」

え、と聞き返したヨルナをクライドは見つめた。

「おっしゃる通り僕は裕福だ。地位ある立場だね。お陰様でありとあらゆる家から適齢期の女性の絵姿が送られて来る。面倒なんだよ」

スープを一口啜り、クライドは顔をしかめる。冷たさと面倒なのとどちらに嫌気が差したのかヨルナには判断出来ない。

「かちゃん、と盆にスプーンが投げ出された。」

「だから最初の内に断った。花嫁は自分で選ぶからお膳立ては不要だ、とな」

「自分で選ぶ……」

選べるものなら、とヨルナは思う。羨望の視線をクライドに向け、小さく溜め息をついた。

「キリク、というのが十三回断った相手か？」

「——そうよ。兄さんの、ネリの親友なの」

「何故断った？ 結婚が嫌なのか？ それともキリクが嫌なのか？」

キリクが嫌な筈がない。

嫌なのは求婚してくれた理由だ。それなのに照れて舞い上がった自分に腹が立つだけだ。

けれど、それを上手く伝えることが出来なくて。だから、ヨルナは意識して眉をひそめるとまず嘆息した。

「……キリクのそばだと落ち着かないもの」

手をひらひらと振り、ヨルナは大袈裟に肩を竦めて見せた。

「彼はただ兄さんに対する義務感であたしに求婚してるだけなのよ」
端正な顔を訝しげに歪めたクライドは先を促すように視線を向ける。

「兄さんとキリクが話しているのを聞かなければ、あたしはもうとつくにキリクのとこへ嫁に行つてたでしょうよ。いまでも……聞かなきゃ良かったと思う時があるわ」

「それでもヨルナを頼めるかい？」

うつすらと赤みの射した頬をしたネリが杯を傾けながら、傍らに座るキリクに悪戯めいた笑みを見せた。胸をドキドキさせたまま耳を澄ませたヨルナは、さつと血の気が引いたのだ。

「今さら何を言うんだ。親友の頼みを拒むわけないだろ？」

そう低く、唸るような声で答えたキリク。表情は見えなかったけれど、ヨルナは声に微かな不快を感じ取った。

「……キリクがあたしに求婚するのは兄さんに頼まれたからなのよ」
「！」

吐き捨てるように呟いてクライドから顔を背けたヨルナは服の裾をきゅつと握りしめる。

この話を他人にするのは初めてだった。《住まう舟》の中では決して出来ないし、クライドならと思ったことは否めない。

だが、自分に言い聞かせてきたことを話すのは、考えた時以上に心を決った。

聞かなければ良かった、と思ったことは嘘じゃない。けれど、納得のいく唯一の理由だったから自分の耳を疑うことも出来なかった。「あの人はあたしだから求婚したわけじゃない。誰だっていいんだから。他に仲の良い女の子がいっぱいいるくせにね」

この《住まう舟》の中にもキリクに熱をあげている娘はいるし、彼女たちと親しげに話すキリクの様子だって見ている。それにキリ

クと同じ商人の中にはわざわざヨルナに、キリクはモテるんだ、と教えてくれるお節介な男たちもいた。

それでも、キリクはネリとした約束を貫いている。義理堅く、優しいキリク。

……その優しさが愛情から来るものだったら良かったのに。

「義務感以外のなものでもなくくせに。苛々するったら」

「苛々、ねえ……」

腹立ち紛れにテーブルを叩きかけ、ヨルナは寸前で止まった。

「ごめん。変なこと聞かせて。忘れてくれる？ 馬鹿なこと言ったわ」

自嘲気味に謝罪してゆらゆらと視線をさ迷わせたヨルナは不自然なまでに話題を変えた。

「——きれいな手ね？」

クライドはそれでもそれ以上を追及することなく、ヨルナの話題に乗っけてくれる。

整った容姿がやや冷酷に見えたが、意外に優しい。彼は苦笑すると自らの手を翳す。

「そうか？ 一応剣も相応に遣えるから掌は硬くなっているし、男にきれいもないと思うが。それにヨルナの手もきれいではないか？」

繁々と手を見下ろし、うーん、と唸った。日に焼け、そばかすが浮いている。指先は荒れ、少しばかりひびが入っていた。

「あたしの手はダメよ。仕事で傷だらけ。荒れてるし、爪も欠けるもの」

節くれの目立つ指にはいくつもの古傷が陣取り、掌は厚くなっていた。

「それは生きるための手だ。確かに貴婦人方の手とは違うが、働く手も決して醜いわけではない。——ヨルナは何を仕事にしているのだ？」

「あたしは網の点検とか、まあ漁の雑事かしら。継ぎ接ぎの古いものだし魚にあるヒレとか色んなものが引つ掛かるからすぐに傷むの。」

漁から帰って来たらすぐに調べて……本当は新しく作るか、もつと大きな網があればいいんだけど、フェルナの品は高いから」

コールヤ湾の《住まう舟》の殆どが海洋公国フェルナの港へと漁獲の品を運んでいる。勿論、キリクのような商人を介してだ。足元を見られているのか、大抵は僅かな代金が支払われるばかりで大金が転がりこむのは稀だった。

「網の原料は陸の物だもの。大きな網があれば今より獲れる魚の量も増えるし、もう少し漁のキツさもマシになるかなって思うんだけどね」

諦めの混じった溜め息を落とし、ヨルナはクライドの寝台の端に腰を下ろした。

「フェルナは海沿いを細く長く治める国だし、どこよりもたくさんの港を持つてるわ。兄さんやキリクはフェルナに魚を安く買い叩かれるのが我慢ならないみたいだけど仕方ないの」

「フェルナ以外の国を頼ればいい。フェルナだってその殆どを他国から輸入しているのだから。というよりも、だからこそ価格が高く設定されているのだろうが」

「他の国って一番近くてもザクテンやセトルだけど、そこから直接買えないでしょ？ そりゃザクテンは豊かで広大な内陸国だし、セトルも魚を高く買ってくれるけど、港が限られてるわ」

「……なるほどね」

小さく微笑んだクライドの瞳に才知を見出だし、ヨルナはずっと不思議に思っていたことを聞いてみることにした。そもそも、それさえなければこんな目に合わずに済んだのだ。

聞く権利はあるだろう。

「クライドはどうして女装してたの？」

言動から彼が良家の子息だとわかるし、剣が遣えるにも関わらず荒れていない掌から日常的に手入れが可能な環境にいる証拠だ。そんなクライドが——似合っているどころか美少女にしか見えなかったが——何故女物の豪華なドレスを着ていたのか。

「二つ上の従姉と入れ替わってみたのだ。……恥ずかしながらドレスの裾に絡まってな。お蔭でこの様だ」

額を押さえて苦く笑うクライドに、つい笑みが溢れた。咎めるように見上げたクライドだったが、ふっと微笑みを返す。

見つめあってクスクスと笑い合う二人に、控えめに声かけられた。ただしちつとも悪いと思っていなさそうな声音で。

「——お取り込み中悪いんだがね」

「兄さ……キリク!?」

弾かれたように開け放たれた扉を見たヨルナは小さく叫び声をあげた。

長身のネリの横に、キリクの姿がある。なんの感情も浮かんでいないその顔に僅かに怯えながら、ヨルナは立ち上がった。

キリクとネリとクライドを順に見つめ、急に動揺する。

——兄さんはともかく何でここにキリクがいるの!?

おめでとう、など聞きたくはない。特にクライドと一緒にいる時に。

「君がキリクか。僕はクライド、ヨルナの婚約者だよ」

「クライド!! 何を——ち、違うわよ!? あれはキスじゃなくて人命救助の人工呼吸なんだから!」

間髪入れずに反論して、はた、と気付いた。

きつとキリクは安心している筈だ。ネリとの約束を反故することになっても、別に好きでも何でもない相手と結婚しなくて済むのだから。

……こんな風に言い訳する必要なんて、ない。

弁解しようとキリクの気持ちが変わることはないのだ。

下を向いて、涙を堪える。泣いている、などとキリクやネリに知れたら、また同じことになるかもしれない。責任感の強い二人のことだ。

これ以上キリクを縛り付けるのは悲しかった。

「照れ屋だね、ヨルナは。最もキリク、君はよく知っているだろう

けど」

「……ああ」

前を向かずに控えめに笑みを作る。わざとらしくはないか、と気にしながらもヨルナは顔をあげた。

キリクを見るのは怖かったから、じつとクライドを見つめながら。「で、勿論僕たちを祝福してくれるだろう?」

端正な顔立ちに完璧な微笑を乗せてクライドが決定的な言葉を投げかけた。

反射的にキリクに視線を向けかけ、意思の力を総動員してクライドに視界を固定する。きつときつと彼は真剣な顔をしている筈だ。そして多分——どこかほっと安堵している。

「ヨルナを、幸せにしてくれるならな」

案の定、真摯な声が聞こえた。目の奥がつんと痛くなる。

膝から力が抜けるのを阻止しながらも、どうにかしてこの場から逃げたい一心で視線をさ迷わせた。

「……ヨルナ、ちょっとおいで」

その狼狽に気付いたのか、ネリが扉にもたれたまま手招きする。口調は優しくかったが、有無を言わせぬその顔に、ヨルナはクライドを振り返りつつ、キリクの脇をすり抜けた。

決して彼の顔を見ないように。

後ろ髪引かれる思いのまま、ネリが扉をバタリと閉める。中から、当然だ——とくぐもったクライドの声が聞こえた。

ふう、と溜め息をひとつ溢したネリは廊下の反対側にヨルナを誘う。二人に聞こえないように十分に距離を取ると、彼はヨルナを覗き込んだ。

「クライドと結婚してしまって本当に後悔しないね? 今ならまだ

——」

「わかってる。わかってるけど、あたしは……」

キリクが好きだ。

キリクが好きだ。

——でもキリクはあたしを好きなわけじゃない。

見上げた兄はいつになく険しい顔をしていた。

「明日、父さんに——長に全てを話す。それまでによく考えるんだ」

《第一章》〈約束はお早めに〉？

人影も疎らな甲板に安心し、ヨルナは柵に寄りかかった。

ネリの言葉が頭に響く。

後悔などしつばなしだ。

どうしてあの時二人の話を聞いてしまったのだろう。

いや、どうして最初の時にキスを拒んでしまったのだろう。

押し潰されそうだった。

「あたしだって……」

クライドのように結婚相手を自分で選びたい。それが無理だったら、少なくとも自分の気持ちを伝えたい。

柵に身を預け海を眺める。

視界の真ん中、柵のすぐ近くのケルプの森が、かつてヨルナが溺れた場所だ。キリクが助けてくれた場所。

……キリク。

自分の気持ちをせめて知って欲しい。そしてそれこそが、ヨルナがキリクの求婚を拒む最大の理由だったことを言わなければ。

……それできっぱりと終わりにしよう。

そうでなければきっと、いつまでも心に靄を抱えたままだ。もしこのままクライドと結婚したとしても、キリクがヨルナの心に住み続けることになる。

無意識に身を乗り出し、ケルプを掴もうとして――。

「ヨルナッ……」

次の瞬間、ヨルナは真つ青な色を見上げていた。

十　十　十

衝撃はなかった。

温かい身体の上にいることはなんとなくわかっていた。

警告の叫び声が誰のものかも。

「……つてえ！ 何やってるんだ！ また溺れる気か！？ 助けるのは二度目だぞー！」

彼は、ごろり、とヨルナを脇に押しやると黒髪に手を突っ込みかき回した。甲板で敏捷に立ち上がったヨルナは相手を見下ろし、不意に自分勝手な怒りを覚える。

「もう放っておいてよ！」

剣幕に、ぽかん、と口を開けたキリクを見下ろし、ヨルナは沸き出す感情のままに喚いた。止めるつもりもなかった。

「もう十分！ もう十分よっ！ 義務感だろうが責任感だろうが知らない！ 優しくなんかしないでいいよっ！ あたしのこと、好きでも何でもなくせに！」

髪を縛っていた紐が激しいかぶりに飛んでいく。海風に煽られ潮に焼けた長い髪が舞い上がった。

「もういい加減にしてよ……忘れようって思ってるんだからー！」

眉根をきつちり寄せて、寝転んだままキリクが疑問の表情を作る。「知ってるのよっ！ 兄さんに言われたんでしょ！？ お守り御苦労様！ あたしにはクライドがいるから大丈夫よ！ 安心して好きな女の子に求婚しなさいよっー！」

胸が痛い。

我知らず身体を強張らせてしまい、肺一杯に空気を取り込もうと肩で息する。ぎゅつと服の胸元を掴んで、ヨルナは喘いだ。

「兄さんがなんて頼んだか知らないけど、迷惑だったら断れば良かったのよっ！ それを何度も……あたしはそんな同情とか責任感とかで求婚なんかして欲しくなかったー！」

目を白黒させていたキリクが急に半眼になる。

「……つまり、なんだ……？ お前は俺が義務感だけで何度も求婚するお人好しだとも思ってたのか？」

重く溜め息を溢したキリクは前髪をくしゃりと握り立ち上がると、

ヨルナを覗き込んだ。

顔が近い。カッと頬に血が登るのがわかる。

視線を反らしてヨルナは毒づいた。

「違つとでも言うわけ！？ あたし聞いたんだから！」

自分の耳を疑いたくても出来なかった。どこか簡単に納得出来たのは、キリクに好かれていえると思えなかったからだ。

からかうような表情をどう好意的に解釈しても面白がっているようにしか思えないし、何度も繰り返し求婚してきたことで断つても何の衝撃もないのだろうと思っていた。

それが違つと言うのか。

キリクの視線が頬に刺さる。穴の開くほど見つめられている気配に、もう正面を向くことも出来ず、ヨルナは下を向いた。

少し掠れたキリクの、耳に残る低い声が降ってくる。

「ネリに頼まれたとしてもな。好きでも何でもねえ奴に求婚なんてことするか」

…… そんな筈ないっ！

黙っているときすり、とキリクが鼻で笑う。

弾かれたように睨み、ぐつと奥歯を噛んだ。

見上げた先にある黒い瞳はけれど、想像と違って峻烈だ。その口角を挙げた笑みさえなければ近寄り難い程の。

—— 昨日もこんな顔してた……。

既視感にめまいさえ感じて、思わずよろめいたヨルナの腕をキリクが掴む。強い力で握られたまま、キツと視線を返し――。

「じゃ、あたしのことが好きとでも言うわけ！？」

「ああ、好きだけど？ 知らなかったか？」

揺らぐ真摯だった瞳に動揺を読み、ヨルナは目を見開いた。同時に、どつと身体に血が巡る。

「…… 知ら、なかった……」

「好きじゃなきゃ何度も求婚するわけねえだろ？　俺がそんなに加減な男に見えるか？」

ヨルナは小さくかぶりを振った。

だからこそ、義務感だと思っていたのだ。義理堅く、人情味溢れ、誰からも好かれていたヨリクだからこそ、ネリが頼んだと簡単に納得出来たのに。

それでは、ヨルナがしてきたことは何だったのだろう。

何度求婚されても応じなかった。自分ばかり好きで、愛されてもいないまま結婚するのが怖くて――淋しくて。

「そんな……だって……」

言葉が溢れ落ちる。小さく開けた口に荒れた指先を当て、ヨルナはこくりと唾を飲み込んだ。

「あたしは……キリクは兄さんに頼まれたからだ……」

「馬鹿言え。俺はお前をそのケルプから助けた時からずっと嫁にするつもりでいたんだ」

キリクの視線を追って、ヨルナは海を見つめた。

「ま、さっき言った通り、お前とクライドのことは祝福するさ。気にしなくていい」

「気にするわよっ！　気にしないわけがないじゃないっ！」

「ちゃんとおめでとうも言えただろ？　大丈夫だって。心配しなくてもお前たちの邪魔なんかしないさ」

ずっとキリクが離れていく。

その距離が、そのまま二人の未来に思えて。

ヨルナはキリクの襟元を両手でぐいっと掴むと――。
なんの躊躇いもなく彼にキスをした。

キリクの唇は乾いていて、驚愕からか少し震えている。視線を外さずヨルナは彼を見上げ続けた。

「……な、んで……」

触れあったまま、キリクがぼつりと疑問を溢す。見開かれ、少し

寄った黒い瞳。耳から頬にかけて真っ赤になっているのが視界の端に映る。

手はしっかりと彼の服を掴みつつ、ヨルナは唇から離れた。鳶色の瞳に強い生気を宿らせて、キリクを睨む。

「邪魔してよっ！ 言っとくけど人命救助じゃないわよ！？ き、キリクは溺れてたわけじゃないんだから！！」

どこかで声なき声がある。――照れている場合じゃない、と。今こそ、彼に伝えなければ。

「あ、あたしはキリクが好きなの！ ずっと好きだったのっ！！」
「なんだって！？」

「義務感と一緒にいてくれるのかと思ってたから、だからずっと、十三回も求婚断ってたの……。ほんとにごめんなさい……」

謝罪の言葉を呟いて、ヨルナは襟元から手を放した。顔から火が出そうだ。

自分が信じられない。どうかしている。そう、どうかしているのだ。けれど。

「十三回も断つという自分でもどうかしてると思うけど嘘はつけなかった」

くっ、とキリクが鼻であしらう。

啞然として見上げた先で、目を細めて声をあげながら笑い出した。
「じゃ俺も嘘は言えないな。十三回じゃなくて十四回。ついでにさつきのは二回目のキスだ」

「……は！？」

言われた言葉が理解出来ずに、ヨルナは随分と間抜けな声を出した。

「最初にヨルナが溺れた時、俺はお前にキスしてる。――人命救助の人工呼吸をキスに数えるなら、の話だけだな」

ここで、と甲板を指差してキリクは肩を竦めた。

「黙ってたのは悪かった。ネリや長がお前に選択の余地を与えるべきだと言ったし、俺もそうすべきかと思った。最も俺はあの頃から

お前を嫁にするつもりだったが、お前はまだ九歳だったから……」

思わず離れかけたヨルナは、キリクの掌に阻まれる。

「俺と所帯を持つつもりはないか？」

昨日、彼から言われた言葉。

近付いてきたキリクの瞳を見返し、ヨルナはゆっくりと睫毛を伏せた。

十 十 十

「——すまなかつたね」

木箱が積まれた、ヨルナ達の死角に大小の人影があつた。その大きい方が眉を下げながら肩を竦める。

「こうなるだろうと思つていたから問題ない」

小さい方——クライドが軽く笑う。

「最初に僕を助けてくれた時、彼女は言いかけたじゃないか。あの時からもしかしたらと思つていたから、想定範囲だよ」

「そう言ってもらえると助かるよ。巻き込んでしまつて悪かつたね」

ネリは幸せそうな二人を背後に溜め息をつく、眉間を揉んだ。

「僕としては残念だがな。とにかくにも《住まう舟》の民に伝が出来たのだから良しとしよう」

「ああ、なるほどね」

クライドが視線を転じる。船が水平線から滑るように近付いてくる。

「……ドレス目掛けて迎えが来たようだ」

巨大な船だった。そして一瞬でネリは悟る。

彼がもうここから出ていくつもりだということも。

明るく笑い声をあげて、ネリは甲板の二人を顎で示した。

「声をかけていけないのかい？」

彼の妹と親友は抱き合つたまま、幸せそうに微笑んでいる。それにクライドはおどけて端正な顔をにやりと歪めた。

「今かけたら邪魔者だよ、僕は。いずれ改めて礼をしよう」

船から縄ばしごが投げられた。それを片手で受け取り、クライドは足をかける。

「長ワグにも、突然の闖入者を温かく迎え入れてくれたことに謝辞と、挨拶も言わずに去る無礼に対しての詫びを伝えてくれるとうれしい」

「父さんには伝えておく。お礼は気にしないでいいよ。俺も妹のために君を利用したようなもんだから。ま、君が義弟にならなかつたのは残念だけど――」

口角を上げて悪戯めいた笑みをつくると、ネリは囁いた。

「いつでも歓迎するよ。交易の話も含めて、今度は本来の君で来るといい」

船に移り終えたクライドが顔を覗かせた。驚愕の表情を切り替えるとネリに微かに頷いて、ヨルナの一晩だけの婚約者は姿を消した。

《第一章》く約束はお早めに？

後日談――。

「ザクテンの王太子から！？　なんで？」

《住まう舟》の甲板に山と積まれた網。横付けされた船からはさらに太い紐やらロープが運ばれてくる。

何事か、と一族が集まる中、ネリが手紙を差し出した。

「ヨルナ、ほら」

文字に明るくないヨルナでも読めるような、極簡単な手紙だ。

それは、たった一文。

「――僕を振ったことを後悔するなよ、……………？　こ、これまさかクライド！？」

驚愕に叫ぶヨルナの横で、キリクが手紙と網を交互に見て、口をポカンと開ける。

「我がザクテンの王太子クライド殿下よりヨルナ殿とキリク殿の御結婚を寿ぐ贈り物でございます。公務に忙殺されてこちらまで出向くことが出来そうにないから、と。どうかお受け取り下さいますようお願いいたします」

ネリに手紙を渡した青年が柔和に微笑んだ。

「……思わぬ大物だったわけだ」

キリクが上擦った声で呟く。青年が苦笑し、さらに頭を下げた。

「また我々ザクテンの民より、王太子殿下を救命下さったこと心より御礼を申し上げます」

はあ、と気の抜けた答えを返し、ヨルナはキリクを見上げた。

「ネリ殿には例の件について双方の日程を合わせた上で一度お越しいただきたいと殿下が。こちらに詳しい書状がございます」

「例のつてなに？」

「交易の話だよ。まず父さんに話さなきゃだな……」

頭を掻きながら、ネリは肩を落とした。

「ここはまかせてお前たちは結婚式の予定でも話しあってるよ」

手で追い払われ、キリクがヨルナの肩を押した。

促されるまま、歩き出すと甲板の反対側で立ち止まる。すぐ近くにあのケルプの森があった。

それを見つめながら、キリクが口を開く。

「後悔してるか？」

キリクの低く密やかな囁きに、ヨルナは快活に笑うと背伸びをし――。

大好きなひとにキスをした。

《第一章》〈約束はお早めに〉？（後書き）

以上でヨルナを主人公とした《第一章》コールヤ湾のお話はおしまいです。《第二章》の舞台は内陸に変わります。《第二章》も読んでいただけると嬉しいです。それでは、ここまでお付き合い頂きありがとうございます。誤字脱字等なにかありましたら教えてください。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（前書き）

《第二章》になります。今回は《第一章》よりもかなり過去の話になります。最後までよろしくお願いします。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？

馬車がひとつ、ガタン、と揺れた。

むやみに汚すまいと窓枠を掴んでいたリーゼロッテの指はあつさり外れ、このまま馬車の外に突き抜けてしまうのではないかと思えるほど頼りない感触を座面が返してくる。慌てて掌を引き抜き、よりバランスを崩すはめになって顔からクッションに着地を決めた。

痛みはない。中身はなんなのだ？ それに、これは中に匂袋でも仕込んであるのだろうか。とても良い匂いがする。

柑橘類と、そう、二年前に死んだ母が好きだった花の薫りだ。ロツテの瞳に、そしてロツテの父親の瞳と同じ色をした花を母は愛でていた。こじんまりした庭にこれでもかと植えていたのだ。

不意にロツテは怒りを覚えた。

突然身形の良い男たちに囲まれた時も、突如馬車に押し込められた時も、動揺の方が大きかった。それに、貴人に逆らってはいけない、と周囲にも母にも常々教えられてきた。

しかし、いくらなんでもこれはひどい。説明もなしに——はたしてこの豪華な馬車で平民で汚れた仕事着のままのロツテが腰を下ろしていいのかどうかもわからぬまま——もうずっと走り続けている。汚しそうで怖かったから揺れる車内で立ち続けていた。強張った膝が反射的に立ち上がるうとしたロツテを座面に無様に突っ込んだままの姿で止めている。

そして、そのまま寝た。

＋ ＋ ＋

セトルはコールヤ湾に一部を面した森と湖が国土に点在する王国だ。今この国で貴賤問わず一番民の口に上るのは、先の戦の英雄のことだろう。

ダルト・ベッツイク。

彼は農夫ながら隣国ガヤの將軍を單身討ち取るという無謀かつ勇氣ある行為の末、故国に戦勝をもたらした。

目立たない容姿の青年だという。良く言えば朴訥、悪く言えば凡庸。故郷でも、あのダルトが……と誰もが言葉を失ったと伝わっている。

つい一月程前の話だが、噂は風を越す早さで国中を駆け巡り、セトルは戦の荒廃を忘れたかのように興奮に湧いていた。それはロツテを彩る生活も変わらない。

細かい、くずのような干し肉しかない肉屋に行けば、

「ダルトは今は王宮でもてなされているそうだ！」

と老いた親爺が話し、品数の少ない穀物屋に行けば、

「肉屋の話を信じるんじゃないよ、もう褒美の領地を与えられたそうじゃないか！」

と夫を徴兵されたおかみさんが話す。

村のあちこちで若い娘がダルトのような気骨ある男を旦那にしたいと話に花を咲かせ、村に残った男たちは酒場でダルトを誉め称えた。ロツテも会話に加わることがあり、誰も彼もが浮かれていた。

「薄い金の髪に灰茶の目をしてるんだって！」

「歳は！？」

「まだ二十歳らしいわ！」

「独身かしら？」

「素敵っ！！」

そう噂していたのは確か三日前。

何故、とロツテは自問する。

用足し以外に馬車から降りることすら許されず、囚人のような扱いを受けた。疲労から既に抵抗する気力はない。馬車を降りたのに、まだ振動しているような気がしていた。

固くなった首を捻りながらその建物を見上げる。

馬車から降ろされた先程はそこがどこだかわからなかった。二日

間水以外何も口にしていなかったから頭に霞がかかったようだ。

入り口を屈強な兵士が守る。今までロッテが目にしたどの館よりも大きく、荘厳で、林立した塔も多い。

「……おう、きゅう……？」

そこはセトル王国の要、王のいるセトル王宮だった。

呆然としたまま身支度を整えられる。継ぎの当たった、しかも汚れたままのドレスとエプロンはあっさりと剥かれ、風呂へと放り込まれた。

疑問を唱える間もなく纏れた髪を櫛削られ、ようやく軽食を与えられた後、ロッテの脳が急速に回転を始める。

見たこともないような豪奢な部屋。

嗅いだこともないような芳しい香り。

感謝祭で村中の料理を集めても足りない程の軽食。

着ていることさえ忘れてしまう軽い質感の滑らかなドレスに、足裏の厚くなったロッテの足を覆う靴にも煌めく宝石が縫い付けてある。耳には宝石と、首には繊細な金鎖。どちらも真つ青な宝石が揺れる。

年頃の娘らしく舞い上がったロッテだったが、帰ってきた思考のおかげで一瞬で冷えた。

何かおかしい事態に巻き込まれている。

青々とした生気の溢れる瞳を怪訝そうにしかめ、部屋の端に並ぶ女たちに疑問をぶつけたが、彼女たちは目を伏せたまま微動だにしない。しびれを切らし、問い質そうと姿勢を正したロッテの前に、今度は貴人が現れた。

忘れるものか。ロッテを馬車に押し込んだ男だ。

文句を言おうと口を開いた機先を制し、男はロッテを鋭い視線で眺めると満足そうに呻いた。

「それらしく仕上がったものだ。とはいえ、陛下も何を考えておられるやら。あのような下賤の放言など突っぱねてしまえば良かった。

「ただ」

「は？」

「ついて来るがいい」

促されたというよりは命令だった。培った庶民魂はロツテから文句を奪う。仕方なく後続き、唐突に――。

「これが余の娘か？ ルイーザの子か？」

ロツテはぼかんと壮年の男を見上げていた。

玉座に腰を下ろすセトルの王を。

「リーゼロツテと申す者です。確かにルイーザ・バウアーの娘だそうで、歳は十七ですから勘定は合いますな」

「ふむ……。ルイーザの面影が確かにあるな」

驚愕はゆるゆるとやってきた。

――余の娘って……。どういうこと！？

全ての音が耳を滑っていく。

王の――ハイダル・クローネス・セトル・ヴァハルフヘントの言葉を、狼狽したロツテは聞いていなかった。

――あたしの父親は王様だったの！？

母からは何も聞いてはいない。

村でも、ロツテの父のことに触れる者は誰もいなかった。ロツテ自身も母の口の重さから聞くことを諦めていたのだが。

……母さんがなんにも言わなかったのはそのせいなの？

ぐるぐると思考は空回りする。

――でも何で今頃……。っ！？

没頭していたロツテは突如、襟首を押さえつけられた。

大きく喘いだ途端、気骨心がむらむらと沸き上がり、自分を押さえ込む男を睨み付ける。ロツテは平民だ。だが、心まで貴人に好きにさせるつもりはない。

その挑戦的とも言える目付きに貴人の顔色がどす黒く変わる。

「おいっ答える！」

さらに押さえつけられ、ロツテが怒りで爆発しそうになった時、

静かな、けれど背筋が栗立つ程に冷酷な声が空間に響く。

「その者は余の娘ではなかったか？」

ハイダルが瞳を眇めた。背後で息を飲む音がする。

「その手を不敬罪に問うても良いのだぞ？」

言葉尻は優しいものだというのに、この寒々しさはどうしてだろう。これが威厳というものか。

ロッテの首から重みが消える。

「へ、陛下、私は――」

「黙れ」

片手を振ると、貴人はすぐごと玉座の間を出ていった。

……助けてくれたのかしら。

とりあえず感謝を込めて見上げると、ハイダルは柔和に微笑み返した。

「十七年放っておいた父を許して欲しい」

「許してつて別に……」

許すも許さないもない。いまだ実感が沸かず、ロッテは混乱の極みにあった。

「詫びのかわりに良い話をしよう」

玉座のハイダルはロッテと同じ青い瞳を細め、笑みを深める。

「お前は余の娘である王女マルゴットのかわりにダルト・ベッツィー
ークに嫁ぎ、ザクテン領に向かえ」

＋　　　＋　　　＋

しん、と静まり返った玉座の間にはたくさんの貴族がいた。だが、誰より早くロッテは口を開く。

「は……はい？　今なんて言いました？」

聞き返したもののロッテは正確に把握していた。

ザクテン領はガヤとの戦で焼かれた野も多い、内陸の領地だ。そこへ王女のかわりに行けと言う。

しかも——嫁げ、と。

「え、ええええ!？」

思わず腰を浮かし、驚愕に叫んだ。

「冗談ですよね!？」

礼儀も恥も外聞も忘れ、ハイダルに詰問する。

「冗談は好かぬ。あのような荒れ地にたった一人の王女を向かわせるわけなからう。ましてや農夫に王女をくれてやるわけにはいかぬ。お前はちよと年回りも良いし、下賤の出だからベツツイクと話も合おう」

汗が落ちる。息が上手く吸えず、パクパクと口を動かした。

蒼白な顔をしているがロツテはショックを受けたわけではない。青々とした瞳を怒りが支配している。

——あたしは便利な道具なの!？」

つまりは王女の身代わりとなれ、と言いたいのだ。

——突然連れて来といてふざけんじゃないわっ!!

伏せていた身体を今や完全に起こし、玉座を睨み付けたロツテをハイダルは意に返さなかった。

「余の娘らしく毅然と向かえ」

「余の娘!？」 一体いつあたしが承諾したって言うわけ!？ お断りよ!!」

敬語も忘れて叫んだロツテは、だんと足音を響かせた。玉座の間にいる貴人たちが、ぎよつとするように目を見開いた。

「大体あたしは王女じゃないわ!! あんたの娘だつて証拠があるわけでもない!! 絶対に嫌——……」

激高に口が回らず、ぎりり、と奥歯を噛み締めた時、柱の影から覗く少女にロツテは気付いた。

ふつくらとした頬に染みひとつない肌は艶々と輝き、栗色の髪は毛先まで整っている。ロツテのように痩せてもいないし、栄養の行き届いた肢体は若い鹿のように伸びやかで、満ち足りた少女だ。

密集した睫毛が縁取る大きな鳶色の瞳でロツテを上から下まで観

察し、愛らしい少女は眉をしかめていた。

ハイダルがロツテの視線を追い、ひとつ頷く。

「余の娘マルゴツトだ。お前の異母妹になるな」

純粹に不思議そうな表情の中にも、瞳に小さな蔑みを悟って、ロツテの頬は赤くなる。

羞恥心ではない。

周囲の貴人もまた、同じような表情を浮かべ、健康的な――ぶくぶくと肥えた者すらいる。

村では食べる物すら事欠く日々だった。ガヤとの戦は働き手を容赦なく奪い、帰って来ない者も多いと言うのに。

「……あんたたちが始めたガヤとの戦のせいで国民が飢えてるってのになんであんたたちはそんなのうのと贅沢してんのよ」

ぼそり、と小さく呟いた言葉だったが、玉座の間は成り行きを見守る静寂が支配していた為に、その場の全ての者に聞こえていた。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。次話は現在執筆中です。
遅筆なので全く進まず……がんばります。誤字や脱字等気になるところがありましたら、教えてください。よろしく願います。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？

貴人に対する暴言ともとれる言葉に目を細めたハイダルだったが、ロツテは声を抑えたまま低く唸った。真っ直ぐに睨みつけ不敵に嘲る。

「きれいな服着ておいしいもの食べて、誰がそれを作ってるか考えたことなさそうね。それを作ってる方がどんなに苦しんでるか知らないからそんな風にのほほんとしてるんだわ」

腹が立つ。

「外を歩いたことあんの？ ガヤの奴等が何をしたのか知ってる？」
腹が立つ。

「国境近くの村や町がどうなってると思う！？ 心から安心して笑ってるひとなんていないわよ！！」

微動だにしないハイダルと眉間にしわを寄せた貴族を見回し、ロツテは甲高く笑った。

「馬っ鹿みたい。こんな奴等の為にみんな倒れるまで働いてるなんて。それもこれもあんたたちが危機感もなくこんなところで贅沢三昧してるからじゃないの。さっさと戦を終わらせてくれてたら考えたけど、でも——」

美しいドレスにどれ程の働き手が関わっているのだ。一着で村の食事が賄えるくらいの価値があるのではないか。

先程のテーブルいっぱいのお食事。運んできた女はそれを軽食だと言った。ふんだんな調味料、瑞々しい果物や野菜。舌でとろける柔らかい肉。

どれもこれも贅沢な品だ。

煌めく宝石があしらわれた首飾りををぶちり、と千切ると、ロツテはぱいっと紅い絨毯に投げる。激怒でめまいすら感じながら、ぎりりと唇を噛んだ。

……あたしはこんな奴等の命令を聞きたくない！

ロツテの母はかつて言った。

『偉い人は偉いだけの責任があるの。どんなに悪く冷たく見える人でも、みんなの生活を良くするために政をとってくれてる。貴い人たちに従いなさい。彼らはわたしたちを導いてくれるのだから』

けれど、ロツテを導こうとするこの王宮の者たちは戦があつたのにも関わらず国民を省みない者ばかりではないか。大体、国を救つた英雄を下賤だと言う者たちが国を動かしているのだ。

「こんな国の為にあたしは結婚なんかしない。その王女サマが行けばいいのよ。あたしは嫌」

つん、と顎を反らし、ロツテはそっぽ向く。

王に逆らつたのだ。身の危険はとうに感じているし、不敬罪に問われる覚悟も出来ている。

ただ、ロツテは唯々諾々と従うような従順さは持ち合わせていなかった。

十 十 十

良い匂いを撒き散らし、クッションが跳ね返った。

狭い空間にむせかえる程なのは、ロツテが先程からずっと投げ続けているせいだ。

今どの辺りかもわからないが、既に行程の三分の二は進んでいる。もうザクテン領に入ったに違いない。

あれからロツテはすぐに馬車に押し込められることになった。嫌みなことに嫁入り道具は全て揃え終えられていた。

胸やけする程の香りに深く溜め息を溢す。

鍵のかかった窓からは顔を出すことすら許されなかった。けれど最初に乗った時より幾分扱いはまともになってはいるから我慢しようと思う。少なくとも用足し以外にも一行が休憩時に馬車から降りて深呼吸することは出来たし、夜はきちんと上級の宿に泊まった。風呂にも入らせてもらえるし、食事だつて出る。

「……腹が立つことにはわりはないけど、ま、命があっただけマシか」

ずんつと沈む柔らかな寝台に腰かけ、横の卓から紅い果実を取り上げたロツテは自嘲気味に呟いた。かし、と小さく音をさせて噛むと甘酸っぱい香りと瑞々しい果汁が口に広がる。

……お金つてほんとあるところにはあるんだね。
果実を咀嚼しながらもそんなことを思う。

「村唯一の旅籠とは全然違うわ」

ロツテが住んでいた村を離れたのは今回が初めてだ。ただ、村の旅籠に急な客人が来た時は手伝いにも行っただし、また客人の多くは村人と経済状況の変わらない平民だった。

「そっか……あたしの父さんってほんとに王様だったんだなあ……」
食べながら行儀も悪く寝転んだ。

そもそも、ロツテは母が何で生計をたてていたのか知らない。薬草を育てるだけでは二人が生きていくことは難しかった筈だ。

お金は大丈夫か、と聞くと、母は複雑そうに微笑むだけだったが、生活を出来るだけのものが支給されていたに違いない。それは多分、ロツテや母ルイーザが大切だったわけではなくて――。

『あなたはわたしからもあのひとからも愛されて産まれてきたのよ』
どうして自分には他の子供のように父親がいないのか。ロツテが問い質した時に、そして折に触れて、母は優しく、けれどどこか寂しそうな笑みを浮かべてそう言った。

今ならその理由がわかる。

「あたしは父さんに愛されてなんかなかったんだね……」

まず真つ当な父親なら十七年もの歳月に母子を無視したりはしないだろう。母が亡くなった時ですら、連絡を超越さなかった。

しかも会ったばかりの娘を道具扱いし、終戦の後始末――彼等にとつての――の為に嫁に行かせたりなんかしない筈だ。

ロツテは愛らしい異母妹を脳裏に浮かべた。

セトル王女であるマルゴットは友好の証にコールヤ湾に面した海

洋公国フェルナの公太子と婚約していると聞く。ただ父ハイダルがマルゴットではなくロッテを選んだのは政治的な配慮ではなく、愛娘をたかが農夫にくれてやるのが嫌だったのだ。

「ダルトも気の毒なひとね。たった一人で勝利をもぎとったつてのに、感謝もされてないなんて」

寝台から立ち上がり窓を開けた。三階の部屋は到底抜け出せる高さではない。埋めることを諦め、中庭を見下ろし、果実の芯をばいっと放る。せめてこうしておけば何年か後にはまた果実が戻ってくるだろう。

——ダルトはどんな男かしら？

王宮でロッテが知ったのは噂ほどあてにならないものはないということだ。

ハイダルには二人の子供がいる。王太子であるシュリヒトとマルゴットだ。

村にだつて噂は聞こえてくる。壮年の偉丈夫である王と神々しさすら感じさせる王妃。兄シュリヒトは王妃の血を色濃く受け継ぐ美青年であるのに妹王女はまるで似ておらず醜いと言われていた。ところがどうだ。確かに系統は全く違うが、マルゴットはとても愛らしい少女だった。

であるから、ロッテが村でしていた噂話はあてにならない。

「……ま、百聞は一見にしかずって言うし、どうせ明日明後日にはザクテンのお城に着くでしょ。それに最後の機会が残ってるしね」
ともかく今はこの旅から逃れられないのは確かなのだから。

十 十 十

ザクテン領に入つて三日たった。ロッテは不意に馬車の震動が止んだことに気付き、身体を起こす。

「着いたの？」

呟いたと同時に馬車の扉にかけられた鍵が外され、外側に向けて

開かれる。明るい光が射し込むと同時に、ふっと何かの臭気が漂ってきた。

臭気と言ったが臭いわけではない。どこか懐かしい、けれど濃い匂いだ。

……土？ の匂い、だわ。

ザクテン領主の住まうケント二ス城前の地面はむき出しなのだろうか？ 今まで三つの城を経由し、六つの街道筋の宿に泊まってきたが、全て馬車に合わせ煉瓦が敷かれていたのに。

とにかくこの狭い空間に別れを告げようと立ちかけたロッテだったが、人の形に光が陰る。

扉の枠に手をかけ、中を覗くシルエットは道中の従者の細身のものとは違った。

「——あんたがおいらのお嫁さん？」

目を細めて顔を確認かめようとして、ロッテはぽかんと口を開けた。

「ダルト・ベッツィーク……？」

「そうさ。——司祭さまが待ってたんだ。早く来いよ」

こここのところ鼻持ちならない宮廷の貴族しか接してこなかったためか、その口調に涙が滲みそうになったが、それよりも——。

「司祭！？」

「……？ なんであんたが驚いてんだ。結婚すんだろ？」

ぐいつと腕を捕まれ、引つ張り降ろされる。

「おいらは王女様なんか全然望んじやいなかったけど、仕方ねえしな」

「なんですって！？」

驚愕に見上げた先にあったのは、白金の髪に燦々と光を受け、日焼けしそばかすも浮いた、苦笑を溢す農夫の青年だった。

故郷に帰ったら、ロッテは村の皆に訂正して回ろうと決意していた。

ダルトは——目立たない容姿どころか純金の輝きを頭に抱く、印

象的な男だった。灰茶の瞳はやや細く弧を描き、正統派には程遠いものの、笑顔が実に良く似合う。

馬車からケントニス城の中のこの教会まで、ダルトはころころと表情を変えている。しかも寡黙どころか能弁で快活。凡庸と言った酒屋の親父に見せてやりたいとさえ思う。

呆氣に取られたまま隣を歩んでいたロツテは口を挟む隙もない。

……変わったひとね。躁の気があるのかしら？

自身も母の薬草作りを手伝っていた。その為かロツテは病に詳しい。余り村に降らない母の変わりに病状を診て、薬を与えるのはロツテの役目だった。

——ザクテン（ここ）にタルガの苗があればいいんだけど……つてちがーう！！

彼は言ったのだ。

『おいらは王女様なんか全然望んじやいなかったけど』

余程の行き違いがあったのか。

父ハイダルという言葉ではまるでダルトが、王女が欲しい、と言ったかのようなだった。マルゴットは海洋公国フェルナに嫁ぐために、代わりに白羽の矢がたてられた、とロツテは理解していたのだが。

それが違うというのなら、何故自分はここにいます。

恭しく司祭の前で頭を垂れながらも、ロツテは考え続けていた。

ハイダルが持たせた書状を侍従が司祭に渡し、封が解かれる気配がする。

「ふむ……陛下に承知したと伝えておくれ」

柔らかな老いた声と重そうな衣擦れの音に、ロツテの隣に立つダルトの長身が沈んだ。横目で伺うときれいと思える横顔が目に入る。片膝をついた姿に一瞬息を飲んだ。

まさに農夫と言えるようなチュニツク姿なのに、まるで物語の騎士のように堂々と見えるのだから。

老司祭がゆつくりと口を開く。

「陛下のお言葉だ。心して聞くように——余ハイダル・クローネス・

セトル・ヴァハルフヘントは、先の戦の功を労い、ダルト・ベツツ
イークにザクテン領を与える。今この時より、ダルト・ザクテン・
ベツツイークと名乗るが良い。また、余が娘リーゼロッテ・バウア
ーを褒美として授ける」

ぎりぎりとお歯を噛み締めながらその言葉を聞く。我慢だ、我慢、
と自分に言い聞かせる。機会はずある。その時まで、じっと待つ
のが最善の方法だ。

「ただし……なんと！ 陛下は本当にこのようなことを！？」

紙が微かに音をたてる。

ハイダルはまだ何か隠していたのだろうか。ロッテが眉をひそめ
ると同時に、視界の端のダルトの顔が歪んだ。その憎悪とも呼べる
苛烈な表情に目を奪われる。

「そのまま伝えよ、とのお言葉です」

侍従が冷ややかに答え、司祭が再び言葉を紡いだ。

「い、言っておく。ザクテン領を任せるとはいえベツツイーク共々
登城は許さん。彼の地で静かに暮らすが良い」

ほっと息を吐いた。これ以上ない朗報だ。あの男の顔など見たい
と思う筈がない。

最も、ダルトはどうだろう。これ以上屈辱的なことがあるだろう
か。

ザクテン卿を名乗り、セトルでは二番目に広大な領地を頂く者が、
王に拝謁出来ない。

やはり心の中では農夫ゆえに蔑視しているということだろう。も
やもやとした気持ちかわいてくる。

とはいえ政治のことは皆目わからないロッテだったが、何故ダル
トにザクテン領が下賜されたのが、戦の舞台になったが、ザクテン
は豊かな地だった。

「変なの……」

「リーゼロッテ殿？ 何か？」

呟きにいぶかしそうに司祭が応じる。慌てて、ロッテは俯いたま

ま首を振った。

まだだ。

まだ待つのが得策だ。あと少しの筈なのだから。

……多分、きっと、この後よ。

それまでの時間はさっさと進めるに限る。でないと村に帰るのがさらに遅れる。

「いえ。どうぞお話を続けて下さい司祭様」

「そうですか……？ では、これよりザクテン卿ダルト殿とリーゼロッテ嬢の婚姻の宣誓を行います。異のある者がいるならこの場で名乗り出るように」

待ち焦がれた機会がやってきた。

「あたしは嫌よっ！！」

「おいらは嫌だっ！！」

寸分変わらず重なった声に、思わずロッテは婚約者の顔を見つめた。啞然としたその顔は、まるで鏡を見るかのようにロッテと同じ表情を浮かべていた。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？

「信じられないっ！ 自分から言っというて!!」

「おいらは言つてねえよ!!」

「馬鹿言わないでよっ！ おかげさまでどんな目にあつたと思つてんのよ!!」

「おいらが欲しかったのはあんたじゃない、耕す土地だっ!!」

「はあ!? あんたが馬鹿な要求するからあたしが王女サマの代わりにこんなとこまで来る羽目になつたんじゃないっ!!」

「……お、お二人とも……」

「だからおいらは農民だから欲しかったのは自分の土地だけだ! こんな広い領地もらつたつてもてあますだけだつて!!」

「じゃ、あの馬鹿王にそう言や良かつたんでしょ!」

「お、落ち着いて……」

「言つたさ!!」

「じゃなんであたしはここにいるのよっ!!」

「おいらにだつてわかんねえよっ!!」

肩で息をしながら罵り合いを始めたロツテとダルトに、呆氣にとられながらも宥めようとしていた老司祭が一喝した。

「黙りなさいっ!!」

元はといえば、ロツテも敬虔な教徒だ。雷に撃たれたように動きを止める。そして、ダルトもきつとそうなのだ。直立不動のまま、恐れるように司祭を見つめていた。

「異がある者と言いましたが、当人の拒否は今回の婚姻では認められておりません。陛下直々のお声掛かりですから」

神にも等しいと言わんばかりの司祭の言葉にロツテとダルトの顔が曇る。

「そんな……それだけが唯一の望みだつたのに……」

「おいらだつて……」

呟くロツテにダルトが同意した。

がつくりと崩れ落ちたダルトが不意に気の毒になる。

ガヤとの戦は一年余りに渡り続いた。最初はセトルの兵士だけが参戦する小競り合いだった筈なのに、国中から男たちが集められるまでいくらかからなかった。

特にザクテン領やロツテの住んでいた村のあるネスリーア領は、戦地に近いだけあってかなりの数の男が戦へと駆り出された。戻つて来なかった者も多い。

そんな大きな争いの一番の功労者——英雄と言われるダルトに対して、望まぬ結婚を強いるなど、到底考えられる所業ではない。

——農夫だから何だっていうのよ！ その農夫がいるからご飯が食べれるっていうのに！！

あれ程否定するならば、きっと本当にダルトが王女を欲したわけではないだろう。

英雄に対する過分な褒美という体裁を整える為にロツテとダルトは巻き込まれたのだ。

これが憤らずにいられるだろうか。

憎しみにも似た苛立ちを目前の司祭に向ける。

「今日限りで信仰なんてやめてやるわっ！ 権力におもねる宗教なんてあたしは認めないっ！！」

声高に叫んだ自分を、ダルトが信じられないものを見るかのように目を見開いていたことに気付かぬまま、ロツテは司祭を睨めつけていた。

「ふう………なんとか宣誓は逃れられたわね」

老司祭は怒って帰ってしまった。

ロツテはダルトを見下ろし、満足の笑みを溢す。

「さつきはごめんなさい。ちょっと——」

「取り乱しちゃって？」

肩を竦め肯定すると、ダルトが膝をはらって立ち上がる。有に頭

一つ分背が高い彼が今度はロツテを見下ろし、にかり、と笑った。
「おいらも謝る。それと、助かったよ」

その笑顔はひどく精悍なものだ。

穏やかな灰茶の瞳がさらに細められ、焼けて荒れた薄い唇から真っ白な歯が覗いている。どちらかというと柔和な細い目とそばかすが頼りない印象を与えていたのに、目の前の青年に目を奪われる。

チュニツクから伸びた太い腕に、さすが英雄と呼ばれる男だ、とロツテはふと思い赤くなった。

「じゃ、じゃあ、あたし村に帰るね！　ここにいてもしょうがないし、家も気になるし、鍋だつて出しっぱなしで来ちゃっ——」

「なりません」

硬い声がロツテを遮った。

「……………あんたまだいたの？　司祭さま帰っちゃったんだから、あんたも王宮に帰れば？」

王都からついて来た、壮年というよりはまだ青年の域を出ない、王の侍従だ。確か、エーアリヒ、という名だった気がする。

二十歳だというダルトよりも歳上だろうが、それでも二十五には届かないのではないか。にこりもしない美貌は王太子シュリヒトと並んでも遜色ないものだ。

そのエーアリヒが無表情のまま、祭壇に立った。

「わたしが宣誓を執り行います。それに此度の婚姻後も……………わたしはここに残り、ザクテン卿の補佐に当たることになっておりますので、ご心配なさらずに。帰る必要はありませんので」

「え！？　必要ねえよ！？」

ダルトが眉間にしわを寄せる。

「ではザクテン卿にお聞きします。あなたはこのザクテン領を陛下に代わってたった一人で治めることが出来ると言つのですか？　領民から納められた税の使い道、政のなんたるかをご存知だと？」

顔色ひとつ変えず、冷酷な美貌が怯んだダルトを見据える。

「わたしは陛下より直々に補佐を命じられました。あなたの側近と

いうことになります。わたしの主は陛下です。――わたしが宣誓を執り行います」

口を挟む隙すら与えず、冷徹な声が結婚の宣誓を宣言する。頭を垂れることも忘れ、立ち尽くしたままロツテもダルトもそれを聞き、そして不本意ながら夫婦となった。

十 十 十

「とんだことになったなあ……」

困惑混じりの声にロツテも不承不承頷いた。

寢台は四人や五人と一緒に寝れそうな大きさだったが、ひとつしかない。

慌ただしく結婚し、書類に署名させられた。ロツテの名前は、リーゼロツテ・ザクテン・ベッツィークに変わり、公にはザクテン卿夫人と呼ばれるようになってしまった。ロツテ自身は何一つ望まなかったにも関わらず。

食事と身仕度が終われば空には既に星が瞬いていた。二人は領主夫妻の部屋へと押し込まれ、現在に至る。

寢室は広かった。調度品は重厚で、全てに掃除が行き届いている。ただ、落ち着かないだけだ。

むつつりとしてクッションを抱いたまま、ロツテは長椅子の背に行儀を無視して腰かけている。

「どうする？」

その言葉にクッションを放り投げ、ロツテは肩を竦めた。

「どうするって、あたし帰りたいんだけど……」

「おいらもそうして欲しいよ。あんたはなんも知らないまま連れて来られたんだなあ」

がしがしと髪を掻き回したダルトは眉尻を下げた。疲労困憊なその様子に同情を覚えるのは人として当たり前だ。

「あたしはリーゼロツテ・バウアーよ」

怪訝そうに首を傾げたダルトに、ロツテは笑ってみせた。

「とりあえず、自己紹介でもどう？ あたしのことなんにも知らないでしょ？ あたしだってあんたのこと、よく知らないし……」

「まーな。おいらは王さまの娘が嫁に来たいって言ってるってことしか聞いてねえし……」

顔を見合わせ、ロツテもダルトも苦笑った。

床に直接腰をおろしたダルトは寝台を背もたれがわりに片足を投げ出しどかりと座る。それを見下ろし、ロツテもまた座り込んだ。

床は厚い絨毯が敷かれ、座り心地は申し分ない。

「お互い騙されたってわけね」

「そうなるなあ。——おいらはダルト・ベッツィーク。出身はザクテン領だけど、領都ルタールじゃなくてもっと国境に近い村で農夫をしてた。年は二十だ。将来はここを元の豊かな小麦畑にしたいと思ってる」

「あたしはリーゼロツテ。友達はロツテって呼ぶわ。十七歳よ、夏生まれ。今一番の望みは自由で、将来の夢は自分の薬草園を持つことよ。出身は隣のネスティーク領の村なの」

灰茶の目を見開くダルトの前で大きく伸びをすると、ロツテは絨毯を叩いた。

「なんか落ち着かないわ、この部屋。あたしの家が一軒入っちゃうぐらい広いし、汚しちやいそうで怖いし……」

「ロツテは王宮で育ったんじゃないかねえのか？ 王女だろ？」

冗談でしょ、と呟き、ロツテは自分を指差した。

実際、こんな肌触りの良い夜着を着るのは誘拐されてからである。丈が長くて鬱陶しいから裾を切ってしまいたいが、高価な生地に怯んでしまったぐらいだ。長椅子に座るのも気が引けるし、調度品に触れるのも恐ろしい。

ダルトは違うのだろうか。

彼は綺羅綺羅しい格好をしていない。普通の、ロツテも知っている庶民的なチュニツクだ。

とはいえ、裾のほつれた服や修繕の跡のあるブーツを履いてもなお、ダルトは泰然として見える。それこそ英雄の証かとも思いながら、ロツテは言葉を紡いだ。

「王女に見えるならあんた目がおかしいわよ？　あたしは王女じゃない。あの王サマの血を引いてるだけなの。それすら嫌だけど」

「ま、確かに王女らしくはないよなあ」

白い歯が夜目に眩しい。くつくつと溢すように笑ったダルトに軽く眉を上げる。

「……どういう意味よ」

「言葉の通りだけど。最も、上品で虫も殺したことありませんっていうあの王女様よりはおいらは好きだけどな」

「あ、あんた——……まあいいわ。で、今後どうするつもり？」

頬に血が昇るのがわかった。それを見られたくはないから顔を背けたロツテは、けれど一瞬の悪戯めいた笑みと瞳の輝きを見てしまった。

それはロツテを狼狽えさせるのには十分の代物で、何故狼狽したのかもわからないまま唇を噛む。

沈黙が寝室に溢れた。ゆらゆらと灯された蠟燭からの光でダルトの横顔に陰が出来る。

「——ここを豊かにしたらロツテを自由に出来ると思うか？」

ダルトから聞こえた声は今までとは明らかに違う。真摯な声にゆっくりと振り返り、ロツテは答えた。

「そうね。あの調子じゃ多分無理なような気もするけど……あたしは、帰りたいわ」

村には母の墓標もある。誰か花を供えてくれているだろうか。ロツテの家は村から外れた森にあるから、母はきつと寂しい思いをしているに違いない。

待つてる親類もいなかったが、それでもロツテの故郷はあの村だ。村人はロツテに良くしてくれたし、友人もたくさんいる。皆、心配しているのではないだろうか。

寂寥感に胸が締め付けられた。

だが正直、まだダルトで良かったと思う。英雄だが奢った様子もなく、貴族のように思いついてもいない。

それに少なくともロッテの帰りたいという意味を尊重してくれる気があるようだ。

「じゃあその方向で話を進めるか。それまではおいらの奥さんとしていことになるけど、まあ仲間同士仲良くしてくれ」

気さくに笑んだダルトにロッテも気が楽になる。

「それがいいかもね。じゃあそれまであたしはあんたを手伝うわ」

欠伸を噛み殺して、ロッテは投げたクッションを取るために四つん這いで部屋を移動した。クッションをぐつと掴むと胸に抱き込む。「そうしてくれると嬉しいや。ともかく荒れ地ばかりで大変なんだ」足を組み直し、立て膝に顎を乗せたダルトも小さく欠伸をした。

「耕すくらいしか出来ないわよ？」

ロッテは小麦の作り方などわからない。村では小麦を作っていたし、刈り入れは毎年手伝っていたが、だからといって小麦に向いてる天気や土壌などには無知だ。

ただし薬草を作っていたから土いじりは好きである。

「それでいいさ。ま、なるべく早く自由にしてやれるように努力するよ」

ふっ、と笑ったダルトは頭をこてりと横に倒す。

ロッテもまた眠気にぼんやりしたまま、疑問を口にした。

「……ねえ、なんで一人でガヤに乗り込んだわけ？」

ダルト・ベッツィークといえば、セトルの英雄だ。

単身、敵地に乗り込みガヤの將軍の首を取った。浮き足だったガヤは総崩れし、セトルは領地を守りきったのだ。

でもなぜ？ というのが、村でもよく話されていた。大抵、気骨があつたからで終わるこの話。だが、本人が目の前にいるなら聞いてみたくなるのが好奇心だ。

薄く目を開いたダルトはロッテを見ると、眉を下げた。

「農閑期が終わっちまうから、かな」

戦は大抵、収穫期を避けて行われるものだ。

あっさりとダルトはそう口にする。とまた目を閉じる。それが何となくつまらなくて、ロツテは先を促した。

「それで？」

「それでってそれだけけど？」

「は！？ 農閑期終わるからってだけで將軍の首を取ったの！？」

驚きにロツテはクツションから顔を上げた。動きに合わせてふわりと良い匂いが漂う。

ダルトがまた薄目を開けた。

「だっておいらは農夫だし。作付の時期は大切なんだよ」

心底不思議そうなその声音に、ロツテの感想は驚愕を通り越す。

「呆れた！ あんた英雄ってよりただの馬鹿よ、それ」

「英雄って呼ばれる程のことをしたわけじゃねえんだけどなあ……」

うつらうつらと始めたダルトだが、ロツテの気持ちは収まらなかった。

ダルトの顎が膝から落ち、焼けたうなじが露になる。だが、寝台がひとつしかないから、寝るようにも言えず、押し黙ったままロツテは天井を仰いだ。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（後書き）

長々とおつかれさまです。書きためていたとはいえ、色々と加筆修正していると以外と進まないものですね…なるべく早く更新したいと思います。次話もよろしくお願いします。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（前書き）

ちよつとだけ残酷な場面が出てきます。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？

「ぶあつくしょんっ！！……………あれ？」

自分のくしゃみで目が覚めた。いまいち状況が理解出来ないまま、ダルトは部屋を見回す。

少し先にある踞った人影に、ああ、と額を押さえた。途端、動きに負けて肩からぱさりと落ちたのは寝台に畳まれていた薄い上掛けだ。自分に掛けられたらしい上掛けとクッションを抱く人影を交互に見つめ、ダルトは苦笑すると立ち上がる。

カーテンを引き忘れた窓から柔らかい光が注いでいる。月光を背に、身体を守るように小さくなつて寝ているロッテに、ダルトはしばし立ち尽くした。

——小動物みてえだなあ。

捲し立てるように話す少女に抱く感想ではないが、今は随分と印象が心許ない。

……………おいらなんかじゃなくて誰かもつと良いのがいただろうに。馬車の扉を開けた時、素直にきれいな子だなあ、とダルトは思った。特に、生き生きとした青い瞳に一瞬引き込まれた。思わず出た言葉に自分でもおかしみを感じる。

『あんたがおいらのお嫁さん？』

馬車の中にセトル王の娘がいることは事前に知っていた。だが、それでも確認してしまうくらい驚いたのだ。

正直、マルゴットのような清楚上品な娘が乗っているだろうと考えていたので、彼女の言葉使いにおやつと首を傾げかけた。活発そうな姿は村の娘たちと大差なく、それゆえにダルトはきれいだと思つた。

働き者が美しいという認識は、農夫には共通だ。勿論、彼女が働いているとは思えなかったが——王女だと思つていた——それでも快活そうな娘で、司祭を怒鳴り付けた剣幕には思わず拍手しそうに

なつたくらいだ。

「おいら、ほんとにロツテみたいな子を嫁さんにもらうようなことしてねえんだけどなあ……」

呟きながら、目を閉じる。

「おいらは、人殺しなんだ……」

十 十 十

小競り合いが終わった平原のそこかしこで呻き声がしている。

途中で見えなくなつた幼馴染みを探す為、夜間にそつと天幕を抜け出していたダルトは唇を噛んだ。

人が死んでいく。

なのに自分には何もしてやれない。

松明を掲げ、ダルトは平原を歩く。遠く幾つか松明が揺れているのは、同じように友人や肉親を探す両国の兵士がいるからだろう。地に伏した顔を照らし、そして安堵することを繰り返しながら、耳を閉ざすことも出来ず。

——死んでくのはおいら達平民ばかりだ！

悔しさで歪んだ視界。そしてついに見付けてしまった。

「り、リモン！」

すがり付いた先の身体には血がこびりついている。激しく上下を繰り返す胸に生きている安堵を覚えながらも、その呼吸の荒さに恐ろしくなった。

切羽詰まったダルトの声にリモンは腕を伸ばす。慌ててその手を取ると、リモンはゆっくりと微笑んだ。

「あーあーしくじった……今年俺……お前と小麦を植えらんねえなあ……」

一人二人と見知った顔が欠けていく。それが戦では当然のことだった。それでもリモンが死ぬのは不思議な感じすらする。涙も出ない。

「もうすぐ種蒔きの時期なのになあ……」

あと一月も過ぎれば小麦を植える季節だ。去年は到頭小麦を作れなかった。村に残った女と老いた男たちだけでは十分な小麦は収穫出来ないだろう。

今年こそ、と意気込んでいただけに、リモンが悔しそうに呻く。

なんて答えたらいいかわからずに、ダルトは首を振り続けた。
「戦はいつになったら終わるのかなあ……」

ダルトの顔を素通りし、リモンは虚空を見つめている。思わず肩に手をかけると、うつろにリモンは薄く笑った。

「母ちゃんとレジーに謝ってくれるか……帰れなくて悪いってな……」

「リモンッ!!」

目を閉じようとしたリモンを慌てて揺する。

「お前はもう帰れ……戦なんか勝手に終わらせて帰っちまえよ……俺みたいに死んだらなんもなんねえよ……」

くつと奥歯を噛み締めて、ダルトはリモンの肩を強く掴む。痛みを覚えた様子がないのは、もう痛覚すら麻痺しているということか。目の前でリモンの命が溢れていくのをダルトはどうすることも出来ずにいた。狼狽えるダルトをあやすように繋がれた手をぎゅっと握った幼馴染み。

「黄金の波をもつかいこの目で見たかったなあ……」

「リモン……!!? リモン……!!」

もう叩いても揺すっても、幼馴染みは動かなかった。

松明が消えても、ダルトはリモンの側に膝をついていた。

戦から帰ったら結婚するんだ。そう嬉しそうに話していたリモン。昼過ぎまで隣で剣を奮っていたリモン。

共に種を蒔き、小麦を育てて来た兄のような幼馴染み。

そのリモンが今際の際に言った言葉に、ダルトは決意した。

「——おいらは帰るよ、リモン。帰って種を蒔くんだ。戦なんか終

わらせてやる」

ダルトはすつと立ち上がると、セトル兵士の天幕とは別方向に――セトルとガヤの国境に向けて歩き出す。

目指すはガヤの夜営地。

まさか、たつた一人で、しかもうだつの上がない農夫が、ガヤの夜営地奥深くまで見つからず入り込めたなど、奇跡と言う他ない。ガヤの將軍は勇猛果敢だ、と聞いていた。

だが、粗末な剣はあっさりその首に吸い込まれ、ダルトは軽く捻りを加える。叫ばれると面倒だから、喉を潰し、肌身から離さない鎌で首を掻き切った。

血が溢れる。

その場にあつた上掛けに首を包むと、滲んだ血が白を赤く変えていくのがいつそ愉快だった。

生まれて初めて、明確な意思で人を殺した。生きるか死ぬかの戦場で流されて相手を傷付けてきた時とは全く違う。

……こんなに簡単に人は死ぬ。それがわかつてるから貴族は誰も前線に出ないんだ。

ザクテン領主が死んだのは偶然だ。流れ矢に当たったのが死因だった。たくさんの死者のほとんどが近在のかき集められた平民で。

……もうこれ以上は付き合つてらんねえよ。

来た時のように淡々と夜営地を後にしたダルトは、見咎められることなくセトル兵士の天幕に戻った。

「どこへ行つてた!!」

ダルトは帰つて早々に上官に捕まった。

上官と言っても彼はザクテンの兵士だ。出自は農民である。それがわかつていながら、ダルトは彼に詰問されるがままになっていた。「なんだそれは……?」

粗方文句は言い尽くしたのか、やっと上官はダルトの持つものに

注意を払った。

血塗れに無表情のまま、ぱいっと手に持つものを放り投げる。地面に二、三度バウンドしたそれはごろりと上掛けから出てきた。

何事だろう、と起き出して来ていた兵士たちが息を飲む。

「將軍だ……」

「ガヤの將軍の首だ……」

ざわめきはさざ波のように広がり、兵士たちを奇妙な高揚感が支配する。

「明日一番にこれを掲げて降伏を迫ればいい。それで戦は終わる」

誰一人首を拾わない中、最初に動いたのはダルトだった。

あわあわと動転する上官を見限り、上掛けに首を包みなおす。重いそれを肩に担いだ。

「ど、どこ行くんだ？」

同じ村の青年がそう聞いた。

「奥の偉いさんのところへこれを置いてくる。——リモンが死んだ。おいらは帰ってえ」

リモンが……、と背後で呟く声を無視して、ダルトは夜営地深くまで歩いて行った。

翌朝、平原に首がひとつ掲げられた。

その日の午後には休戦協定が結ばれ、セトルとガヤで一年余りに渡り繰り広げられた戦は一応の終わりを迎えた。誰もが肩を叩きダルトを労うが、一晚経ってしまうとダルトを襲ったのは後悔だった。

……もう一日早けりやリモンは助かったんだ。

勿論、成功の確率は限りなく低い。小競り合い直後であり、前線に立つ者全てが戦に飽いていたから、見張りの兵士の気もどこかうるんだっただと思う。それでも、リモンが死んだ事実はダルトを打ちのめしたと言うのに。

そのままダルトはセトル王宮へと連れて行かれた。

真つ黒の服を着た王だという壮年の男は威圧感があつたが当然畏

敬の念を抱ける筈もなく、色とりどり華美に飾った王妃や王太子、貴族たちに落胆さを感じる。

……こんな贅沢ばつかしてる奴らのためにリモンが死んだ。

内心煮えくり返っていたダルトに、王は褒美を取らせる、と言った。

「冗談じゃねえ！ ご褒美なんかいらねえよ、おいらを帰してくれっ！」

「お前にザクテン領と余が娘を与えよう」

叫ぶダルトを一切無視し、王は告げた。

「いらねえよ！」

吐き捨てたダルトの望みが叶うことはなかった。

＋　　　＋　　　＋

……もつと鼻持ちならねえ女が来るかと思ってたんだがなあ。

ダルトは手に持つ上掛けをロツテに掛けようとして、ぱさりと下に落とす。はあと小さく溜め息をついた。

彼女をクツションごと抱え上げる。思いの外、軽い身体を慎重に寝台に下ろす。

なるようになれ、と投げやりでさえあったのに。思わず、帰してやる、とまで言ってしまったのはどうしてだろう。

ん、と小さな呟きを漏らしたロツテは、まるで小さな子供のように頼りない。幼い寝顔をじっと見下ろし、もう一度溜め息を溢してダルトは忍び足で寝室を出た。

「ま、実際問題帰してやるって言った以上はおんなじ寝台じゃ寝れねえよなあ……」

しん、と静まり返った廊下には人っ子一人いない。

ザクテン領自体が人口が少なくなってしまったし、ケントニス城に侍女や下男を一頃のように雇う余裕もないからだ。最も農夫だったダルト自身は身支度に手伝いを必要とはしないし、食事や洗濯だ

って自らす。ただ、領主としての体面があると言われ、仕方なしにセントニス城に住んでいる。

「でもこんだけ広いと人が少ないのが余計目立つよなあ。抜け出すにはちょうどいいけどさ」

ダルトは真つ直ぐに外に向かい、使用人が使う裏庭の納屋に入り込むと、農具がたくさん積まれた間でごろんと横になった。

「早いとこ豊かにしてあいつを自由にしてやらなきゃな……」

呟きながら、すうつと眠りに落ちる。最後に脳裏に浮かんだのは、何故か不安気に瞳をさ迷わすロッテの姿だった。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（後書き）

次話もなるべく早く投稿します。読んでいただきありがとうございます。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（前書き）

更新遅くなりましたが、第五話です。書きためたものだったので、推敲する内になんだか話が多くなってしまいました……。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？

身体が痛むのは柔らかな寝台に寝ていたからだ。

昨夜自分で移動した覚えはない。寝ている間に運ばれたのだと思
い至り、ロッテは耳まで赤くなる。

「……ダルト……？」

ロッテは恐る恐る横たわっていた寝台から降りると、周囲を見渡
した。

誰もいないがらんとした寝室。

「どうせ出てくなら起こしてくれたっていいのに」

開け放たれた窓から入り込む風と土の匂いを存分に嗅ぎながら外
を見下ろした。

ケントニス城は低めの丘の上に建つ。上階にある寝室からはなだ
らかに下る目抜き通り沿いの街並みと、剥き出しの大地が一望出来
た。

かつては大地を埋め尽くすかのように、小麦畑が地平線まで続い
ていたに違いない。

ザクテン領といえば、良質な小麦の産地だった。ロッテの育った
ネスリーア領もそうだが、土が適しているからなのか、グラオベン
大陸の内陸では小麦の生産が盛んである。

さらに背骨山脈から吹き下ろす風を、孕み回る風車が小麦を挽く。
その小麦で作られた酸味のある日持ちもするパンはセトルの人々の
主食でもあった。

今は違う。

ガヤは容赦なく青々とした畑に火を放ち、焦土としてしまった。

人々は食糧に事欠きつつ何とか暮らしているのが現状だ。

——ここが元の豊かさを取り戻すのに何年かかるかしら……。

それでも照りつける太陽の下、彼らに諦めている様子はない。炎
に巻かれ、崩れた風車小屋が無惨だったが、石や煉瓦の土台だけが

残った辺りで動く人影は、修理のために働く人々だろう。

太陽の高さが中天を越えているのを見て、随分と寝過ごしたことを知る。寝台の脇に置かれた水盆でロッテは身支度を整えた。

とりあえず隣室のクローゼットから一番地味なドレスを――濃茶にダークグリーンで葡萄の刺繍が施されているので多分とても高価だろうが――選び、四苦八苦しながら着る。平民のロッテはパニエやコルセットは元々つける習慣はないから、裾が長くなってしまい動き難い。

一步廊下に出た途端、ドレスの長さに足がもつれ、ロッテは溜め息混じりに悪態をついた。

「あーもうっ！ 切っちゃおうかな……」

誰の姿もない廊下では諫める者もないし、何より短い方が働きやすい。余った裾部分をまた何か別のものに作り替えればいいだけだ。

裁ち鋏を探すにはどこに行けば良いのか広すぎる城に皆目見当がつかないまま、ロッテは歩き出した。

「奥様！」

「お、奥様……！？ あたしのこと？」

突如現れた侍女の言葉に目を白黒させ、ロッテは自分を指差した。侍女は切羽詰まった様子で駆け寄ってくる。

「奥様のお連れになった方と領主さまが言い争っておられますっ！」

「連れてきた……？」

「黒ずくめの綺麗な男の人ですわ！」

エーアリヒか。

端正な美貌の青年が脳裏に浮かび、ロッテは眉をしかめた。昨日から、もつと言えばセトル王宮を出発してから彼には散々煮え湯を飲まされて来た。

その度にロッテの怒りはふつふつと沸いている。ダルトも会って早々エーアリヒの洗礼を受けた。

だが、どうもダルトとエーアリヒの言い争いなど想像が出来ない。勿論、どちらのことも良く知っていると云える程の関係ではないが。陽気かつ穏やかなダルト、口を開けば静かな冷酷な声で嫌みを言うエーアリヒ。二人とも怒鳴ることなどあるのだろうか。

「どっちかって言えば連れて来られたのはあたしだけけどね……で、どこで？」

せめて止めるなりしようと口にしたロッテに、侍女は怪訝そうに顔を歪めるも先導してくれた。

＋　＋　＋

「おいらに向いてねえし、あんたはその為にザクテンに来たんだろ？」

「しかし、ザクテン領主として学んでいただくことは少なくありませんが？」

「おいらはおいらのやり方でザクテンを豊かにする。おいらがわかんのは畑のことだけだ。政なんてそれこそ畑違いだろ？」

二人が言い争っている、と侍女は言った。だが、ダルトもエーアリヒも語気は穏やかだ。

一瞬、拍子抜けしたロッテだったが、取り巻く者たちの顔に怯えが見てとれるのを見て、階段を降り急ぐ。近づくにつれ、二人に表情と呼べるものがないことに遅まきながら気付き、ロッテは途中でたたらを踏んだ。

ダルトとエーアリヒが醸し出す空気は誰も邪魔させまいとするかのように激している。

そこはケントニス城の広い表玄関ではなく、広大な荒れ地へと続く、使用人が使う裏の出入口だった。

「言い訳は聞きかねますが？」

「おいらがいつ言い訳を言った？ 皆がそれぞれ得意分野で勝負すりゃいいだろ。おいら一人が出来るようになったところでザクテン

が豊かになるとは思えねえな」

「しかしそれでは示しがつきません。貴方には率先して仕事をしていただくかなければ——」

「だから率先して畑に出てるんだろ？」

……すごい。

ダルトはエーアリヒと渡り合っている。どころか、むしろ押している。

現にエーアリヒが一瞬言い淀んだ。

「……どちらへ？」

ダルトはその間を逃さない。出入口に向け歩を進めると、光を背に振り返った。表情のなかったその顔がずっと色を変える。

「ってわけで、おいらは畑を耕してくる。——奥さんは？」

階段で立ち止まったままのロッテに、ダルトは柔らかな笑みを見せた。

細められた灰茶の瞳も声音からも、周囲を怯ます冷たさはなりを潜める。

気付いていたのか。誘われたように一段二段と降り、ダルトに駆け寄った。

「あ、あたしも行くわっ！ あたしに出来ることも城の外に——」

「ある、だろ？ んじゃ着替えが必要だなあ。ドレス、似合ってたきれいだけどそれじゃ泥まみれにはなれねえし」

につ、と小さく口角を上げたダルトの賛辞に顔が火照る。

男性に褒められた経験がないわけではない。だがそれはさらりと受け流せる程度のこと、ロッテが頓着したことはなかった。彼らとダルトでは何が違うのかわからぬまま、頷きかけたロッテだったが。

「なりません。リーゼロッテ様にも領主夫人として学んでいただくことがあるのです。——お二人とも自覚なさって下さい。ザクテン領はセトル王国の中でも最大の領地、たとえ伺候が許されていなくともこの地を治める為にはやらなければならぬことが多いことも

「ご想像いただけるでしょう？　なにより、現在のザクテン領は戦の影響もありますから、素人のあなた方を導くのがわたしの仕事です」
「それがあんたが率先してやる仕事か。ま、悪くないがそれをお願いしたちが聞いてやる義理はねえ」

ロツテを庇うように背後へとまわし、ダルトが薄く笑う。

「とはいえ、おいらにもロツテにも責任は発生するしなあ。妥協点は日が暮れてから話し合えばいいだろ？　まず必要なのは今年の収穫だ」

「ごはん、ないものね……」

去年の収穫も少なかった。備蓄はすべて貴族の懐へ消えていき、平民に満足に行き渡ることはない。

ロツテは多分まだマシな方だったが、それでも腹を満たした覚えはない。

「ここらの畑に早いとこ種を蒔かなきゃなんねえ。とりあえず、夜まで待つてろ」

「……………わかりました」

不承不承頷いたエアリヒを一瞥し、ダルトはロツテの手を引くと外へ出た。

眩しい太陽の光が、思っていた以上に荒れた大地を隅々まで照らしている。

「ここいらは男手をだいぶ取られちまったから、畑は放置されたんだ。炎にやられたのは収穫待ちの小麦だけじゃねえし……………寝るのは正直どこでもいいさ。屋根さえあればいいんだからな。だが飯はなきゃ死んじゃう」

溜め息をひとつ溢して、ダルトがロツテを見下ろした。

「ロツテを自由にするにはまだだいぶかかると思う。だけど、おいらはここを絶対に元の豊かなザクテンに戻すさ」

「だから手伝うってば。一人でも手があつた方がいいでしょ？」

につ、とロツテはダルトを見上げ、口角だけで挑戦的に笑んだ。それに微笑し、ダルトは視線を荒れ地に向ける。

「これからなんだ。おいらは種を蒔く為に帰って来たんだから……」
灰茶の瞳を眇め、そう呟いたダルトに下男が駆け寄って来た。

「あるだけ農具をかき集めましたけど、あの、どうしますか？」

まだ出入口に立つエーアリヒとダルトを見比べた下男は迷っているようだ。それに気安い笑顔を浮かべ、ダルトは指示を出す。

「んじゃ、城の作業は中断していいから動ける奴はみんな畑に出て耕してくれるか？」

「え、俺たちもですか!？」

「だって飯がなきゃ困るだろ？ 頼むな」

首を捻りながら城に入っていく下男を見送り、ダルトは遠巻きに見ていた侍女を呼ぶ。

「悪いんだけど奥さんに何か動きやすい服を貸してやってくれ」

「動きやすい……」

「みんなが着てるのでいいわよ」

侍女の服は踝がまる見えの短いスカートだ。けれど、ロツテも少し前まで同じ長さのスカートを着ていた。いつも通りの長さの方が動きやすいに決まっている。

怪訝な顔を隠そうとしない侍女のお仕着せはチャコールグレーの被りのドレスで、き나りのエプロンが前を覆う。王宮で見たようなフリルのついた装飾の多いものではなく、どこまでも実用性を追求した簡素なものだ。

「じゃそれで。よろしくな。——ロツテ、おいらは先に行くから、着替えたらいつらに混じって耕すの手伝ってくれ」

近くで鋤を奮う農夫たちを指差したダルトに、ロツテはこくんと頷いた。

「わかったわ」

手を振るダルトを見送り、ロツテは侍女に向き直る。

「えっと……」

「ミネラです、奥様」

栗色の髪をひとまとめにし、はしばみ色の瞳をした侍女はロツテ

の意図を悟り、名を名乗る。

「奥様はやめてよ。敬語もやめて欲しいわ。そんな偉い身分じゃないし。あたしはロッテよ」

「——わかりました。敬語はともかく、お名前で呼ばせていただきますが……本当にこの服を着るのですか？」

「そうよ……？」

どう考えても今着ているドレスは働くのに向いていない。先程まで裾を切つてやれ、と思つていたことはおくびにも出さずに、ロッテはミネラを見返した。

「このドレス、汚したら洗うの絶対に大変だし、もったいないしね。なにかおかしい？」

変なものを見るかのようにしばみ色の瞳を見開いたミネラだったが、徐々に笑顔に変わる。

「わかりました、ロッテ様。では、ご案内しますね」

「よろしく！」

渋い顔を、というより無表情の中渋い目をするエアリヒの脇を通り、ロッテはミネラについて行った。

リネン室の一画に侍女の制服は置いてある。誰もいないことを確認し、ロッテはばさりと茶のドレスを頭から抜いた。

アイボリーの下着姿のまま制服のサイズを探し始めたロッテに、慌ててミネラがリネン室の扉の鍵を閉める。

「ろ、ロッテ様。ここで着替えられるのはやめた方が……」

「でも部屋まで戻つてたら時間かかるし。カーチフはある？」

「そちらに……」

カーチフは四角い布で頭を覆う被り物だ。太陽も燦々と照りつけているし、髪を人目に晒すのは良くないとも言われている。

最近では屋内で着けている女性は少ないが、それでも農婦たちは皆がカーチフをしているし、ロッテも外で庭仕事をする時は邪魔な髪を纏めるのに都合が良かった。

手早く制服とカーチフを身に付け、ロッテは身体を動かした。腰

を捻り、腕を回し、深呼吸までする。

「あー楽ちん！ やっぱこういうのがあたしには合ってるわ」
ドレスより遥かに自由度の高い制服に満足し、ロッテはほっと息を吐く。着なれた緩さはまるで村に戻ったかのように嬉しいし、どこからどう見ても侍女にしか見えまい。

「変わった方ですね、ロッテ様は」

ロッテの準備運動を見て、ミネラが呟いた言葉は呆れより喜色が強かった。

当然、貴族らしいと言われるより良い。血筋だけは王の娘だが、根っからの平民であるロッテにとっては最高の誉め言葉だった。

土の匂いを胸一杯に吸い込んで、ロッテは嘆息した。

——ここが豊かになったら、あたし帰れるんだ。

ダルトを手伝い、それを待つつもりだ。

もう一度土の匂いを嗅いで、ロッテは周囲を見回した。

少し先に大地を耕す農夫の集団がいる。多分、近在の農民だろう。男も女も年嵩の者ばかりだ。

その農婦の一人がロッテに気付いた。カーチフを被った農婦は眩しそうに目を細め、ロッテを手招きする。

「ぼさつと突っ立ってんじゃないよ。——あんた新入りかい？」

ぶつきらぼうながら温かい声音とふくよかな身体つきの農婦に近寄り、ロッテは軽く頭を下げた。

「ええ、よろしく。ロッテよ」

「あたしはルーザさ。その鋤持ってこっち来な」

大地に置かれた鋤を持ち上げ、ロッテはルーザの背中を追う。

「あんたにはここからあっちまで耕してもらうよ、いいかい？」

「まかせて！」

快諾したロッテは慣れた手付きで鋤を持ち上げると大地に振り下ろした。たいした力を入れなくとも、ぼふっと土が返される。

それを繰り返すとルーザが感嘆の声をあげた。

「筋がいいじゃないか！」

「村で手伝いをしてたのよ」

額に浮いた汗を拭い、ロツテは得意気に笑む。

「じゃあ、まかせたよ。あたしはあつちを耕すから、なんかあったらそこらの男どもに聞くといい」

「わかったわ！」

それからしばらく、ロツテは一心不乱に土を耕した。

時折、姿を現すみみずやもぐらを殺さないようにしながら、ルーザに指示された大地を耕し終わると、ロツテは顔をあげた。

まだまだ荒れた大地は多い。ロツテが耕した場所など猫の額にも届かないくらいだ。

けれど、少しでもダルトの、ザクテンの人たちの助けになればいい。ここが豊かになれば、皆が腹一杯にごはんを食べられるのだ。

思った瞬間に、小さく腹の虫が鳴った。

……誰も聞いてなくて良かった。

ほっとしながらルーザに手を振る。彼らも粗方終えたようで、徐々に集まり始めていた。

「ロツテ！ こっちに来なっ！」

大きく手を振ったルーザに近寄ると、彼女は労うようにロツテの背を叩く。

「種を撒くのは明日だよ。明日も来るんだろ？」

「そのつもりよ」

にこりと笑ったルーザはロツテを農夫たちの元へ連れて行った。

「あんた新顔だな。ここらじゃ見かけん顔だ」

「あの王女について来たんでしょ？」

年嵩の農夫たちの言葉に答えに窮して、ロツテは曖昧に頷いた。まさか本人だとは彼らも考えていないようだった。

「性悪だつて話じゃねえか。実際はどうなんだい？」

「……あの……えっと……」

顔をしかめながら聞かれ、ロツテはさらに困る。今さら名乗り上

げるのもどうかと思って、答えにつまる。

そこでルーザが出てくれた助けにロツテは穴を探したい気持ちになった。

「答えづらい質問しなくなっただけいいだろ？ そんなことわかりきったことだよ。ダルト様は昨日の夜は納屋で寝てたんだよ。どうせ性悪王女に追い出されたんだろうよ」

最初に自分がそうだと、言っただけで済まれば良かった。思わず頭を抱える。

「ひでえことするよなあ」

頷きあう農夫たちにロツテは意を決した。

先伸ばしにすればするだけ、恐ろしいことになりそうだと。

「えっと、あの、ちょっと聞いて欲しいんだけど」

注目が集まったところで、ロツテは深呼吸ひとつすると口を開いた。

「あたしが――」

「奥さん泥だらけだなあ」

ロツテの血の気がさつと引いた。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（後書き）

なるべく早く推敲を終えたいと思います。誤字脱字感想は随時募集中です！

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？

「なんだみんな変な顔して？」

ぱくぱくと喘いだロツテは、ダルトの間の悪さに目眩すら覚えた。

……あ、あんたがばらしてどうすんのよ！！

ルーザの表情も、他の農夫たちも信じられないものを見るかのよう
うに、驚愕を浮かべている。

それはそうだろう。散々陰口を叩いていたのに、本人がその場に
いたのだから。

「顔にも泥がついてら。ほら、こっち向いてみる」

ダルトが手を伸ばし頬の泥を拭ってくれたが、ロツテはされるが
ままに立ち尽くした。

——どうしょ……。

ばつの悪い思いは多分お互い様だ。ルーザたちはロツテ以上に狼
狽しているかもしれない。

おどけたように肩を竦め、へらつと笑ってみる。

「えっと……ごめんね。あたしがその王女だつたりして」

しかし、彼らの強張った顔に変化はない。ロツテは心の内で嘆息
した。

……やっぱり最初に言つとくべきだったわ。それか、侍女の服を
着なけりゃ良かった。そうすればルーザさんたちを嫌な気持ちにせ
ずに済んだのに。

沈んだ気持ちを隠しダルトを見上げる。

「——とりあえず、そろそろ戻るからロツテを迎えに来ただけど。
いいだろ？」

気まずい雰囲気を感じているのかいないのか、ダルトは柔和な笑
みをルーザたちに見せた。彼らが戸惑いがちに、それでも安堵して
頷く。

直後、ぐいっとロツテは引つ張られ、たたらを踏みながら歩き出

した。ダルトの背から背後のルーザたちへと視線を移すと、彼らは一様に目を反らし、下を向いたり、空を見上げたりする。

小さく溜め息を溢し、申し訳ない気持ちで眉を下げた。

「疲れたなあ。今日は終いにして、おいらたちは早めの夕食だ。どうせ夜はエーアリヒとの話し合いだしな」

言うが疲労ひとつ見せず、大地を踏むダルトの背に視線を戻したロツテは鋭い声を出す。

「昨日の夜、納屋で寝てたって本当!？」

言葉の勢いのまま手を振り払ったロツテにダルトは向き直ると頭を掻いた。それを肯定だと判断し、ロツテの声が半音低くなる。

「おかげさまであんたを寝室から追い出す性悪王女だって言われたんだけど」

しかも、状況からして思われても仕方ないのだ。

貴族というだけで悪感情を抱かれる昨今。結婚初夜に英雄であるダルトが納屋で寝ていた事実と、気位高いであろう王女という身分が、ピタリと収まるべきところへ収まると、性悪と判断されてしまうことは容易に想像出来る。

ダルトはしれっと、悪びれる様子もなく、口先だけで謝罪を口にする、口角を上げた。

「そりゃ悪いことしたなあ……でも、隣で寝るわけにやいかねえし、大体見てみる。注目の的だぞ? ほら、手」

振り返るとルーザたちは二人を注視している。監視にも近い視線にやや気圧されつつも、ダルトは彼らに好かれていることがロツテにはわかった。

不承不承そのダルトの手をとると、ゆっくりと歩き出す。

夕刻の茜色の光が大地を染めていく。二人の影は長く、寄り添うように伸びていた。すでに気の早い一番星が東の空にぼつんと輝いている。

……大きな手。

ダルトの掌は節くれていて硬く、熱かった。ロツテの手がすっぱ

り収まる大きさで、父親のいなかったロッテはそんな経験は初めてで、どうしてもいいかからなくなる。

不意に繋いだ手が汗と泥にまみれていることが気恥ずかしくなった。

城の出入口までは極々緩やかな斜面だ。その僅かな距離が信じられない程長く感じるのは、ダルトと手を繋いでいるからだと気付いて、ロッテは狼狽した。

急に心臓が拍動を早める。

——慣れてないから、慣れてないからよ!!

小さく首を振ったロッテに何を勘違いしたのか。困ったように小さくダルトは笑いを溢した。

「ま、今夜からは何か対策を考えらあ。まさか本当に夫婦になっちまうわけには行かねえしな」

「そ、そうね……」

ダルトが何を考えて納屋で寝たのかを思い至り、ロッテは真っ赤になりながら頷くしかなかった。

＋　　＋　　＋

「それで、わたしの仕事はいつ始めさせていただけののですか？」

質素な——といってもロッテの以前の食事と同じ——夕食後、ダルトとロッテとエアリヒの三人は領主の執務室にあたる部屋で陰悪な空気を醸し出していた。

「そうは言っても、ザクテン領にまず必要なのはごはんの確保じゃないの？ 収穫しなきゃ始まらないでしょ」

設えられた長椅子に座り、ロッテは顔をしかめたままエアリヒに応じる。ロッテは好きでザクテン領主夫人になったわけではないが、肩書きが責任を生むことを知らないわけではない。

『偉い人には偉い人なりに責任があるの。民を導く責任が』

母が言った言葉は多分父を指していたのだろうが、それは領主で

あつても領主夫人であつても同じことが言えるだろう。豊かになつたらここを去るつもりであろうと、それまで責任は全うするつもりだ。

ただし、優先順位をつけるならばまずは収入源の確保が一番である。そしてそれは多分ダルトの考えと変わらない。

見上げれば、執務机の角に腰掛けたダルトがゆつくりと頷いた。持っている紙を手遊びに、折ったり開いたり、ひらひらとさせながら、遠い目をする。

「去年の収穫量自体が少ないからな。……今年、少なくとも去年以上の収穫が必要なんだ。じゃないと皆が餓えて死んじまう。それくらいあんたにもわかるだろう？」

窓際でエーアリヒは目を伏せた。その表情は低い位置のロッテからは丸見えだった。譲歩しようとする気配すらない無表情にロッテは一瞬で沸騰する。

「ええ、そう——」

「わかるわけないでしょ、ダルト。この男は貴族なんだから、戦だろうが飢饉だろうが満腹しか経験してないわよ！」

吐き捨てるようにロッテは口を挟んだ。

装飾ひとつない黒い上衣に黒い下衣は比較的身体に沿ったものだ。そこから見てわかる通り、エーアリヒは一見華奢な身体つきをしている。ロッテ自身は女性の平均よりも背が高いが、エーアリヒの上背はそのロッテより僅かに高いくらいで、男性にしては小柄と言えるだろう。

それでも彼は王の側近くに仕えてきた男だ。満足に食べていない筈がない。

「落ち着けて。食つてることと知らないことは同じじゃないだろう」
ロッテを諭すように柔和に微笑んだダルトだったが、次にエーアリヒに向けられた顔は冷笑だった。

「知らないなら知るべきだし、知ってるならおいらたちがまずしなきゃならないことを議論する意味はねえよな？」

冷たい笑みを受けて、エーアリヒが瞬間身動きをする。それを意外に思いながらもロツテはエーアリヒがなんと答えるか次の言葉を待った。

「……そうでしょうね。けれどこの話し合いはお互いに妥協点を探る為に設けられたものではないですか？」

——そうよ。このままじゃ平行線だわ……エーアリヒには折れる気はないみたいだし……。

正直に言えば、ロツテはエーアリヒを無視してしまえばいいと思っている。彼は鼻持ちならない貴族であり、平民の気持ちなどわかる筈のない満たされた生活を送ってきた。

ダルトはその点とても誠実だ。エーアリヒを一刀両断するでもなく、話し合い、解決へと導こうとしているのだから。

ふう、とダルトが息を吐く。

「まず種を蒔くのが第一だ。だが、領主の仕事もやらなきゃなんねえ。だから、昼は農夫で夜は領主で良いんじゃないか？」

ぽんつと提示された良案にロツテは確かに、と感心する。成る程、種蒔きは昼間のうちにしか出来ないし、夜は畑は真っ暗で折角耕した畑を踏み荒らすのがおちだ。

妥協案に頷くと思われたエーアリヒだったが、無表情のまま首を振る。絹糸にも似た黒髪が優美に舞うのすら腹立たしい。

「なにもザクテン領主が率先して畑に出ることはありません。問題は山積みなのですから」

無感動な声音で静かに反論するエーアリヒは美貌の分、つくり物めいている。

「領主が自らやらなきゃならない程荒れてるって思ったりはしないわけ？」

怒りを声に滲ませるも、エーアリヒはロツテを齒牙にもかけず、ダルトを真っ直ぐに見つめている。腹立ちまぎれに深く溜め息をついたロツテの隣に、執務机から腰を上げたダルトがどさっと座った。「ロツテの言う通りさ。戦から……帰って来ない奴が大勢いるって

のに。ザクテン領は人手不足なんだ。あんたはそれがわかってねえ」
肩をぽんと叩かれ、ロツテはダルトの横顔を見る。引き結ばれた唇は声をかけるのを躊躇う程、周囲を拒む強さがあった。

ロツテの放心にも似た表情に気付かぬまま、ダルトは強くエーアリヒを見据える。

「だから下男や侍女を開墾にまわしたのですか？」

「そうさ。いらねえだろ、実際。おいらも——ロツテも自分のことは自分で出来るさ」

確かにロツテは使用人を必要とはしない。彼らに月に払う給金は無駄と言えは無駄だ。

「では解雇すればよろしいのでは？」

瞳を眇たエーアリヒは薄く笑う。嫌みに見えるその笑顔はいつそ清々するくらいわざとらしいものだ。

ダルトもまたゆつくりと微笑んだ。

瞬間、やや横へ移動した。ロツテは腕に広がる鳥肌を擦る。

威圧感はない筈だ。けれど、穏やかな微笑だけで圧倒されるのはどうしたことか。

「馬鹿か、あんたは。そんなことしたら反感買うだけだろ？　こう言やいいさ。——ザクテンは貧乏になっちまったから毎日三食は食えないし、侍女や下男も雇えねえ。だが、お前らをクビにするのも忍びない。空いてる時間を畑に出してくれるなら今までと同額の給金を出したいと思う、ってな」

蔑みを隠そうともせず、ダルトはエーアリヒを嘲笑った。その後、彼の口から出た提案は至極簡単なもので、人手不足を補うばかりか、解雇を回避し、人心を掴むもので。

侍女や下男を辞めさせたとしても彼らに再雇用先の宛は少ない。戦の舞台となったザクテン領では仕事自体が少ないのだから仕方ないことだ。解雇すれば彼らを見捨てることになるのなら、ダルトの策は最善だろう。

「しかし、それこそ給金を払う余裕はありませんが。ザクテン卿の

体面もありますし」

後者は放っておけと思うが前者は何となくロツテにも理解出来た。給金を減額しても今回はしょうがないのではないかと思いつながら、それでは貴族の理屈を認めることになる。当然、ロツテにも多分ダルトにも貴族のように自分の懐に溜め込むつもりは毛頭ないが、給金を下げれば生活が立ち行かないのも知っている。侍女や下男の給金の額が如何程かは聞いたことはないが、だからといって平民と大差あるとは考えられない。

切り抜ける良い方法があるのだろうか？　ダルトは表情ひとつ変えることなく、今も手に持つ紙をひらひらとさせていた。

そこに文字と判が押されていることに、ロツテは既に気付いている。一時もじつとしていない紙から内容を読み取るのは困難だし、もし読めたとしても他人の手紙を読む趣味はロツテにはない。

「体面なんてそれこそおいらは気にしないさ。どうでもいい。気にしてたら、いつまでたっても黄金の波は戻ってきちゃくれねえよ」

「黄金の波……？」

聞き慣れない言葉をおうむ返しに呟くと、ダルトは目尻に冷たい名残を残しながらも柔和に笑んだ。

「夏から秋にかけて背骨山脈から吹く風がな、小麦を揺らして畑を駆け抜けていく。それをこころじゃ黄金の波って言うんだ。きれいだぞ、早くロツテにも見せてやりてえ」

先程の遠い目にも似た、けれど明るく輝く瞳に思わず大きく頷くと、ダルトが破顔する。つられたように何度も首を縦に振った。

「見せてやるから待ってるよ？　——というわけで体面を気になんかしてらんねえんだよ。ほら、エアリヒ」

「……なんでしょうか？」

ダルトは手に持っていた紙をエアリヒに放る。紙は不規則な軌道を描きながらも、窓際のエアリヒまで届いた。

「あんたの王に、向こう五年、ザクテン領は税を納めなくていいって確約をとった。おいらは税を下げるつもりはねえから、徴収した

分で賄えるだろ？」

「え……？　なんで……？　だってこんなに荒れてちゃ税金下げないじゃないの……？」

エーアリヒもまた微かに緑の瞳を見開いている。まさかダルトがそんなことを言い出すとは思ってもみなかったし、貴族すら驚くことをするつもりなのだろうか。

「今までだってなんとかやってきただろ？　そりゃ取り立ては厳しくするつもりはねえし払えねえなら仕方ないけどな」

長椅子に沈んだダルトは苦しそうに眉を寄せた。

「仕方ねえんだよ。大体下げて誰がここらを整備するんだ？　誰が戦で働き手を亡くした女子供や年老いた両親に援助する？　粉を挽く風車の修理は？　焼き払われた家をどうやって建て直す？　みんな領主の、おいらの仕事だ。そもそもっておいらはただの農夫だから、余分な金は持つてねえんだよ。ほんとだったら備蓄分がある筈なんだけどなあ。前の領主が流れ矢に当たっちまって、家令が財産を持ち逃げしたらしくってな」

一息で言い切ったダルトはエーアリヒを見上げた。

それでもロツテは見てしまった。握り締められた拳が微かに震えていることを。

一瞬伏せられた睫毛の下から微かに覗いた殺気にも似た怒り。

ダルトは隠しているだけかもしれない。他領出身のロツテすらなんたることだと啞然とする。今までその地で暮らしてきた者の思いはきつと半端なものではない筈だ。

エーアリヒもまたこれには顔をしかめていた。

「ってわけだ。おいらは税金五年免除の間にここを豊かに戻す。じやねえと本当に立ち行かなくて死者が出る。——おいらのやり方に文句は言わせねえ。昼は農夫で夜は領主、これがおいらの最大の譲歩だ」

「……王が、そのような確約を了承されたのなら五年間の内にザクテン領を立て直せとの仰せと解釈して良いのでしょうか。仕方があり

ませんね。承知しました」

再び無表情に戻ったエーアリヒはすつと佇まいを正す。

「んじゃ早速あんたにはやってもらいてえことがある。そのかわり、貴族のあんたにまで畑を耕せなんて言わねえから安心しろよ」

につと細めた瞳でエーアリヒを見つめたダルトは朗らかに笑った。

「援助が必要な者がどのくらいいるか、設備や家の被害状況と備蓄の有無、それから戦で死んだのが何人くらいいるのかもだな。あとは家畜もか。――村や町毎に調べて欲しい。こういうのはおいらは苦手なんだ」

無言で頷いたエーアリヒからダルトはさつとロッテの方に視線を向ける。

「ロッテは薬草の知識があるんだろ？」

「ええ、母さんと薬草を育てていたわ」

ささやかな庭に母と植えていた薬草を思い、ロッテは微笑んだ。

「んじゃ畑を耕すだけじゃなく薬草も頼む。根付けば出荷出来るものもあるだろ」

それに笑顔を返す。

「五年が勝負ね」

「豊かにしてみせるさ」

「……期待しておりますよ」

執務室に漂う空気は厳しいながらもどこか意欲に満ちたものに変わり、最初の険悪さはもうどこにもなかった。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！ 励みになってます！ 次回もなるべく早くに更新しますので、よろしくお願いいたします。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？

「……やっぱり黙って売っちゃおうかしら」

夕陽に染まる、幾つも並んだ色とりどりのドレスを眺めてロツテは呟いた。全部で十着、全て嫁入り道具として用意されていたものだ。

「ダルト様もエーアリヒ様もだめだとおっしゃっていたじゃないですか」

「だから、黙って、よ。どうせ着ないしね」

今ロツテはミネラや他の歳の近い侍女たちが着なくなった服を直して着ている。

自分の服を届けてもらえるように半月前に村長宛に手紙を書いた。今頃読んでいるだろうから、多分服や荷物が届くのは後半月はかかる。その間まさかドレスを着るわけにもいかないし、動きやすいからといって侍女の制服を着て皆に気まずい思いをさせたくはなかった。

ルーザたちはやっと最近話してくれるようになったのだ。針のむしろのような空気には閉口する。

サイズ直しを手伝ってくれていたミネラが糸を切って、ぱんっと服を広げた。

気安い関係になったミネラとはロツテもよく話をするようになった。再三再四敬語をやめて欲しいと伝えたが、固持するミネラにもう半ば諦めている。

「着る機会ならありますよ。秋になったら感謝祭ですもの」

「そっか……ザクテンでもやるのね、感謝祭」

収穫を大地に感謝する祭りが感謝祭だ。

「盛大にやりますわ。その時はどんなに貧しくても新しいドレスを着て意中の男性と踊るんです」

ロツテの村も一昨年は確かに秋に村総出で騒いだ記憶がある。そ

の年、ロツテは粉屋の息子に申し込まれ丁重に断ったものの、友人に羨望の眼差しを頂いた。去年は若い男は戦に取られていなかったから忘れていたのだ。

今年は戦が終わった高揚感も手伝って、今までよりも皆が感謝祭を心待ちにしていることはミネラの輝く瞳から容易に想像出来る。

「ミネラも踊るの？」

「勿論です！ もう布に刺繍をし始めたんですよ！」

ひとしきり刺繍の図案やドレスのデザインを聞いていたロツテの心にひとつ疑問がわいた。

憂鬱になって、瞳を曇らす。

「ダルトも誰かと踊るのかしら……」

ふと考えたことが口から勝手に漏れていた。

はしばみ色の瞳を真ん丸く開いたミネラが吹き出す。

「ロツテ様と踊られるに決まってるじゃないですか！ あんなに仲がよろしくていらっしゃるのに、おかしいことをおっしゃいますね」

——でも、あたしたちが夫婦なのは形だけだしね。

寝室はあれ以来二人で使っている。

柔らか過ぎる寝台では熟睡出来ないと公言し、使用人用の固い寝台を二つ置かしてもらった。夜毎に、ロツテの私室の目隠しの衝立を運び入れ、互いが見えないようにしている。

日中は確かに仲が良い。性悪という不名誉かつ不快な噂が立つのはロツテもダルトも望まないから、殊更だ。だが、ロツテにしてみればそれは友人の、もっと言うところには兄妹きょうだいにも似た近さだ。

——それに、ダルトとは五年でさよならするもの。

自由になりたいと言った。それをダルトは快諾して、必ずザクテンを豊かにすると誓った。

そんな状況での複雑な想いは顔に出ていたらしく、ミネラが所在なさに笑いを引っ込める。

「ごめん。もしかして、なんて思っちゃったただだから気にしないで」

「ですが……—はい？」

ミネラが答えかけたその時、丁寧ながら強く扉が叩かれた。
「入ってよろしいですか？」

聞きながら返事も待たずに入室したのはエアリヒだった。

ケントニス城には現在、家令が存在しない。前任者は財産を持ち逃げし、次をダルトは任命しなかった。

今はエアリヒがそれを兼任している状態だ。

入って来た彼はミネラの手元の服に顔をしかめ、さらに開いているクローゼットの扉の中身に注視している。そのひどく懐古的にも見える視線を訝しく思いながらも、ロツテは眉根を寄せた。

「あんまり女の舞台裏をじろじろ見るもんじゃないわ」

つかつかとクローゼットに近寄ると扉をバタリと閉める。ふつと身体から力を抜いたエアリヒは、非難を無視して冷静に反応した。
「……………右半分はザクテン領主夫人の服としては相応しくないように思われますが？」

「ドレスは動きにくいのよ。あんたわざわざそんなことを言いに来たわけ？」

「いいえ。リーゼロッテ様に用がありましたからこちらに参ったのですが。しかし、見過ごせないものもあることを貴女は知る方がいい。あれらの服は王の娘でありザクテン領主夫人の貴女に相応しくはありません」

険がこもった瞳でエアリヒを見据えたロツテだったが、彼はそれを気にも止めなかったようだ。

怒りを押し殺し、ロツテは黒ずくめのエアリヒを見つめる。髪も瞳も黒であれば、上衣も下衣もブーツまで黒だ。陰気くさいが、端正な容貌のエアリヒが着ると不思議と印象的でもある。凜とした声がまた、涼しげだ。

……でも、外で働く格好じゃないわ。

家令兼任だが、ダルトの補佐にあたるエアリヒは当然事務的な

仕事を主としている。だからロッテのように泥を気にする必要はないのかもしれない。しかし、その滑らかな質感の生地、控えめながらも複雑な刺繍や装飾から高級品なのだろうとロッテは判断する。

そのエアリヒが着ている服より、ロッテのクローゼットの中身ははるかに高価だ。それどころか、ふんだんに宝石や真珠があしらわれているドレスさえある。

もしもロッテがそれを着ているのを見て、戦で疲弊しているザクテンの人々は何を思うだろう。

「働くことが第一のザクテンで相応しい服がドレス？ あんたが求めているのはただの貴族に対する体面でしょ。冗談じゃない！ 相応しいか相応しくないかはここの皆が決めるわ。――で、あんた本当は何の用なの？」

言っても無駄かも、と溜め息を吐きつつ、ロッテはエアリヒにきちんと向き直った。

「ダルト様がお呼びですが、どうなさいますか？」

無表情のまま、声音だけは凜々しく、エアリヒは口を開いた。

――それを早く言いなさいよ！！

強張った表情で手持ち無沙汰に佇むミネラにロッテは頑張つて微笑みかけた。

「行くわ。――ミネラ、気にしないで。それクローゼットにかけておいてくれる？」

「わかりました。行つてらっしゃいませ」

華奢なエアリヒの背中を見つめながら、ロッテは私室を送り出された。

十 十 十

「王さまからなあ、褒賞金が届いたんだ」

執務室の長椅子に行儀を気にせず座っていたダルトは顔をしかめて複雑そうに笑った。

「喜ばないの？」

「そりや嬉しいさ。ザクテン領を立て直すたしに出来る。けどなあ……」

首を後ろに傾け天井を向いたダルトは唸る。

ロツテはダルトの投げ出された足を避けると向かい合わせの長椅子に座った。蜜茶の色をしたスカートがふわりと広がる。

「何か気になることがあるの？」

テーブルに置かれた書状を手に取り、目を剥いた。書状には破格の額が書かれていた。

——いち、じゅう、ひゃく、せん…… ってほんとに？

これは確かにたしになる。

王ハイダル的好意だろうか。それとも、また何か隠されているのだろうか。

だからダルトは微妙な顔をしているのだろうか。

「いや……いい。何でもないさ。——エーアリヒ、あんたの調べたことと照らし合わせて予算に組み込みみたい」

珍しく歯切れの悪い答え方をしたダルトにロツテは首を傾げる。

「こちらにございます」

「さあ二人とも手伝ってくれ。どこから配ればいいと思うか？」

エーアリヒが執務机に分厚い書類を三束ばさりと置いた。

「信頼出来る者を各町村に送り、報告を受けたものをまとめました。右は町村ごと、中は被害箇所の種類別で記してあります。左はそれらの修理や購入費用とまた今期の収穫高の予想を凡そであります。まとめておきました」

それは半月前にダルトが命じたザクテン領の被害の報告書だった。ロツテはその種別の方を手にとるとぱらと捲る。文字が読めないわけではないが、明るいと言うわけでもない。だが、書類には見出しに絵も書かれており、とても分かりやすいものだ。

風車の絵が書かれたページでロツテは手を止めた。

「……ナーズ村、二基全壊、シュトルイム村、一基半壊、クヴェレ

町……二基半壊、三基全壊……他にもこんなに？」

「こちらは人的被害です」

エーアリヒが静かに差し出した書類をダルトは素早く手に取った。
一枚、二枚、とページを捲り、ダルトはつと動きを止めた。

「リモン……」

「え？」

低く短く呟かれた人の名に、ロッテは反応する。

「いや、なんでもねえ」

小さく首を振ってダルトは書類を執務机に置いた。

「エーアリヒ、あんた優秀だ。王さまがあんたを重宝すんのもわかるような気がすらあ。配偶者や子供や親のことまで助かるよ。それから帰って来ても怪我をして働けない奴のことまで。——ありがとう」

「……いえ」

ダルトはゆつくりと笑う。

ロッテも驚いていた。確かに、ダルトは半月前にこう言った。

『援助が必要な者がどのくらいいるか、設備や家の被害状況と備蓄の有無、それから戦で死んだのが何人くらいいるのかもだな。あとは家畜もか。——村や町毎に調べて欲しい』

複雑に命じられたことをこうも簡単に調べ上げている。

……ほんとにあの王サマの側近だったのね、エーアリヒって。

本人はいけすかないがその能力はザクテン領が豊かさを取り戻すために必要だ。

「優秀ついでに褒賞金の分配案をこれを参考にいくつか出して欲しいや。そうだな。一人あたり五十でどうだ？」

「銅で、ですか？」

「銀だが……だめか？」

エーアリヒが溜め息を吐く。

「銀二十が限度です。あなたは多分……亡くなった兵士以外の方にも分配されるおつもりでしょう？」

「ああ、おいらはそうしてえ」

「ではいくつか案を出しましょう」

「助かるよ。ありがとな」

途端、エーアリヒの無表情が変わった。苦いものを食べたならこんな顔になるのではないだろうか。

「劳いの言葉は必要ありません。あなたの補佐がわたしの仕事ですから」

淡々と告げた言葉にダルトは苦笑を見せる。

長椅子に戻ると勢いよく腰を落とした。

「そうかい？ でもありがとな。——それでロツテは重要視した方がいいと思うことはあるか？」

ダルトとエーアリヒのやり取りを聞いていたが、急に振られて驚いたロツテは思わず自分を指差した。

「あたし！？ えっと…………… 今話を聞いててちよつと言いつらいけど、銀二十つで亡くなった兵士へのおわびでしょ？ でも、もう少し減らしちゃダメなの？」

ダルトが怪訝そうな顔をしたのが視界に入った。それが徐々に陰しく変わっていく。

若干怯んだが、言いかけてしまった。ひとつ息を吸うと、ロツテは申し訳ない気持ちを隠し、口を開く。

「冷たいこと言うのはわかってるけど、でもお金もらってもそれでその人が帰ってくる訳じゃないし…………… そんなに睨まないでよ……………」
何故睨まれているのか、ロツテにはなんとなくわかった。多分、先程ダルトが呟いた名が理由だろう。

——リモンって、ダルトの親しいひとなのね。きっと…………… 亡くなっただわ。

みるみるうちに灰茶の柔和な瞳から穏やかさが消えていく。

不意に、足元から不安がのぼってきた。

知人の一人もザクテン領にはいない。ダルトに拒否されたら、ロツテにはもう支えとなる誓いさえなくなる。

じわり、と目頭が熱くなるのを感じて、ロツテは横を向いた。ダルトを見ることは怖くて出来なかった。

「睨んでねえよ……それで？」

少しだけ硬さを残した声がロツテの耳に届く。促されるままに、自分の考えを言葉にした。

「う、うん。それよりも亡くなった兵士の人がどれくらい働いていたかをね、調べて分けた方が……」

「つまり家族の中で、または町村の中で、どのくらい経済に影響する仕事を担っていたかを調べるといことですか？ 仕事量まで？」

それだと分配まで時間がかかってしまいますが」

それは当然だろう。しかも分配が遅ければ今年を乗りきれない者もいるかもしれない。

ロツテはこくと頷くと再び室内に目を向けた。

「うん、だから二段階で……先におわびを配って、調べてから本格的に褒賞金を分けたらどうかなって……」

ちらりと伺うようにしてダルトを見る。首を捻った格好でダルトはエーアリヒを見上げていた。

「そんなこと出来るか？」

「今言ったように時間はかかりますけどね、可能ですよ」

応じたエーアリヒに、ダルトはひどく哀しげに笑うと、うん、と呟く。

「……だったら……レジーやおばさんには悪いことするけどなあ……時間が経ちかってもその方がいいかもしれないな。エーアリヒ、そっちでいくつか案を頼む」

「わかりました」

「ロツテも……呼び立てて悪かったな」

小さく首を振って、ロツテは逃げるように執務室を辞した。

ダルトの灰茶の瞳をどうしても見ることが出来なかった。

《第二章》　身代わり姫の憂鬱？

その日の夜、ダルトは寢室に現れなかった。

「やっぱり、怒ってるのかしら……」

固い寢台に腰掛けたまま、ロツテは自嘲気味に呟く。

一人きりの寢室はどうにも広く、ただでさえ落ち着かないというのに、寂しく感じた。通常は二人で運ぶので衝立は用意出来なかったから余計だ。

ロツテは夜着に薄い上着を羽織った。

――探しに行こう。

このまま眠ることなど出来そうにない。夜半を回ったというのに眠気は訪れないし、ダルトの冷たい灰茶の瞳が眼前にちらついて胸が締め付けられる。

寢室から私室へ、そして廊下へと出るとロツテは歩き出した。

自分がとても冷徹なことを言ったことは自覚している。兵士の命を金に換算した上、しかも減額したのだ。聞く人が聞けば眉をひそめられても仕方ない。

思い返せば減額を最初に提案したエーアリヒすら、小さく顔をしかめていた。

不快に思わせたかったわけではない。

――ダルトの思い出を、大切な人を、きつとあたし……。

ロツテの提案を承諾はしてくれたが、内心は煮え繰り返っていたのだろうか。だから、寢室に現れないのだろうか。

ゆらゆらと歩き続け、執務室までやって来たロツテはそこから漏れる薄明かりに気付いた。我知らず歩調は早くなる。

扉を開け放ち――。

「ダ……エーアリヒ？」

執務机にダルトの姿はなく、側に設えられた少し小さめの机で書

き物をしていたのはエアリヒだった。

彼は小さく驚きはしたが、すぐに書面に視線を落とす。下を向いたまま、凜とした声音がロッテを刺した。

「こんな夜更けに何をなさっておいでです？」

「その……」

なんと云えばいいのかわからなくて、ロッテは扉口で立ち尽くした。

「廊下に光が漏れますから、そこに立っていらっしやるなら中に入ってください。迷惑です」

ダルトを探している途中なのだと言えないまま、ロッテは執務室に入り、扉を閉めた。

「何をしてるの？」

「明日の朝には指示を出す予定ですので、各々に調べることを書いています。口頭でも構いませんが、万が一調査しそこねてしまえば、公正な分配は行えませんから」

インク壺にペン先を浸し、エアリヒは話しながらも書面に書き付けていく。

「まだどうするかもわからないのに？」

「決まってからでは遅いのでは？ それくらいはおわかりかと思っ
ていました」

冷たく言い切られ、ロッテは足元に視線を落とした。

ここにダルトはいないのだからすぐにでも出ればいいのだ。ようやくそう悟って、ロッテは扉を振り返りかける。

その背に声がかかった。

「先程のことを気にされておいでですか？」

ハッとしてエアリヒに視線をやると、彼は真っ直ぐにロッテを見つめている。

「貴女も間違っていないですよ。ダルト様は最前線に立って戦っておられたので、兵士と残された者を等しく考えておられる。けれど、分配すべき褒賞金は限りがあります。優先すべきは生きる者だと貴

女は言った。わたしは間違っているとは思いません」

思いの外真摯な言葉にロツテは目を見開いた。それ以上に、貴族であるエーアリヒがロツテの考えを認めたことに驚愕する。

「あ、ありがとう……」

口から溢れた謝辞にエーアリヒが苦虫を噛み潰したような顔ををした。

「あなた方の記憶力には疑問を感じます。わたしは当然のことを言っただけ。——もう戻ったらいかがです。ザクテン領主夫人ともあるう方がそのようなはしたない格好をして、ふらふらと城を歩いているなど、恥ずかしくはありませんか？」

嘲るように言われ、ロツテの頬が朱に染まる。急いで執務室を出ると、扉の前で齒を向いた。

——なんか一言でも言わないと気がすまないのかしら！

心の中で悪態を吐きながらも、認めてくれたことが少しだけ嬉しかった。

けれど胸につかえたものが取れることはない。

ロツテにとってはやはりダルトなのだ。

たとえ父王に命じられた結婚であり、異母妹マルゴットの身代わりとして嫁いだ相手だとしても、自由を得るまでザクテン領で頼みとする相手はダルトしかいなかった。

再び城を徘徊し、ダルトを探すロツテは最初の夜を思い出す。行き過ぎた、裏へと繋がる使用人用の階段まで戻ると、誰もいないことを確認して降り始めた。

あの時見たダルトは無表情だったが、今日のダルトは怒りも露で、近寄り難さはないものの逆鱗に触れたのかもしれない。

裏口から外に出ると、すぐ脇には納屋がある。半月前の結婚したその夜、農具の納められたこの場所でダルトは寝ていた。

納屋の両開きの扉の片方を音を立てないようゆっくり開けると、奥の暗闇の中で天窓から注ぐ僅かな月光にキラツと光るものがある。

目が慣れるにつれ、それがダルトの金の髪だとわかった。

見付けたのは良いが、なんて声をかけていいのか悩んでいると――

「理屈ではおいらもわかってるんだ」

目を閉じたまま、ダルトは静かにそう言った。

「だけど、感情が追いつかねえんだよ」

自嘲するようにぼつりと溢す。薄目を開け、身体を起こしたダルトは真っ直ぐにロッテを見つめた。寝ていたわけじゃないらしく、寝起きのようなぼんやりしたものではない。

先程は目を見るのが怖かった。けれど確認しなかったことでもっと不安が増し、眠れなくて。

祈るような気持ちで、ロッテはダルトと視線を合わせた。

そこには――穏やかな灰茶の瞳が待っていた。

「リモンだつて自分が金になるよりレジーやおばさんが幸せに暮らせる方がいい筈なんだ。わかってんだよ、本当は……」

肩から巻き付けていた上掛けをぎゅっと掻き抱き、ダルトは下を向いてしまう。

足を踏み出し、ダルトに近付いて、ロッテはその肩に手をかけた。

……震えて……泣いてるの？

「金を出したつてリモンは帰ってこない……リモンが生き返るなら褒賞金なんて全部つき込むのにな……」

「ダルト……」

鼻にかかる声。

思わず呼んだロッテに光る瞳が向けられる。目尻に溜まった涙が、ぱちり、と瞬きした途端に精悍な顎まですうっと流れた。

「見んなよな、せつかく隠れてたのに。泣き顔なんか見せたくねえよ」

言いながらも真っ直ぐに視線がロッテを捕らえている。

「お前が泣かずに頑張ってるのに、おいらこの様だ。――悪かったな、気にして探してくれたんだろ？」

自嘲した彼だが瞳は強い。涙を流れるにまかせ、彼は片頬を上げる。皮肉気に見えるが、それは強張りを残した硬い笑みだ。

農具が迫る狭い空間。

背中を荒削りの石壁に預けて、ダルトは瞼を閉じた。またしても目尻に溜まっていた涙が透明な跡を残して流れ落ちる。今度はぐいっつとそれを拭うと、再び目を開けた。

ロッテを見上げ、フツと微笑んだ。その顔がどこか寂しそうに見える、我知らず狼狽する。

「おいらなあ、別に泣き虫じゃねえぞ？　——おっと、負け惜しみで言ってるわけじゃねえ」

身を乗り出してダルトが下からロッテを覗き込んだ。

「どっちかって言うのと泣き虫だったのはリモンの方だ。年上のくせにリモンが先に泣くからおいらは笑うしかなかったなあ」

「リモン……」

「幼馴染みでおいらの兄みたいな奴だ。戦で死んじまった。気のいい農夫だったんだ」

ロッテはかける言葉を失い、ダルトの脇の僅かな隙間に両膝をつく。

「ほんとだったらリモンが褒賞金の全てを貰うべきなんだよ。だっておいらはリモンが帰れて言うから戦を終わらしたんだ」

ふう、と微かな溜め息がロッテを掠めた。

「情緒不安定でいけねえや。おいら元々そんな喋る方じゃねえし、あんまり感情も出す方じゃなかったんだけどな。リモンが死んでからどうしてかこう……落ち着かねえ」

「それは……」

会ったその日に変わった男だと思った理由はこれだったのだ。

躁の気があったわけじゃない。ただ、精神的に落ち込んで、それを隠そうとしていただけだ。

「うん、多分、リモンが死んだことが引っ掛かってた。ロッテだってあるだろ？」

こくん、と頷くと、ダルトはもう一度、ぐいっと手の甲で目を擦る。

薄暗い中で、涙の跡と白金の髪だけが輝いていた。

「ほんとに久しぶりに泣いた。泣きやあ意外とすつきりするもんだな」

灰茶の瞳にロツテの望む温かさが戻る。途端に足が地に着いたような気がした。安堵からロツテも微笑う。

「やっぱ石の壁よりは木の寝台がいいや」

伸ばされた手に苦笑して、膝の土くれを払いながらロツテは立ち上がった。大きな掌を掴むとぐつと強く握られる。反動をつけるように遠心力を味方につけて、ロツテはダルトを引っ張った。

「自分で立ちなさいよ」

憎まれ口を叩いてみたが、繋いだ手に意識が集中する。簡単に立ち上がったダルトは、下衣を軽く払うと口角を上げた。

「帰って寝るかあ。明日も朝が早えからな」

連れ立って歩く内に眠気が襲ってくる。

現金なものだ。先程は身体がどんなに疲れていても頭が冴えて眠れなかったのに。

ロツテは寝台にたどり着くと、上掛けをかける間もなくすうつと眠りに落ちた。衝立を二つの寝台の間に移動することすら忘れていた。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（後書き）

お気に入り登録してくださり、感謝しております。次回の更新も早めに行いたいと思っています。今しばらくお待ち下さい。また、誤字や脱字ありましたら、教えて頂けると嬉しいです！感想も随時募集中ですので。では、今後もしよろしく願いいたします。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（前書き）

小麦はいつのまにか実ってます……。。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？

目まぐるしい日々の中で、ロツテは次第にダルトの姿を見るだけでほっこりと温かい気持ちを感じることに気付き始めていた。

「――身が入ってないよ!? 何をぼんやり見てるんだい!」

容赦なくルーザから飛ばされた叱責に、慌ててダルトの横顔から視線を反らす。

周囲の農夫たちからくすくすと笑い声が漏れる。ちらと横目でダルトを見ると、彼も皆と同じように笑っていた。

しゅん、と頂垂れたロツテはまた屈みこみ、作業に戻る。

「ロツテ様気にされるなよ。ルーザがああやって言うのは相手を気に入ってる証拠さね」

「そうそう。だってダルト様もね、ああしてよく言われてたもの」
少し離れた両隣からそう声をかけられ、ロツテはぽかんとする。

「ダルトも?」

「ああ、もうこっちが気の毒になるくらいになあ」

「わしらは慣れとるが、最初はダルト様も目を白黒させとった」
さらに隣の農夫がかつかと笑った。

「あんたたち、仕事をする気があるのかい、ないのかい!? 今日中に刈りとつちまわなきゃ、明日が余計大変になるだけだよ!」
ルーザから檄が飛ばされる。

「わしらの手は動いとるわい。のう、ロツテ様」

「え、あ、ええ! ちゃんと刈ってるわ!」

慌ててまた鎌を横に払うと、ロツテは束に掴んだ小麦を刈った。黙々と働くのは嫌いじゃない。けれど、どうしても今後のことを考えてしまうのは仕方ないだろう。

ザクテン領都ルタールでは小麦の一部を刈り取る作業が始まった。多額の褒賞金のお陰か、税金が免除されているからか、他領が目を見張る早さでザクテン領は明るくなった。貴族ではない平民出身

の領主であり、また英雄であることも吉となつて領民はかなり意欲的に働いた。結果、戦前の収穫高には遠く及ばないながらも、去年を超える小麦が実った。

風車も各地の今年の収穫高に合わせた数だけは修理が終わり、そこかしこに戦の傷痕は残るものの、希望は少しずつ広がっている。

『豊かになつたらきつと帰してやる』

ダルトにそう言われてから数ヶ月。

ロツテは今その言葉が憂鬱になっていた。

…… あんなに帰りたいかつたのに。

そう思つた瞬間に肌が焼けつく。手元が狂い、鋭利な刃が左手の親指を浅く撫でていったのだ。

痛い、と叫んだ覚えはないが、慌てたようにダルトが飛んでくる。狼狽えながらロツテの手を見て、顔色を変えた。

「怪我したんだなっ！」

言われてもう一度親指を見下ろし、ダルトのおろおろとした様子に首を傾げる。

ただの浅い傷だ。うつすら血の珠が浮き出してきたが、流れ落ちる程のものでもない。気付いた他の農夫たちが次々にロツテの手元を覗き込み、安堵の声を上げる。

「そんなに騒ぐもんだからロツテ様の指が落ちたのかと思つたよ」

青くなつたダルトは揶揄されたことに気付かないのか、ロツテの右手から鎌を奪う。

「消毒しに行くぞ！」

「え？ かすり傷だよ？」

目を見開いたのはロツテだけではない。

周囲の農夫たちの表情にも驚きがある。彼らは徐々にはにかむような笑顔に変わったが、どうやらダルトは本気で言っているらしいかつた。

「かすり傷でもだ！——ルーザ！ ロツテとおいらは抜ける、後を頼むな！」

「わかったよ！」

やや遠くの方で心配そうにしていたルーザが、手を振った。その身振りを確認し、ダルトはロッテを引っ張る。

「こんなのかすり傷じゃない……別に消毒するような傷でもないし……そこらで引っ掻いたような傷なのに……」

「何をぼんやりしてたんだ!! かすり傷!? 冗談じゃねえ!」
歩きながらぶつぶつと呟いていると、ダルトが怒鳴った。

その剣幕に耳を塞ぎそうになる。

「一歩間違ったら危ないんだぞ! ぼやっとしてるくらいなら手伝うな!」

「だ、ただど——」

「だけどじゃねえ! 迷惑だ!! ……あ、いや……」
迷惑。

その言葉にロッテの顔が固まった。

どくん、どくん、と嫌な音を立てて血が流れていく。ぎゅつと驚掴みにされたかのように、胸が痛い。

捲し立てていたダルトが表情をなくしたロッテを見返し、急に失速した。

「……悪かった。言い過ぎた。……なんか考え事してたんだろ? 今日休んでいいから」

口調は優しくなったが、休め、と言われたも同然だった。

しかも反論は出来ない。身が入っていなかったのは事実だし、ぼんやりして怪我をしてしまったことで皆の作業を一時中断させてしまった。

「迷惑かけてごめんなさい……」

「違う! いや、あのな……おいら一瞬心臓が止まりかけた。頼むから怪我なんかしないでくれよ」

深く、本当に深く溜め息をついて、空を仰いだダルトだったが、ロッテはその言葉の意味をはかりかねていた。

余りにも意味あり気な言葉だ。

赤くなるより怪訝な表情を浮かべるロツテの頭はやや混乱する。

よほど大切に思っていないければそこまで言わない筈と思いながらも、ダルトの優しい性格ならありえるとも考えてしまった。

曖昧に笑んだダルトは、ロツテを見下ろし肩を竦める。

「五年経ったら帰るんだろ。いわばロツテの村からロツテを借りて
るようなもんさ。預かりもんに傷つけたら大変だ」

眉を寄せて頬を上げ苦笑するダルトにロツテも内心を隠し、軽く
笑った。

だが、それは不思議と、とすん、と啓示を与える。

落胆を覚える理由は至極簡単なものだ。

「……そう。そうね。——やっぱり考えたいことがあるから今日は
抜けるわ。薬草畑には刃物使う仕事ないし。ダルトは戻っていいわ
よ？」

苦笑いを続けながらダルトを振り仰いだロツテは後方を指差した。

「ミネラに手当てしてもらえよ？」

「かすり傷よ？ …………… わかったってば」

眇められた瞳に両手を上げて観念したロツテは城に向けて歩き出
した。背中にダルトの視線を感じながら。

ミネラは首を傾げながらも手当てをしてくれた。包帯を巻くでも
なく、ましてや縫う程でもない。軟膏を擦り込むだけ、僅か数秒で
終了だ。

ロツテは今ケント二ス城の中庭のひとつにいた。

そこはこじんまりとした——城の中庭の内では——場所で、ロツ
テの大切な薬草が植えてある。村長が株ごと送ってくれたものだ。
幾つかは土が合わなかったのか枯れてしまったが、半分以上は生き
残った。

納屋からバケツを取り出すと、ロツテはぼんやりしながら柵で囲
ったささやかな薬草畑に入り込む。

雑草を嫌うある種の薬草の為にそれを抜くつもりでいたのだが。

しやがみこんだ途端に意欲が消えてしまった。

ロツテとてこれが初恋というわけではない。成就することはなかったが、村で既に経験済みだ。

そう。

この、ふわふわとした気持ちは恋ゆえだとわかっている。

ダルトの姿に安堵を覚え、思い浮かべる度に頬が熱くなる。期待してしまいそうな言葉が特別な意味ではないと知って落胆するのは、ロツテがダルトに恋心を抱いているから。

気付かないふりをしたいが自覚症状は日に日にロツテを追い立てている。

……でも。あたしはダルトのどこを好きになったのかしら？

やる気はなくとも無意識に雑草を引き抜きながら、ロツテは疑問を自らに投げかけた。

……顔じゃないわ。そりゃ魅力的だけど。

誰しも認める冷涼な美貌を誇るエーアリヒと比べれば、ダルトは少し斜めに行く。つまり正統派の美青年ではない、ということだ。

ただし弧を描く柔和な瞳には独特の輝きがあるし、燦然と光を放つ白金の髪は彼が育てる小麦の穂と同じ色をしている。精悍な顎の線と通っている鼻筋が、そばかすの浮いた頬の印象をずっと引き締めていた。

ロツテの知っている村の娘たちが黄色い声を上げ、感謝祭で躍りを申込み、わたしは彼と踊ったのよ！ と自慢気に話すくらいは格好良いだろう。

……じゃ、中身？ という程、実はまだダルトのことよくわかんないのよねえ。

本人はそれ程感情を表に出す方ではないと言っていた。笑っていることは多いが、何を考えているかわからないふしもあるのは確かだ。

ただ、とても優しい人だと思う。

少なくとも、ロツテを大切にしてくれているのは誰しも認めるこ

とだし、ザクテン領の人々に対しても公平に接する。褒賞金を自らのためではなく、皆のために使うようなひとだ。

——でも優しいから好きになった、って何かしっくりこないわ。もつと、そう最初の日には、多分惹かれてた気がする……。

ぷつり、と切れてしまった雑草の根本を手探りで探し、上の空のまま株ごと引き抜いた。

……でも、これってあれかしら。鳥の雛が最初に見たものにずつとついて行くっていう、そう、刷り込み？

まるで物語集の騎士のように、憧れていた英雄に望みを叶えてやると誓われたら——好意を抱くかもしれない。いや、抱くだろっ。

……まあ、ダルトは騎士さまって感じはしないけど。

ふっ、と小さく笑いを溢して、ロツテは抜いた雑草から土を叩き落とした。

——じゃ、ダルトが英雄だから？ ……いいえ、だめ。それじゃただの憧れだもの。

「……やっぱり憧れ、なのかしら……？」

憧憬だけでこれ程ダルトに左右されるものだろうか。

考えれば考える程、わからなくなってくる。

小さな畑だ。既に雑草は抜き終わり、放り込んだバケツを持つと立ち上がった。納屋に向けて歩きながら、さらに頭は回転する。

遡ってロツテは思いを馳せた。

ダルトと初めて会った日、ふと垣間見せた悪戯めいた煌めく瞳に狼狽したことは覚えている。

普段は穏やかな灰茶の瞳が時折見せる強い色に目を奪われたのは一度や二度ではない。

——あれ？ これって見た目ってこと！？

堂々巡りに陥ってしまい、ついにロツテは作業を諦めた。中庭の木の本に背中を預け、ふう、と溜め息をつく。赤茶色のスカートを広げ、足を伸ばして、ロツテは目を閉じた。

「見た目、だったら、エアリヒにだってドキドキするわよねえ……」

…」

今まで彼に怒りこそ覚えても胸が高鳴った記憶はない。それは最初に、まだセトル王宮にいた時に、エーアリヒが貴族だと知らなかった時も、綺麗な男だと思えど、鼓動は規則正しく打っていた。

「見た目っていうより、そうね、ダルトのあの目の強さが惹き付けるのかも」

狭い納屋で泣き顔を見た時も、芯を現すかのように強く見返してきたダルト。

「……ダルトって基本よく笑ってて穏やかだけど、あの目だけで印象がガラリと変わるわ」

柔和な煌めき。不安を消してくれる、時には威圧感さえ与える強さ。怒りや憎悪すら、周囲を引き付ける灰茶の瞳。

ロツテが恐くても、それでも見続けたいと思うもの。

——そう、あたし、ずっとここにいたいって思ってる……。

思った途端に落胆が戻ってきた。

ダルトはロツテの抱く気持ちを知らない。誠実で責任感も強い彼は、ロツテを必ず村に帰してくれるつもりでいる。

望みの薄い恋なのだ。

「……それどころか望みなしって感じね」

自嘲気味に言葉を落としたロツテは、近くで下草を踏む音に慌ててパチリと目を開けた。

黒い人影がすぐ側にある。

「何をお一人で呟いていらっしゃるのです。周囲が聞けば何を思われるか、リーゼロツテ様は自覚が足りません。貴女は注目を集めるだけの地位にあるのですよ」

エーアリヒは冷たくロツテを見下ろしていた。

普段だったらい言い返しているところだが、ロツテは狼狽していた。

「聞いてたの!？」

「貴女がダルト様をどう思われ——」

「それ以上は言わなくてもいい!! 何か用!？」

きつく睨みつけながら、ロツテは赤茶色のスカートを翻し立ち上がる。秘密にするべき気持ちを聞かれたことと自分のうかつさが腹立たしい。

「二、三、確認して頂きたいものがありますので」

無表情なままロツテに突き付けられた書類に首を傾げた。

「あたしが？ 何の書類よ…… 感謝祭の食事？」

「ええ。ケントニス城では以前より領主夫人が采配をふるうことになっていきます。ですから、食事に何を出されるかはリーゼロツテ様の了承が必要なのです」

ぱら、ぱら、と目を通し、眉間にしわを寄せた。

「って言ってもね……」

片手間で済むような書類でない、と思う。

感謝祭は城で働く者たちだけではなく、領民も皆が楽しみにしているようだ。

ケントニス城が平民に公式に開かれる感謝祭は、領主と領民が直接会話が出来るまたとない機会でもある。最もダルトがザクテン領主となってからは城の門は誰しもくぐれるし、ダルト自身が気軽に外に出て農夫の仕事をしているが。

だが、ケントニス城内を見たいという領民がいないわけではない。わざわざ領民が足を運んでくれるというのに、吟味もせず、了承するのはロツテの姿勢に反した。

「一度戻るわ」

「その方がよろしいのではないかと。どうやらリーゼロツテ様は作業をされていないようですからね」

「あんた一言余計よ」

ロツテは溜め息を吐きながら、エーアリヒを伴って私室に戻った。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（後書き）

どこが好きかわからないまま好きになることも、ありますよねえ…
…？　ともかく、読んでいただきありがとうございます！　感想は
いつでもお待ちしています。また、お気に入り登録ありがとうございます！
います。次話もよろしく願いいたします！

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？

「どう思う……？」

「そうですね。ロツテ様の言いたいことはわかります」

ミネラが同意を示してくれた。だが、彼女の顔は晴れない。

「日持ちするパンなら持ち帰れるし。そうすれば自分とこの蓄えを崩さなくてもしばらく暮らせるんじゃない？」

ロツテは私室でミネラと感謝祭の食事のことを話していた。エーアリヒは扉の側で立ったまま、会話に加わらずにいる。

もうすぐ日も暮れる。そろそろダルトが戻ってくる頃だろう。しかしロツテはこの問題をダルトに持ち込むつもりはなかった。

感謝祭の食事を決めるのは代々の領主夫人の仕事だという。ザクテンが豊かになりロツテが村に帰されたとしても、そして悲しいがダルトが新たにお嫁さんを貰ったとしても、誰かの記憶に残りたいと思うから。ロツテは純粋に皆が喜んでくれる食事を提供したかった。

「家で食べることが出来れば嬉しいですけど、非日常な食べ物も喜ばれるのではないかと思いますよ」

「そっか、そうね。いつも家で食べるのと同じじゃねえ……」

長椅子に腰かけたロツテは頷くしかないミネラの答えに肩を落とした。

「——ねえ、聞いてるんでしょ？ 感謝祭用のパンと持ち帰り用のパン、二種類作ったら予算的に無理？」

相も変わらず無表情のエーアリヒを振り仰ぎ、たずねる。

「戦が終わって初めての感謝祭ですから、盛大になされば良いのではないですか？ 小麦の収穫量が予定よりも多いですから、多少無理しても大丈夫でしょう」

拒否されるだろうとダメ元で聞いたロツテは拍子抜けし、ぽかんと口を開けた。まさか同意してくれるとは思ってもみなかった。

「いいの？」

「ええ、調整は必要になりますけれど。リーゼロッテ様がザクテン領主夫人ですから。皆も喜びましょう」

ロッテの侍女兼話し相手と化しているミネラも、エアリヒの嫌みを何度も耳にしている。思わずというようにロッテを見たそのミネラの顔も、驚いたように目を見開いていた。

「……じゃ、じゃあそんな感じで」

「では作り直してまいります」

あっさりと扉から出ていったエアリヒの華奢な後ろ姿を呆然と見送り、我に返ったロッテは小卓に近寄った。

「ミネラもどう？」

「いただきます」

ぬるくなってしまったお茶をカップ二客に注ぎ、ロッテはミネラに手渡す。最初は慌てていたミネラも今ではロッテが働いても目を剥くこともないし、こうして一緒にお茶の時間を過ごしてくれるようになった。

こくり、と一口飲んで二人で顔をしかめる。お茶を置く時間が長すぎたせいで渋味が出てしまっていた。無言でミネラと自分のカップにお湯を足し、薄めてなんとか飲み干す。

カップを回収し小卓に戻した背に、感慨深い声音でミネラが声をかけた。

「もう半月もないですね」

「感謝祭？ そうね。ミネラのドレスは完成したの？」

振り返り、ロッテは口角を上げて笑う。

「あと少しというところですね。——ロッテ様はどうしますか？」
首を竦めたミネラはクローゼットの扉を開け放つと、左半分のドレスを示した。ロッテはゆっくりと首を振る。

「あたしは……参加しないわ。当日は普段着でいい」

ドレスを着れば多分、ダルトと踊りたくなってしまうだろう。
そして頼めば彼はきつと踊ってくれる筈だ。けれどそれはロッテ

の望むような理由ではないから。

首を振るロツテにミネラは一着ドレスをクローゼットから出した。
「何を言うのです！ ドレスがないわけでもありませんのに……これはいかがです？ 淡い黄色、ドレープの緩やかな袖は踊った時に蝶々のように見えますよ！」

クリーム色のシフォンの柔らかなスカート。その下、黄色の布地に縫い止められた無数の宝石がミネラがドレスを持って移動するとちらちらと瞬いた。彼女は衝立にそれをかけると、またクローゼットに戻る。

「それからこちら！ 秋の装いに相応しい赤葡萄の色ですわ。装飾は少ないですけど、この凝ったタックを見て下さい！ それにうつとりするような触り心地ですわ」

言われて目をやると、ミネラはそれも衝立にかけた。

「後は……そうですね。こちらの深緑のものも素敵ですけど、ロツテ様には……」

「いいのよ、はつきり言ってくれて」

苦笑を溢しながら言うと、ミネラは深緑のドレスをクローゼットに戻す。

「ええ、余りお似合いにはなりませんわ。わたしは同じ緑でもこちらの黄みがかった方が良いかと。それに紺も、青も素敵です」

三着も同時に運んできたミネラに、ロツテは強く首を振った。

「だめよ、着ないわ。あたしは……踊らないのよ」

長椅子にどざりと座り込み顔を背けた。

窓から見える空は茜から藍に染まり、たなびく雲が薄紅の幻想的な色を見せている。

「ロツテ様、感謝祭なのですから。どんな高価なドレスでも皆は納得しますわ」

そういうことではないのだ、と言おうと向き直ったロツテだったが、ミネラに機先を制される。

「それにロツテ様がドレスをお召しになっていなかったらダルト様

ががっかりされますわ」

「そんなことある筈ないわ!」

間髪入れずに反論し、ロツテはすぐに後悔した。

「……ごめんなさい。ミネラが悪いわけじゃないの。ドレス、選ぶわ。でもなるべく地味なものにしたい」

雷にでも打たれたかのような顔をしたミネラに謝罪し、ロツテはクローゼットの前に立った。

残りのドレスは淡い色のものが多い。だが、似合わないと言われた深緑の他にもう一着だけ濃いドレスがある。

その一着を取り出しかけ、立ち直ったミネラに止められた。

「黒なんていけませんよ。感謝祭ですのに。それにまるでエーアリヒ様のようです」

「……それは、嫌ね、なんとなく」

「差し支えなければ——あの赤葡萄色のドレスがよろしいと思いますよ」

言われて仕方なしにロツテは身体に当ててみた。

それはしつくりとロツテに調和した。青い瞳がやや赤みの強い紫に引き立てられ、より濃く見える。

細かいタックが身頃をつくり、装飾は裾に複雑に縫い合わされたサテンリボンのみ。膨らんだスカート部分と襜の裏地の色は僅かに違い、動く度に波のように見えるだろう。広がる袖は薄手の生地で決して重くは見えず、全体的にミネラの言った通り驚く程の肌触りだ。

「そちらにしましょう。よくお似合いですよ。ドレスに合わせて装飾品も決め——……はい?」

他のドレスをクローゼットに戻したミネラが、装飾品の収まる棚を開けかけた途端に、控えめなノックが響いた。

「ロツテ? いるか?」

ダルトの声だ。

慌てて赤葡萄色のドレスもクローゼットにしまいこみ、ロツテは

自ら扉を開ける。

目に見えるくらいにほつと安堵したダルトは、中には入ろうとせず――ロツテの私室へ彼が足を踏み入れたことは一度もなかった――ロツテを手招きして廊下へと呼び出した。

「傷は大丈夫か……？」

促され、歩き出したロツテは氣遣う言葉に氣恥ずかしさを抑えようと努力する。

跳ねだそうとする心臓を厳しく叱りつけ、軽く左手を振って答えた。

「よく洗って軟膏を塗ったわ。元々たいした傷じゃないし、二、三日で元通りよ」

何故かダルトは困ったように眉をしかめて笑っていた。その灰茶の瞳を見返し、内心首を傾げる。

……なんかあったのかしら？ 別に好きって氣付かれた様子はなし、怒ってるわけじゃなさそうだけど。

それ以上は言葉もなく、若干の氣まずさを感じながら、領主の執務室に入った。

中には当然のようにエーアリヒがいた。ダルトの後ろにロツテの姿を認めたエーアリヒは珍しく含み笑いを見せる。

慌ててロツテはぶんぶんと首を横に強く振った。エーアリヒの口からロツテの秘めた氣持ちを伝えられたら嫌だ。

ダルトの背中が揺らぐ。

エーアリヒとロツテを交互に見比べ、首を捻るが、答えなど出されてはたまらない。ダルトの長身を執務机に押し出し、ロツテは定位置の長椅子に座った。

「お前らいつのまに仲良くなったんだ？」

執務机の角に腰掛け、ダルトは机の上の驚ペンを弄びながら、室内を見通す。一見無表情へ戻ったエーアリヒはあっさりそれを無視したのでロツテは肩を竦めてみせた。

「い、いいじゃない、そんなこと！ それよりなんで集まったわけ

!？」

「……エアリヒ？」

無表情を作りきれず、やや肩を震わせていたエアリヒは口ごもったまま、目だけで笑む。

「——失礼いたしました。そろそろ本格的に感謝祭の用意をと思ひまして。ダルト様もリーゼロッテ様も出来れば昼の間も領主、領主夫人でいていただきたいのですが」

「おいらの一存じゃロッテのことは決めらんねえからな。どうする？」

怪訝な顔を引き締め、ダルトがエアリヒの話を継いだ。

「そうね。感謝祭はみんなが楽しみにしてるし、今年は戦が終わって初めての感謝祭になるもの。絶対に良いものになりたいわ」

「ああ、おいらもそう思ってる。じゃあいんだな？　って実はルーザたちにはもう言ってるのさ。ロッテは断らないと思ってるな」

ふつと瞳を和ませたダルトに胸がざわめく。

「んじゃ、エアリヒ。おいらたちは構わねえ。今回の優先順位は感謝祭だ」

勝ち誇ったように自らの椅子から立ち上がるとエアリヒは書類を二束、ロッテとダルトそれぞれに渡した。

「去年は省かしていただきました。こちらは一昨年とその前の年の感謝祭の簡単な経費です。さて、わたしの方で出来ることは進めさせていただきましたが、他はお二人の意見を聞いてからと思ひまして」

その日、ロッテもダルトも夕食は書類片手に取った。執務室は深夜まで灯りがついたままだった。

十　十　十

「ロッテ様、こちらは？」

「表玄関のところに。そうだ、誰か針の上手いひとはいない？」

「それならば……」

目に見えて忙しくなってきた。感謝祭を六日前にして、ケント二ス城はてんでこ舞いだ。

それはロツテもだったし、ダルトもだった。今や寝室は別となり、お互いの私室で寝ている。寝る時間がばらばらだし、日中もほとんど顔を合わせない。

これはロツテにとって苦いものだ。ダルトの姿を目にするだけで安堵を覚えるというのに。

仕方ないとはいえ、ひどく寂しい気持ちになる。

一方、エーアリヒとは話し合いも兼ねて嫌という程、顔を付き合わせているのだからたまらない。話すのは良いが、必ず一言嫌みを言われるのだ。ロツテでなくとも拒みたくなるというものだ。

「——ですから、わたしの意見を受け入れてくださればいいものを」
「あんたは回りくどいのよ。だったら最初からそう言えばいいじゃない！」

「それはリーゼロツテ様の理解力の問題ですよ」

腹が立つことこの上ない。一事が万事この調子だ。

ロツテは今、ダルトの姿を探し、エーアリヒを見れば姿を隠すを繰り返す状態だった。それももう通用しなくなりそうで、溜め息を禁じ得ない。

「ロツテ様、パンに練り込むハーブですけど……」

「足りない？」

厨房で働く使用人がロツテの姿を見つけると小走りで近寄ってきた。

持ち帰ってもらうパンに薬草畑で育てたハーブを乾燥させて入れるように言い出したのはロツテだ。だが、摘んだハーブの数がまだ足りなかったらしく、申し訳なさそうに使用人は項垂れる。

「じゃあ、もう少し採ってくるわ。厨房に直接持つてくから待つて」

ロツテは近くにいたミネラに一声かけると中庭に向けて歩き出し

た。

ロツテの薬草畑がある中庭は当日開放する予定にないので準備に駆けずり回るひとは誰もおらず、廊下は徐々に閑散としてくる。すれ違う使用人と気安く声を掛け合いながら、ロツテは中庭へと歩を進めた。

——成功すればいいわ。

感謝祭は一大行事だ。ダルトにとってはザクテン卿として初の大事な仕事となる。

皆が楽しめるような感謝祭となれば、ダルトもきつと心から喜んでくれるだろう。灰茶の瞳が煌めくのを想像し、ロツテはほんのりと頬を染めた。

——今もきつと目をきらきらさせながら準備してるんだろうな。

小さな木の扉に手をかけ、きい、と軋む音をさせると途端に柔らかな土と緑の匂いがする。明るい光が満ちる中庭に出て、ロツテは空を見上げた。

四方を城に囲まれた四角い空は高く、黄みがかった水色だ。魚の鱗のような雲がゆっくりと流れていく。

……あたしがダルトのあの目をずっと見ていたいと思うのは間違いないのかしら？ 五年が経ったら、ザクテンが豊かになったら必ずここを去らなけりやならないの？

そもそもロツテがセトル王の娘でなかったら出会はずもないひとだった。

ダルトの姿に誰より安堵を覚えるのも、ダルトの仕草に逐一翻弄されるのも、単に事実的な配偶者としてだからだったら？

……離れればどうということもなくなるのかしら？ 忘れてまた誰かを好きになるのかしら？

考えかけてロツテは首を振る。

数日前にも迷い、結局エーアリヒのお陰であいまいなまま終わった。

恋をしている自覚はある。ぼんやりとした望みも持っていた。

けれど、ロツテは今はずきりと自分の心が求めるものを見出だしていた。

——ダルトが好き。だから、ここに、ザクテンにずっといたい。身代わりなんて嫌だ、と言ったかつての自分が聞いたら驚愕するだろう。

強引に父王に命じられ、ロツテはこの地にやって来ることになった。その点だけは父に感謝したいと思う。

つらつらとそんなことを考えながらささやかな薬草園の脇の納屋へバケツを取りに再び歩き出したロツテは途中で、うつ、と怯んだ。……最悪。なんで通り道にエーアリヒがいるわけ！？

またあの冷たい視線で見られたら堪らないし、嫌みを聞くのは面倒だ。思わず立ち止まったロツテは身構える。

冷言を待ったが凜とした声が響くことはなかった。微動だにしない姿にさすがに疑問が沸き、首を傾げる。

「え、エーアリヒ？」

緑の瞳に気がなかった。

それは虚ろにロツテを見ているのに、何も映してはいない。青ざめた表情と歪められた眉に慌て、まろびながらロツテはエーアリヒに駆け寄った。

「エーアリヒ——！！」

途端にぐらりと身体が揺れる。

「ちよつと大丈夫！？ どうしたの！？」

間一髪抱き止めた身体は予想外に軽い。元々の身長差が余りないから、ロツテと変わらないくらいかもしれない。

——でも男のひとなのにくらなんでも軽すぎる。ちゃんと食べてんのかしら？

覗き込んだ顔は蒼白だったが、ロツテを間近で見返した。ようやく焦点の合った目は見開かれ、身動きして離れようとする。

それを許す程、ロツテは無知ではない。

立ち眩みのようだ。足に全く力が入っていなかった。手を離せば、

地面に倒れ込んでしまう。

「離して……下さい……」

「馬鹿言わないでよっ！」

いつもの凜とした声が嘘のように弱々しい声だ。戦慄く唇は紫に近い。

叱咤し、きよるきよると辺りを見回した。

……どっか横になれるとこに運ばなきゃ。

さすがにロッテ一人では抱え上げられないし、両腕をエアリヒの脇から背へ回す。引っ張って行く内に誰かに行き会っだろう。

そして、それは予想以上に早かった。

抱きなおし、動き出そうとした刹那――。

「何してんだ？」

首だけで振り返ったロッテは安堵に笑みを浮かべた。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（後書き）

間の悪い男〃ダルトです。

今回も長々と読んでくださりありがとうございました。

感想等は泣いて喜びますので、よければお願いします。またお気に入り登録ありがとうございます。うれしいです！

もう一、二話で終了予定です。今しばらくお付き合いくださいませ。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？

小麦の穂にも似た白金の髪に光を受け、こちらに近寄って来た姿に心底ほっとした。

さすがにロツテ一人では力が入っていないエーアリヒをそばの木陰に運ぶだけで精一杯、寝台までは辿り着けないだろう。

「ダルト、良かつ——」

「本当に何してんだ？ 二人で、抱き合って、何を？」

すぐ側に歪められ色をなくした灰茶の瞳があった。

……あ、あれ？ なんか微妙に、怒ってる？

その醸し出す雰囲気急に怖れを感じて、ロツテは恐慌した。

「ち、違う！！」

これはまずい。

誤解された、と遅まきながら理解したロツテだが、徐々に歪むダルトの表情は明らかに激怒に近い。

弱々しく呻く声に何故気付かないのかと苛立ちを感じながら、狼狽する。

エーアリヒの絹糸のように流れる黒髪と、ロツテを交互に見て——。

「ちよっ——ダルト！？」

彼は踵を返した。

「ダルト——！」

一生懸命に声を張り上げてその名を呼ぶのに、ちらとも振り返らない。

跳ねる金色が残像のようにロツテの視界に残る。

「早く、追って下さい……」

追いかける。

追いかければ、誤解だと理解^{わか}ってくれるだろうか？

足を踏み出しかけたロツテだったが、ぐっとエーアリヒを抱き直す。

「馬鹿言わないでよ！ い、いいわ。後で説明すればいいから！！」
たとえば馬の合わないエーアリヒとはいえ、病人を置いてなどいけるわけがない。

決定的な溝というわけでもない筈だ。

……話せばダルトは絶対にわかってくれるわ。

周囲をもう一度見回し、ロツテは一番近くの木陰にエーアリヒを引きずって行く。先日ロツテが悩みを預けたあの木だ。

「それでは遅いです。行つて……少し休めば治りますから……」

「いいつて！ ——……？」

ぐったりと顔を上げないまま、エーアリヒがロツテから離れようと身体を捻った。そこでロツテは自分の胸元を押す柔らかな感触に僅かに疑念を覚える。

——しかも、ふたつ……？

瞬時に眉間にしわを寄せ、弾かれたようにエーアリヒを見下ろした。

いつもは真っ直ぐな黒髪で隠れたうなじから首にかけて、随分とほっそりしている。筋すじのない、うっすら脂肪ののつた、柔らかそうな首元だ。くてんと下を向いてる為に浮き上がる首の骨の線の細さに疑問がむくむくと沸く。

自分の手が回りきるくらい華奢な胴体、麗しい程の美貌。間近で見ると肌は陶器のように滑らかで。

「ごめん。違ったらすぐ失礼だけど、エーアリヒ、あんた……」

言い淀み、それでも目を背けることは出来ない。

木陰にエーアリヒを横たえ、ロツテはその蠟のように蒼白の美貌を覗き込んだ。

「あんた、女……？」

信じられない思いでロツテの声は震えた。

エーアリヒが苦笑する。

「……月のものの最中ですので調子が芳しくないだけですから……だからご心配には及びません」

女は子供を生む為の機能を常に最上の状態にもたらすために、月に一回は苦痛を感じるものだ。そして、月のものがある以上、エアリヒは確かに女なのだろう。

「どうして……？」

横になって少し楽になったのか、エアリヒがほっとしたかのように弱々しい笑みを見せた。

同性であるロッテにすら庇護欲を掻き立てさせるような、危うい美しさだ。男装しているために倒錯的であるとさえ言える。

そして、ロッテは心底安堵した。

ダルトがこんなエアリヒを見ずに去ったことに。

「クラリア王妃は陛下の側に女性がいることがお嫌いですし、シユリヒト王子に見つかることもっと面倒でして……男装が一番自分を隠すのに都合が良いのです」

ああ、と小さく呟いて、ロッテは納得した。

クラリアがロッテを見る目は憎悪に溢れていたし、シユリヒトはその端整な面立ちに収まる瞳にひどく不釣り合いな好色なものを向けてきた。洗練されない田舎者であり異母妹のロッテでさえそうなのだ。

傾国と言っている程の美貌はむしろエアリヒの仕事の邪魔にしかなるまい。

「陛下はわたしが女だとご存知で、その上で取り立てて下さったのですが。女であるわたしがダルト様の補佐に付くことをあなたが不安に思いかもしれないから時が来るまで秘密にするようにと」

視線を泳がせ、狼狽した。

「あたしが？　なんで………！！」

反発するように即座に声を上げるが、ロッテは思い直す。

たった今、確かにそう考えた。それは不安でなく安堵だったけれども。

エーアリヒが女だと、この美しさをダルトの目から隠せて良かったと、思ったことは確かだ。

誤解を解きたいと動きかけた足に手をやり、ロツテはようやくエーアリヒに視線を戻した。

「で、でもなんであの王サマがそんなこと……」

「貴女のお幸せを心から願っている以外に何があると言つのです？」
笑い含みで問いかけるエーアリヒに、ロツテは目を眇る。

そんなことがあるわけない。

父王ハイダルはロツテの気持ちなど齒牙にもかけず、母を想う態度ひとつ見せなかった。猜疑心でいっぱい視線をエーアリヒに向け、肩を竦める。

絶対に他に理由がある筈だ。

「陛下は国内の誰よりもダルト様を高く買っておられる。その有能な男に有無を言わず貴女を嫁がせたのはそうすればご自分が安心出来るからでしょう。——陛下は貴女が可愛いのですよ」

「そんな……」

「さて、わたしはここでもうしばらく休ませてください。リーゼロツテ様はダルト様を追いかけてお話をなさってはいかがです？」
いつものエーアリヒが戻って来た。

ロツテは不承不承頷き、立ち上がる。

「……あたしは、それでもあの王サマは赦せないよ」

歩き出した足を止め、振り返ったロツテはエーアリヒを見下ろした。

「それでかまわないのです。陛下もそのようなことは望んでおりません。貴女には国政に翻弄されるような距離にいて欲しくはないのですよ」

ハイダルの冷たい言葉の裏に隠されたものをエーアリヒはあつさり告げた。

『ザクテン領を任せるとはいえベツツイーク共々登城は許さん。彼の地で静かに暮らすが良い』

司祭が驚き確認までした言葉の意味は、ロツテを生臭い世界に置きたくなかったのだ。

ロツテに軽く微笑んでエアリヒは目を閉じた。話は終わりということだろうが、ロツテはその場を一步も動けなかった。

十 十 十

あの日からダルトはロツテを避け続けている。

四日が過ぎた。

明後日は祭りである。準備に忙しい領民たちは領主夫妻の不仲に気付かない。

「――まだ仲直りされていないので？」

相変わらず男装を続けるエアリヒが近付いて来た。肩を竦めてそれに応じ、ロツテは厨房から届けられた料理の最終確認の書類に判を押す。

「取り付く島もないわよ。目も合わせてくれないんだから」

努めて冷静に答え、ロツテは顔を上げた。

「そっちはどうなの？」

「こちらと同じようなものですよ。不機嫌にずっと黙っておられることも多いので仕事が進みません」

「困ったことになったわね……」

書類をエアリヒから受け取り目を通しながら、ロツテはぼそりと呟いた。エアリヒの身動きが視界の端に映り、慌てて弁解する。「あんたを責めてるわけじゃないのよ！？ あんたは体調が良くなかったんだから仕方ないの！ ただちょっとあたしまだ混乱してて……その……」

逡巡し、ロツテは書類を机の上に置いた。

「誰にも……ミネラにも相談出来ないし、もうどうしたらいいかわからなくて……」

ロツテにいつも向けられた温かみのある、穏やかな灰茶の瞳。暖

炉の置き火にも似た、心がほっこりとするダルトの瞳が感情をなくし、冷えた視線に変わっていた。

あれは誤解だと言うことすら出来ていなかった。

不意に滲んだ視界にロッテは目を擦る。涙が手の甲に筋になって残った。

「リーゼロッテ様、本日これからお時間はおありですか？」

慰めの一言もなく淡々と聞いてくるエアリヒに、赤く色付く瞳でこくりとロッテは頷いた。

「では、ついて来てください」

「……で、なんであたしのクローゼットをあんたが開けてんの？」

「前にも言いましたが、この辺りはザクテン領主夫人としては相応しくありませんので処分して下さいね」

ロッテの衣装の殆どをエアリヒは捨てると言うのか。冗談ではない、とロッテは憤った。

「動きやすいんだから嫌に決まってるでしょ！ あんた何しに来たのよっ！？」

叫んでからぽかんと口を開ける。あの無表情のエアリヒが、笑っても含み笑いがせいぜいのエアリヒが、信じられないことに真っ赤になっている。

「……………」

「ど？」

ぱくぱくと何度も口を開け閉めし、エアリヒが消え入りそうな声で呟いた。

余りに小さな声に身を乗り出して聞き返す。

「……ドレスをお借りしたい」

「あたしのを！？」

言うがいなや、ロッテの許可もなくエアリヒは一着のドレスをクローゼットから取り出した。

深緑の色をしたドレスだ。

「身長は殆ど差がありませんから——論より証拠、百聞は一見にしかずです」

にこりと笑みを作ったエーアリヒは、残念ながらロツテには全く似合わないそのドレスを軽く身体に当てた。まるで最初からエーアリヒに着られることを想定したかのように、黒耀石を磨いた瞳と緑の黒髪が映える。

ロツテは茫然とそれを見て、囁いた。

「……つまり？ えっと？ ダルトに見せるってこと？」

「そうです。いくら何でもわたしが女だとわかればダルト様とてご自分の勘違いに気付かれるでしょう？」

ドレスは襟ぐりが開いたものだ。深くはないが胸元が晒される身頃で、間違いなくエーアリヒが女性だとわかる筈である。

「そうだけど……でも……」

誤解は必ずや晴れるだろう。しかし、ロツテの頭に過つたのは違う心配だった。

——もしダルトがエーアリヒを好きになっちゃったら！？

村の友人の中には一目惚れを経験した者も少なからずいた。しかも、ダルトが目にするのは女の自分から見ても美しいと思える程のエーアリヒなのだ。

目の前で好きなひとが恋に落ちる瞬間を目撃などしたくない。表情を曇らせ、ロツテは首を振ろうとする。

「大丈夫ですよ、ダルト様なら」

したり顔でエーアリヒが笑った。

見透かされていることに赤くなり、ロツテはぶいっと横を向く。

「なんかやつぱりあんたのことも好きになれないわ」

「お互い様ですよ。——ふふっあははっ！」

エーアリヒが声を上げて笑うところなど初めて見た。顔を崩し笑うエーアリヒと視線を合わせ、ロツテもまた声を上げると笑い出す。ひとしきり笑いあえば、友人も同然だった。

ロツテは下着姿のエーアリヒにドレスを被せる。パニエに引っ掛

かった裾を捌き、エーアリヒを見上げた。

「どう？」

ゆっくりと立ち上がったロツテは出来映えに満足そうに笑う。

完璧な貴婦人だ。

唯一の心配が再び頭をもたげるが、このまま誤解され続けることの方が辛い。ロツテへ向けるダルトの視線から優しさが消えてしまったことの方が痛いと思う。

彼は知らないのだ。

故郷を離れた自分がどれ程ダルトを頼りに思っているのか。

あの灰茶の瞳を見てどれ程心が和むのかを。

正直に言えば、限界だった。早くあの存在を取り戻さなくては、ロツテは押し潰されてしまう。孤独に、不安に、そして肩書きだけの地位に。

苦悩を僅かに見せたロツテにエーアリヒが皮肉気に口角を上げた。

「胸元がきつくて胴回りが緩いですけど、まあ大丈夫ですよ」

「……あんたほんとにいい性格してるわ」

ウエスト部分を引っ張りながらのその言葉にぶうつとふくれながらロツテは応じる。しかし、その軽口はエーアリヒなりに、ロツテの気持ちを悩みや落胆、悲しみから反らしてくれようとしたものかもしれない。今まで言われた言葉の数々も領主夫人としての心得であつた。

「お褒めにあずかり光栄です」

褒めてない、と口では冷たく切り捨てながら、ロツテは破顔した。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（後書き）

評価そしてお気に入り登録を感謝しております。とても励みになっています！ 今後も頑張つて執筆を続けていきたいと思ひます。次話もよろしくお願ひいたします。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？

祭り用の蠟燭に火を灯し、ダルトはそのゆらゆらと揺れる炎を見つめていた。

こうして見ると、それはロツテに似ていた。

青い瞳は生氣に溢れているのに、どこか不安気に揺れている。立ち位置を常に探しているかのようだったロツテ。

働き者で、ころころと変わる表情に憧れにも似た眩しさを覚えた。太陽の良く似合う滌刺とした容姿はダルトの目を引く。

今だってそうだ。ここにはいないことはわかっているのに、どこかに探している。

小さく溜め息を吐くと、蠟燭が呼気で激しく揺れた。

——ロツテを手放す覚悟をしなきゃなんねえのに……。

慌てて蠟燭に手を翳しながら、ダルトは目を眇る。

今日は感謝祭当日だ。

初めて会った日からダルトはロツテの自由を願い続けてきた。彼女の自由はダルトの願いの延長上にあり、ザクテンを必ず豊かにしてロツテを村に返してやると誓った。

少し前の自分なら笑って彼女をエーアリヒと添わせてやっただろう。

けれど、今はどうしても覚悟が出来ない。

情けなくて、彼女の顔が見れなくて、ロツテを避け続けている。

半月程前、彼女が怪我をしたあの日からロツテとエーアリヒは妙だった。最初は迷惑だと怒鳴ったせいかと思っていた。

……あれだって本当においら頭が真っ白になっちまっただけなんだ。

その後、ロツテの傷がなんともなかったことに心底安堵したのだが、二人は二人だけに通じる目線で会話していた。

そして六日前——抱き合っていた二人。

目の前が真つ暗になり、思わず二人に背を向けて。

「……自覚した瞬間に失恋なんて笑っちゃうよな。馬鹿だ、おいらは」

今さら気付いたところで何も変わらないのに、まだぐずぐずとしているのだから。

そう、ダルトはいつのまにかロツテを愛していた。

——まず、エーアリヒと話をしなけりやなあ。つつつてもあいつどこに行つたんだ？

そう言えば今日は昼過ぎからその姿を見ていない。もう感謝祭のために城の門が開放されているから、二刻はダルトのそばを離れていたことになる。

顔も見たくないと思える程だが、彼はダルトの側近だ。エーアリヒがいなければダルト一人で広大なザクテン領を治めることは難しく、故にエーアリヒはどんなにダルトが無視しても堪えた様子もなく傍らで仕事を進めていた。

おかしい、と直感的に思う。

彼は感謝祭で浮かれて職務を放棄するような性格ではない。

「なあ。エーアリヒ見なかったか？」

とりあえず通りがかった下男に聞いてみる。

「俺が最後に見たのはロツテ様の部屋のそばですけど」

瞬間、踵を返していた。

人混みを掻き分け、ロツテの私室までの近道を走る。

「だ、ダルト様！？ 何をなさつて——」

「悪い！！ 緊急だつ！！」

背中にかけられる使用人の咎めの声に律儀に返事をしながら、広間を通り抜けようとして——ダルトの視界の端を無視出来ない存在が横切った。

後ろ姿だろうと、一瞬だろうと、決して彼女を間違えたりはしない。

——ロツテ！！

赤葡萄の色をしたドレスがひらひらと人込みに見え隠れする。

バルコニーへの扉を出たロツテを見て、ダルトは急停止した。方向を変えるべく足を別の方角へ向け、踏み出し、ダルトは阻まれる。「すまん！ どいてく、れ……？」

反射的にぶつかった女性に目を合わせ謝罪したダルトはその違和感に軽く首を傾げた。

開放されてすぐに門をくぐった気の早い領民だろう。目の覚める、華奢だが蠱惑的な美貌の女だ。

——なんだ……？ どっかで会ったことがあるのか？

盛り上がる胸元に視線を向けないようにしながらも、繁々と眺める。

——確かにどこかで見た………っ！？

衝撃よりも後悔が先に立った。

ロツテがここ数日ダルトに向けていた悲しそうな顔が、胸を過る。

「……エアリヒ、か？」

「わたしとリーゼロツテ様のことは誤解だと理解していただけましたか？」

艶然と微笑んだエアリヒに頭を抱え、ダルトは呻いた。

「……やられた」

「リーゼロツテ様はバルコニーでダルト様をお待ちですよ」

聞いた途端に感情が振り子のように襲って来た。

ロツテはエアリヒを選んだわけではなかった、という安堵。

けれど、あんな態度をとった自分を許してくれるだろうか、という不安。あんなに、いつかロツテを自由にしてやると言っていたにも関わらずだ。呆れられたかもしれない。

混じりあった思いは動きかけたダルトの足を止める。

「ダルト様……？」

不思議そうに名を呼んだエアリヒの声は右から左へと抜けていった。

ロツテの自由についてこのところ考え続けていた。

今回はただ自分が誤解しただけだ。実際エーアリヒが女だとわかり、驚愕よりも安堵が先になるくらい、想いはダルトの心に育ってしまった。

しかし、もし、今度は本物の男をロッテが連れて来たら。ダルトは自分の想像に身震いしながらも、決意をひとつする。

——本当は、おいらが幸せにしてやりてえし、ザクテンが豊かになるとこを見せてやりてえけど。

ロッテが欲しているのは自由だから。

それがロッテの幸せというなら、笑って送ろうとダルトは決めた。……ロッテの幸せの為に、おいらがしてやれることは多分それだけが唯一だかな。

苦く笑んだダルトは足を叱咤し、バルコニーに向かう。希望を捨てる気はそれでもさらさらなかったが——永遠に、自分への愛が手に入らない未来を迎えるために。

＋　　＋　　＋

「——ロッテ」

「エーアリヒを見たのね？」

呼ばれた自分の名に振り返ることなくそう呟いて下を覗くと、ロッテは小さく溜め息を吐く。袖の広がったドレスを引っかけないよう気を付けて柵にもたれかかった。

エーアリヒのドレス姿はロッテも目を離すことにも気力が必要なくらい眩いものだった。

「すつごく綺麗で、いくらあんなに教えるためでも見せるの躊躇っちゃった」

おどけたように言葉に出すが、背後からの返事はない。

二人の間に沈黙が落ちる。

「……最初の時より小麦畑が増えたね」

闇の中、見えもしないのに、ロッテはそう言った。

「そうだな」

靴音を響かせ、ダルトが横に立つ。

俯いたままロッテは軽く笑った。

「あたし、ここが見渡すかぎり金色でいっぱいになればいいなって思うわ」

かつて荒れ地だった小麦畑は今は黄金に変わっていて眼下に広がっている。

しかし、ルーザたち農夫は皆が言う。

『ガヤが焼いちまう前はそりゃあ見事な景色だった』

『ロッテ様はザクテンの出身じゃないから見たことないんだろ？』

こんな規模じゃなくってね、本当に一面が金色なんだ』

『視界いっぱい黄金の波さね』

口々に言っでは少し寂しそうに荒れ果てた畑を見るその表情に心が揺れた。

そして、見てみたいと心底思った。

「ああ。おいらはこの荒れた地を豊かにしたい。おいらは農夫だから、おいらに出来る方法で」

ダルトが至極当然と言った風に軽く頷く。そのあまりにもあつさりとした物言いに思わずダルトの方を見た。

彼は、真っ直ぐにロッテを見つめていた。

「ロッテはどうするんだ？」

意味が理解出来ずに首を傾げると、表情が変化する。

「もしも……もしも今すぐ帰りたいってんならおいらに止める権利はねえ。宣誓を仕切ったのは司祭さまじゃなくてエーアリヒだから、無効を宣言すりゃあいい。あんたは王の娘だし、元の家に戻ってもここよかましな生活が出来るさ」

衝撃に目を見開く。

遠回しに、すぐに帰れ、と言われているのだろうか。

心臓が異様な程鼓動を打ち、胸が痛い。締め付けられるようなこの感覚の理由は既に知っている。

父王ハイダルに感謝すら覚える程、ロツテはダルトに出会えたことが嬉しい。この気持ちは憧れだけではないから。

——そう、あたしがダルトを好きだから……ショックを受けて当然なのよ。

努めて冷静にそう分析する。でないと、泣いてしまいそうだったが。

……でも似てる。

ダルトのその顔が、黄金の波を懐かしむルーザたちの複雑な表情に酷似している。

細められた灰茶の瞳としかめられた眉が——寂しそうに見えた。

「……あたしは見たいのよ」

ダルトがきよろきよろと周りを見回す。それに首を振って返し、ロツテはひとつ深呼吸して心を落ち着ける。

「ザクテンが豊かになるところが見たいの。ザクテン（ここ）にずっといちゃいけない？」

それを聞いた彼の余りの狼狽ぶりに自然に笑みが溢れる。

一体どうしてロツテがダルトの側よりも良い生活を求めるなどと思っただろう。帰りたいと思っていると考えたのだろう。

ロツテの気持ちは決まっている。

「それはおいらの、奥さんとしてか？」

灰茶の瞳に浮かんだ困惑が徐々に消え、かわりに喜色が昇った。

ロツテは深く頷く。

「そうよ。あたしはこのままダルトの奥さんでいたい。ダルトが――」

「好きだから？」

語尾を遮り、ダルトはそう言った。

口許は軽く笑んでいるが、灰茶の瞳は炯々と、真摯なものを宿している。

念を押すかのような言い方は——意思の確認。

ロツテは小さく睨みながら、ダルトを見上げた。

「そうよ。何？ 悪い？」

腰に手をあて、開き直り宣言すると、ダルトが微苦笑する。

「いや。おいらもロッテを愛してる」

心臓が一瞬止まった。

けれど感じたのは衝撃ではなく、どこか予想していたかのような安堵で。

それでも、恥ずかしさと嬉しさは極上のものだ。

照れの残る目許を覆ったロッテは、はぁ、と溜め息を吐いて柵から身を乗り出す。

「……随分あっさり言うのね」

「おいらには物語集の騎士さまみたいに膝を折って求婚なんて真似は出来ねえよ」

ぐいっと大きな掌に腕を引かれて、気付けばロッテはダルトの腕の中だった。

視線を上に移すと、ダルトは顔を背けている。だが、見上げる精悍な顎の線の延長にある耳は、真っ赤に色付いていた。

「いつか、黄金に染まる景色を見せてやるから——」

ロッテはダルトの胸に頬を寄せる。早鐘のような鼓動を耳に聞きながら、瞳を閉じた。

「だからおいらの側にいるといい」

ゆっくりと頷くと、ぎゅっと抱き締められる。幸福感に酔いながら、ロッテはまだ見ぬ実りの光景を想像していた。

そう遠くない未来に見るであろうザクテンの姿を。

十 十 十

後に、セトルから独立したザクテンは豊かな農業国として周辺諸国に羨望を受けることになる。

またセトル王ハイダルは晩年、ダルトは信頼に足る男だった、余の最も大切な娘を任せる相手として申し分なかった、と話していた

と
い
う。

《第二章》く身代わり姫の憂鬱く？（後書き）

長い話を読んでいただきありがとうございました。またお気に入り登録及び評価を大変嬉しく思っています。

今回でリーゼロッテを主人公とした《第二章》は終了です。次回《第三章》は港町に舞台を移したいと思います。次回《第三章》もよろしくお願いいたします。

《第三章》 ～天使にご用心～？（前書き）

《第三章》です。今回は《第二章》の数年後の話になります。
最後までお付き合いしていただけると嬉しいです。よろしく願い
いたします。

《第三章》　天使にご用心？

「……リノチエロンテ公太子が亡くなったそうだ」

マルゴットが父——セトル王国の王ハイダルの口からそう知らされて一月と数日後。

「フェルナ公国から正式に書状が届いた。お前の婚約相手は弟のジエネローゾ公子ということになったからそのつもりで」

「わたくしの婚約者が……リノチエロンテ殿下が亡くなられてから少ししか経っておりません！」

余りの言葉にマルゴットは思わず反論した。

一度も会ったことがない遠い地の婚約者だった、それでも悲しいことに違いはない。

毎年一枚の小さな肖像画が必ず送られてきた。絵はいずれもマルゴットの私室にまだ飾られている。婚約して四年、十五歳になる来年には海洋公国フェルナに嫁ぐ予定だったのだから。

しかし、唯々諾々と従ってきた娘の反発に、ハイダルは動揺ひとつしない。眉を軽く上げ、感情の見えない青い瞳を眇るとばさりと切り捨てた。

「お前の考えなど国の行く末に比べれば些末なものだ。政略に心の意味など見出だすものではない。それは王女の義務だ」

マルゴットは小さく、はい、と呟いた。

父ハイダルにとってマルゴットの価値はそれ以上の意味を持たないのだろう。

数年前に結婚した異母姉リーゼロッテを眺める父を見て、やっとマルゴットは理解したのだ。あんなに優しい目を向けられたことはないのだから。

父が愛しているのは自分の跡継ぎである王太子の兄シュリヒトとリーゼロッテだけ。マルゴットが父の視界に映るのは価値があるからで、もしそうでなかったら無関心なままで終わっただろう。

父にも母にも似ていない鳶色の瞳を伏せてマルゴットは頂垂れた。
「ジェネローゾ公子は先日、立太子の儀を終えたそうだ。マルゴット、お前は未来の公妃として祝賀に行くがいい」

ハイダルの声が降る。

「出発は十日後、滞在は全て含め三月を予定している。供の者はその間フェルナを見聞することになるう」

「わかりました」

立ち上がり、身を翻そうとしたマルゴットをハイダルが止めた。

一通の手紙がマルゴットに差し出される。

疑問の表情を浮かべ、首を傾げると、裏を見せられた。

きちんと封蝋されている。紋章は初見だったが、どこかリノチェロンテと似通ったものだ。

「これはお前へのジェネローゾ公太子からの書簡だ。くれぐれも我が国の不利になるようなことを返書にしたためないように」

「ジェネローゾ殿下からの……？」

簡素な乳白色の封書の右下『ジェネローゾ・アズーリ・フェルナ・ヴィットーリオ』と署名されている。手紙を受け取ったマルゴットは、何故？ と思ったが、それを口に出せる雰囲気でもなかった。

御世辞も美辞麗句もない。時候の挨拶も世間話も一切なかった。

「不思議ね……兄弟ってどこか似るものらしいけれど」

文章の雰囲気も何もかも違うのに、リノチェロンテと同じ筆跡だった。

『兄のことは残念です。』

フェルナはセトルのように水や森に恵まれてはいません。戸惑われることも多いでしょう。

けれど、わたしと共に国を育てる決断を。ここは海風の吹く、活気ある国です』

二度短い手紙を読むとマルゴットは長椅子から立ち上がり、我知らず微笑んだ。

ジェネローゾの飾り気ひとつない書簡は、その端々から彼の真摯さが見てとれる。

それに少なくともジェネローゾはマルゴットの意見を聞いてくれた。

勿論、否と答えたところで婚約が白紙に戻ることはないだろう。個人の問題ではなく国同士で話し合った末の同盟なのだから。

けれど、頭ごなしではなく、尊重してくれることが嬉しかった。

リーゼロッテの件でセトル王妃である母クラーリアは離宮に引き込もってしまった。見映えの悪い娘よ、と元々余り関心を持たれていなかったから母との距離は遠い。兄とも歳が離れていたためか仲が良いとは言い難く、父にとっての価値は王女という身分だけ。

家族はマルゴットに無関心で、命じることが当然だと思っている。それが普通だったし、別段不都合だったわけでもない。

三度手紙に目を走らせ、マルゴットは肖像画に手をかけた。ゆっくりと全てを伏せる。

「リノチェロンテ殿下のお手紙はわたくしを褒めてばかりでしたけれど……」

婚約者を亡くしたばかりで不謹慎だとは思うが、マルゴットは少しだけフェルナに向かうのが楽しみになった。

国を共に育てる決断。

それはジェネローゾと共に生きる決断だ。

彼の妃として。

国の要として。

「わたくしに務まるかはわからないけれど——決断します」

窓辺に佇み、南西の方角を見つめる。遙か彼方にあるフェルナの公宮を心に浮かべて。

マルゴットは小さく呟いた。

陸路で海を目指し、セトルの保有する数少ない港のひとつから船に乗って半月を数えた後。マルゴットはフェルナ公宮のある公都ルチエーナに降り立った。

「ここが海洋公国フェルナ……なんて活気があるのかしら」

ルチエーナは広大な港町だ。

積み荷を下ろす男たちの怒号に混じり、女たちの甲高い笑い声が響く。石畳にたくさんの店が出され、その間を子供が走り回っていた。どの顔も生気に溢れ、生き生きとしている。

馬車から覗き見ただけで、圧倒されるような賑わいだ。セトルの王都も確かに人は多かったが、ここは雰囲気似て異なるものだった。

ほう、と感嘆の溜め息をついたマルゴットの向かいには、出迎えの大臣が座っている。彼はマルゴットの賞賛が混じった溜め息を嬉しそくに聞いている。

「なにもかもがセトルと違うんですね。潮の匂い、海から吹く風、陽射しもずっと強いです」

石畳に落ちる真つ黒の影に目を止め、そして強い潮風に前髪を押さえたマルゴットは、素晴らしいわ、と呟いた。

「なんて美しい国なの……皆が笑ってられることは国の本来在るべき形だと思いますわ。それにこの活気。わたくしまで笑い出してしまいそうです」

「——フェルナの町の七割は港町ですから。コールヤ湾の豊富な海産物は全てフェルナに集められると言っても過言ではありませんし。王女殿下がフェルナをお気に召されたようで嬉しく思いますよ」

「こんな美しい国を嫌う人がいる筈がありませんわ！ 勿論わたくしもです……」

一瞬目を丸くさせた大臣に、マルゴットは顔を伏せた。

出過ぎた物言いだっただろうか、と不安になる。セトルでは叱責を受けたが、ここでもそうなるのだろうか。

暗嘆たる気持ちで向かいを見ると、予想に反して大臣は微笑んだ。

「ジエネローゾ殿下がお聞きになったらさぞかし喜ぶでしょうな。
——さ、もうまもなく公宮が、ガツビアーノ宮が見えてまいりますぞ」

言われて窓から外を見る。そうしてマルゴットは自分の想像力の乏しさを知った。

そこにあつたのは、巨大な宮殿だった。

繊細な彫刻が施された壁は白亜に輝き、赤茶の色をした丸い屋根と尖塔が林立している。ところどころが金色に煌めいて、けれど華美に溺れた印象はまったくなく、ただただ呆然とするような荘厳さだ。

馬車が蹄の音を響かせて止まる。

ドレスの裾を持ち上げゆっくりと降り立ったフェルナの地は、何もかもが確かにセトルと違っていた。

《第三章》 ～天使にご用心？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。次話の更新もなるべく早めにしたと思います。よろしく願います。

《第三章》く天使にご用心く？（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

《第三章》　～天使にご用心～

光沢ある紅い絨毯がひかれた謁見室に、海洋公国を治める筈のフェルナ公の姿も、初めて会う婚約者の姿もなかった。

空の玉座に慌てふためく侍従を大臣が問い質している。

……なにかあったのかしら？

マルゴットはフェルナを訪れるにあたり正式な招待を受けた。出迎えがまったくいない状況は確かに異様だ。ましてや、未来の公妃であり、公太子の婚約者でもあるのだ。

「こちらの不手際のように……」

頭を掻き掻き大臣が眉を下げる。青くなった顔色と震える語尾に、彼の心情が手に取るようにわかった。

続きを促すため、マルゴットは小さく首を傾げる。

「実はフェルナ公、キツソーゾ陛下はリノチェロンテ殿下が亡くなられてから心労で臥せておられましてな。今日も余り芳しくはないようで、ジェネローゾ殿下がこちらで王女殿下をお待ちしている筈でしたのだが……」

「そ、その！　殿下は所用で！　今しばらく！　今しばらくお待ちを！」

侍従の額に浮かんだ玉のような汗を気の毒に思い、マルゴットは微笑んだ。

「わかりました」

中規模の謁見室は大きな窓が設けられていて、開け放たれたカーテンの間から光を反射し波白く泡立つ青い海が見渡せる。手前に広がる公都ルチェーナの白と赤茶の街並みや港に停泊する色とりどりの船との対比が見事だった。

「こちらの部屋からの眺めは素晴らしいものですね。そう、海が……」

どうにか侍従と大臣の気を紛らわしてあげようと、目に入った海

を持ち出した。

「船から見る海とは違う気がします。色も、波の感じも——」

「王女さまはフェルナの言葉がお上手なんだね！」

突然、子供の高い声が響き渡った。

マルゴットは心臓が止まるかと思える程驚いた。

だが、たしなみ通りに穏やかに身体ごと振り返り、そうして感嘆に目を見開く。

淡い金色の巻き毛に海を珠にして磨きあげたかのような青い瞳。白い肌に薔薇色の頬をした——天の御遣いかと思う程に愛らしい少年がそこに立っていた。

桃色の唇をひき、彫像にも似た優雅な笑みを見せている。まるで名のある芸術家の造った作品のようだ。完璧な比率で造られた身体が扉を開いた構図で絵を描かせたら、宮廷画家は泣いて喜ぶかもしれない。

唯一の人間味と言えるものは頬に微かに散ったそばかすだ。強い日差しの結果だろう。

誰？ とマルゴットが思うより早く、大臣が声をあげる。

「殿下！！ 本日はこちらに出入りはすると言われておいでしよう！」

「別にジェネ兄さまは何も言っただけだからいいかしらと思って！」

悪びれる風もなく少年は快活に笑った。額を押さえた大臣を覗き込んでから、ふふつとマルゴットに近寄ってくる。

「僕はルツカだよ。セトルのマルゴット王女さまだよね？」

物怖じしないはきはきとした言葉で隣に立った子供に、あ、と氣付いた。

以前に数回やり取りしたりノチェロンテの手紙に書かれていたのだ。二人の弟公子のことが。

「ルツカ……ジェネローゾ殿下の弟君のルツカート殿下でいらっし

やいますか？」

「ルツカって呼んでね。殿下はいらないよ？　よろしく、義姉さま
！」

顔いっぱいに笑みを浮かべたルツカにつられて笑い返した。子供らしく満足そうに瞳を輝かせ、くるつと侍従を見据える。

「で、兄さまはまだなの？」

「それがまだ執務室から出ておられないとのこと……」

肩を竦めた侍従は身の置き所がないと言うように小さくなってしまった。ルツカはぶくりと頬を膨らませる。

その様子はセトルで見かけた栗鼠にそっくりだ。

「まったく兄さまってば、義姉さまは国賓でしょうに。照れているのかしら？」

「殿下のお気持ちは一介の侍従である私には……」

大人顔負けに腕を組み大きく頷いたルツカに、侍従は項垂れる。

「うん、そうだよ。それはわかってるよ。——義姉さま、僕でかまわないよね？　ガッピアーノ宮を案内してあげる！」

「きゃっ！」

手を引つ張られて思わずあげた声に頓着せずに、ルツカは嬉しそうにマルゴットを見上げてきた。

侍従が足早にルツカとマルゴットに駆け寄り、腕を広げて止めようとする。

「ちよっ——殿下！　ジエネローゾ殿下に叱られますよっ！？」

「いいのいいの！　義姉さま行こう！！」

「え……けれど……」

本当にいいのだろうか？

挨拶ぐらいはきちんとすべきではないか？　と迷うマルゴットに気付かず、ルツカが滑らかに呟く。

「兄さまは放っておいて、まずは父さまに会うべきかしら？　今日はお加減が悪いらしいけれど……やっぱりお元気な時がいいのかしら？　中庭に咲くお花はとてもきれいだけどまだ日差しが強くて大

変だし、噴水も——僕は好きだけど義姉さまは水に入ったりはされないよね。港、は宮殿を出ちゃう。執務室はだめ、兄さまがいるし——義姉さまはどこが見たい？」

その上目使いにマルゴットは目を奪われながらも、ずっと思っていたことを口に出した。

「そ、それならば行きたい場所があります」

「じゃあそこに案内するね！ で、それはどこかしら？」

躊躇いはあった。

公宮内にあるのかどうかもわからないし、立太子の儀直後のフェルナで、しかも弟公子の婚約者となった身でだ。

「……リノチェロンテ殿下はどちらにおいででしょうか？」

罪悪感もある。

四年という月日より、たった一通の手紙に惹かれてしまった自分。まだリノチェロンテが亡くなって三月と経っていないのが嘘のように、フェルナに行くのが楽しみになってしまった理由が、申し訳なかった。

「そっか……義姉さまはリノ兄さまと婚約されてたんだものね」

「——では、わたしが案内しよう」

冷たい声にぎよつとしたのはマルゴットだけではない。ルツカもまた丸々と目を見開き、二人は同時に扉を向いた。

「じ、ジエネ兄さま!？」

「マルゴット王女、遠路遙々おいで下さり感謝する。出迎えが遅れたようで申し訳ない」

雨の降った後の土のような焦げ茶の髪は前頭部から撫で付けられ、秀麗な額が覗く。眇た瞳は紺碧の色だ。

ジエネローゾ・アズーリ・フェルナ・ヴィットーリオ。

陽気で愛らしい弟ルツカとまるで似たところがない、マルゴットの婚約者だった。

何か問題でもあるのだろうか？ マルゴットが首を傾げなくなる

程——当然、自制はした——厳めしい顔付きだ。貴公子然とした容貌なせいか、眉間に深く寄せられたしわが目立つ。

しかも紺碧の瞳は思わずくると目を背けなくなる程に峻烈だった。

マルゴットの自室に飾られていたリノチェロンテの肖像画ともまるで似ていない。彼はどちらかといえばルツカと似ている。

先に硬直を溶いたのはそのルツカだった。

パタパタとジエネローゾに駆け寄り、まとわりつくように彼の服の裾を引っ張る。

「ずるい兄さま！ 僕が案内しようと思ったのにっ！」

「お前はまだ勉強が残っているだろう、ルツカ。教師が探していたから連れて来たぞ」

再び固まったルツカに頓着せずに、ジエネローゾはつかつかと近寄ってくる。

「……兄さま」

「マルゴット王女、こちらへ。ルツカは戻るように」

「はい……義姉さま、またね！」

肩を落としたルツカは、可愛らしく顔の横で手を振った。

それに返事をする余裕がマルゴットには実はない。

……この方が本当にあの手紙を書いたのかしら？

そう思わずにはいられない。マルゴットを拒絶する雰囲気はジエネローゾにはある。少なくとも歓迎をされているとは思えなかった。射竦めるような視線に侍従も大臣も所在なさに立っている。味方はどこにもいなさそうで、当然といえば当然だ。ここはセトルではない——最もセトルでも軽んじられることは多かったが。

不意に寒々とした冷気に襲われながらも、マルゴットは促されるままに謁見室を後にした。

「――弟が迷惑をかけたようで申し訳ない」

「いいえ！ そんなことはありません……」

少しも悪いと思っていなさそうだが、マルゴットは否定した。ルツカの快活な笑みで、マルゴットの密やかな緊張は溶けたのだから、ただし、今は別の意味で強張っている。

――わたくし、なにか気に触ることをしたかしら……？

ジェネローゾの硬い声音に身の置き所が探せない。

……やっぱりリノチェロンテ殿下のことを口に出したのがいけないかったのかもしれないわ。

ふと、恐怖を感じた。

もしもジェネローゾが怒って婚約破棄を言い出したら、セトルの父はどう思うだろう。想像すら恐ろしいが激烈に責められることは間違いない。

前を歩くジェネローゾの広い背を見上げていると、感情の伺えない声がした。

「折角フェルナまで来ていただいたが、兄が亡くなり、父も臥せっている。今はわたしが政務をとっております。ですから、あなたと話す時間は多分そうはないでしょう」

思わぬ言葉に足を止めたマルゴットは少しだけ青くなった。

――やっぱり歓迎されていないみたいだわ……。

つまりは、機嫌を損ねてしまったということだ。

暗鬱な思いでその背を見上げていると、くるりと身体を入れかえジェネローゾがマルゴットを見据えた。

「滞在は二月との話ですが、良ければ離宮へ移られたらどうですか？」

「そんな……」

目障りだということか。それとも会ってみたらマルゴットにそれほど興味がなくなったのだろうか。

いや、もともと興味はない筈だ。ジェネローゾがマルゴットと婚約したのは、リノチェロンテが亡くなってしまったからであって、

彼が望んだわけじゃない。

多分、あの手紙を書いたのはジェネローゾではないのだ。だからこれはフェルナに嫁いで来たら、離宮に封じる、という暗示かもしれない。

眉根を寄せたジェネローゾから目を反らしたのを景氣に彼はつと指を上げた。

「そこを右へ行けばすぐに兄上に会えますよ」

「……殿下はいらっしゃられないのですか？」

そのまま動こうとしないジェネローゾに軽く首を傾げると、きゅつとさらに深く眉を寄せた彼は足音をたてて右に折れる。

——またご機嫌を損ねてしまったみたいだわ……。

溜め息を堪え、無言の背を追いかけて角を曲がったマルゴットの視界は真っ白に変わる。明るい光に手をかざし、ゆっくりと顔を巡らせた。

一面の青い空と緑の下草が生えた丘。整えられた中庭に白い壁も美しい廟が建つ。

「ここが公家の墓所になります」

白い石柱に手をかけてジェネローゾは立ち止まった。

振り向いた顔に表情はひとつもない。

紺碧の瞳は全く色を変えず、薄い唇は真一文字に結ばれている。髪の毛に一筋でも乱れがあればマルゴットは恐れを感じずにいられたのだが。

「この廟は歴代の公族が眠る場所です。兄上もここに。それで——わたしは席を外した方がいいですか？」

低い声で問うたジェネローゾに小さく首を振る。

「……少々時間で済みますからお待ちいただけますか？」

返事を待たずマルゴットは緑の絨毯にゆっくりと膝をついた。

指を組み頭を垂れる。

——許してください。わたくしはフェルナ公太子妃にならなけれ

ばなりませんし、あなた以外の方からの手紙に心惹かれてしまいました。

つと上げた視界に映るジェネローゾはじつとマルゴットを見つめている。その激情を秘めた視線にもう一度下を向いた。

——殿下の弟君はわたくしのことがお嫌いなようですが、わたくしは、わたくしの意思で決断いたしました。海風吹く、活気に溢れるこの国をジェネローゾ殿下と……。

『わたしと共に国を育てる決断を』

そう書かれた手紙を読んだのは少し前のことだ。十四歳のマルゴットは初めて自分に意見を求めてくれた手紙の主に——惹かれたのだ。

……お手紙の中身を書かれたのはきつとこの方ではないのでしょう。けれどフェルナのどこかにわたくしのことを少しでも考えて下さるひとがいるのなら——わたくしの決断は変わりません。

許して下さい、ともう一度心中で謝罪して、マルゴットは立ち上がると――。

「ジェネローゾ殿下、もう一度最初からやり直させて頂いてもよろしいでしょうか？」

生真面目な顔で背筋を正した。

《第三章》 ～天使にご用心～？（後書き）

次話もよろしくお願いします！

《第三章》　天使にご用心？

感情のこもらない視線に訝しみが混じった。

「やり直す？」

初めてジェネローゾの声からなにかが見える。それは狼狽のようで、揺れた瞳に小さく満足を覚えた。

——でも、この方は困っても目を背けたりしないのだわ。

妙なところに感心しながら、それでも王女らしく優雅に微笑むにとどめ、マルゴットは淡い青のドレスの裾を摘まんだ。

紺碧の瞳がさらに歪む。

腕を軽く上に持ち上げ、スカートのラインが美しく見える角度で止める。流れるように半歩足を引き上体を真っ直ぐに保ったまま、腰を落とした。

「——この度は無事に立太子の儀を終えられたとのこと、おめでとう存じます。わたくしはマルゴット・ディアーデム・セトル・ヴァルフヘント。セトル王ハイダルの名代としてジェネローゾ殿下の立太子を祝いに参りました」

ふくらはぎが震えるがどうせドレスの中、ジェネローゾには見えはしないのだ。いつもよりも高いヒールに足裏が痛むがそれも同じこと。

マルゴットは体勢はそのままに軽く会釈し、真っ直ぐにジェネローゾを見つめた。

「ああ、そういうことか」

再び声に冷酷さが戻るがもう気圧されることはない。挨拶は何度も練習したし、元々求められる王女としての基本だ。

「——また、わたくしを婚約者として指名して下さいましたこと、真に嬉しく思っております」

これは事実である。

リノチェロントとの婚約が決まった十歳の時から、マルゴットの

価値はフェルナ公太子妃になることだけだった。父にも母にも兄にもそれ以外に省みられることがなかったから、リノチェロンテが亡くなった時に感じた絶望は、自分の価値がなくなったという喪失感だけだ。

けれど、マルゴットは新たな公太子の婚約者となった。ジェネロ―ゾは――彼の署名が入った手紙と共に、マルゴットを救ってくれた。

「しかし、あなたは先程――いや……」

石柱から手を離し、ジェネロ―ゾが軽く目を見開くのをさらりと微笑みで流し、さらにマルゴットは言葉を紡ぐ。

「ルチエーナはとても活気に溢れ、セトルには見られない様々なものがあるということを馬車から拝見しました。素晴らしいと思います。よろしければ供の者にもフェルナ公国を見聞し、公や殿下の政を学ぶ機会を、と願っております。殿下はわたくしたちの滞在を許して下さいますでしょうか？」

よどみなく話し終え唇を結ぶ。

ジェネロ―ゾは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「……お好きになされば良い」

一瞬過った複雑な揺らぎはすぐに消え、ジェネロ―ゾはマルゴットへと足を踏み出した。

ドレスの裾を摘まんだままのマルゴットを立つように促す。

「わたしは戻ります。ガッビアーノ宮内であればご自由に動かれるがいいでしょう。ただし、父の私室やわたしの執務室には足を踏み入れないで頂きたい」

「わかりました」

「それからルツカは無視されてかまいません。あれはどこにでも出没するし、誰とでも話したがる」

声音が柔らかく変化する。最も、それは大臣――マルゴットを港より案内してくれた外務大臣サレッゾ・ノーレ・グリッロやルツカに比べると、冷たいものであることに変わりはないが。

「……わたくしはルツカート殿下のお邪魔になつてしまつのでしょ
うか？」

——仲良くなれそうな気がしていたのだけれど。

ルツカの無邪気さは、たったあれだけの会話でマルゴットに好感
を抱かせるのに充分だった。

だがジエネローゾはルツカには勉強があると言っていた。もしも
マルゴットがルツカを邪魔してしまうならばそれは本意ではない。

その通りだ、と言われるのを覚悟でマルゴットはジエネローゾに
訊ねる。答えは予想とまるで違っていた。

「ルツカと二人きりでなければ——もう行かなければなりません。
失礼します」

脇を通り過ぎたジエネローゾは振り返りもしなかった。

その背を目で追つて、マルゴットは深く嘆息する。

——もう少し、愛想の良い方であれば良いのですけれど。機嫌が
悪かったのか、もしくはあれが常態かしら……。

しかし機嫌を損ねたとしてもルツカの言う通り、マルゴットは国
賓だ。名目は父の代理であり、婚約者として祝いに来たわけではな
い。

そう考えると失礼な態度だと思う。セトル王国とフェルナ公国に
は力の差は殆どないのだから。

……それほど無礼なことであつたのかもしれないけれど。

リノチエロントのことを口に出すのはもう少しフェルナに、ジエ
ネローゾに慣れてからでも良かったとも言える。

マルゴットは途方に暮れると、もう一度廟を見上げた。

——わたくし、やっていけるでしょうか？ フェルナを育てるに
は、子を育てるには二親の愛情が必要だと聞いておりますのに。

答えが返ってくることはないを知っていたので自嘲気味に笑うし
かない。

「——王女殿下、お待たせいたしました」

やや息を上げてグリツ口が下草を踏み踏み近付いて来た。彼を見

て嘆息したマルゴットは手を重ね、背筋を伸ばして正面を向く。

「グリッロ大臣、わたくしあなた方に謝罪をしなければなりませんわ。ジエネローゾ殿下をご不快にさせてしまったようです」

眉を下げたマルゴットにグリッロは軽く首を傾げる。

「……どうかお気になさらずに。そもそも殿下が遅れたのですし。それよりも中にお戻り下さい。滞在中の予定などをもう一度確認してしまわなければなりません」

「わかりましたわ」

ゆつたりとドレスの裾を揺らし、マルゴットはグリッロと連れ立って中に戻った。

＋　＋　＋

「どうなさいました？」

そう聞かれて、寝台に腰かけたまま窓の外を眺めていたマルゴットは女官に顔を向けた。

外は既に真つ暗で、明るく広く豪華な室内がガラスに写る。

「わたくしもルチエーナの町を歩きたいわ」

昼間見た町並みを、人々の生活を、馬車ではなくもつと間近で見たかった。

「なのに予定はぎつしり、わたくしのことだというのに全てが決められているんですもの」

女官——エリーザが困った顔をする。それに小さく唇を尖らせた。彼女はセトルからついてきてくれたマルゴットの女官だ。唯一、フェルナ語を遜色なく話せるし、幼い時からそばにいてそれだけ気安い。

「仕方ないことかもしれないけれど、これではセトルにいた時と変わらないわ」

何もかもを決められた生活が普通だった。だが、ここはフェルナであってセトルではない。

それに、手紙の主が言うように、フェルナを共に育てるならまず
はフェルナを知らなければ、と思う。昼間にグリツロからくわしく
聞いた予定は、晩餐会や舞踏会、様々な施設の視察が殆どで、明ら
かにマルゴットが見たい、知りたいと思うものではなかった。

不満そうにエリーザを見たマルゴットに彼女は言い聞かせるよう
に柔らかに言葉を紡ぐ。

「此度の滞在は二月ですが来年にはフェルナに嫁いでいらつしやる
のですから我慢なさいませ。さ、明日もお早いのではないですか？」

「……そうね」

夜着にはとうに着替えてある。ライラックの色をした薄い絹のよ
うな、襷の多いゆったりしたドレスだ。マルゴットが上に羽織った
ガウンを脱ぎかけた時、コンコンと軽快に部屋の扉が叩かれた。

「どなたでしょう？」

マルゴットの肩からガウンの片袖を抜いたエリーザが首を傾げた。
その手をやんわりと退かせ、寝台から立ち上がる。

「なにか緊急の用件かもしれないわ。エリーザ、開けてちょうだい」
足早に寝室から隣の部屋——主室へ移ったエリーザをゆっくりと
追う。さらに廊下への扉がある部屋へと移動したエリーザの足音が
止まった。

気配に気付いたのか、音楽のような強弱をつけたノックも止む。
マルゴットは来客の可能性に備えガウンをしっかりと纏わせた。
そして耳をそばだてる。

「まあ！」

扉を開けたと思われるエリーザの、驚きの声があがった。

——まさかジェネローゾ殿下では……？

ふと考えた自らの思考に小さく首を振る。

きつとジェネローゾは来ないだろう。よしんば来たとしても、マ
ルゴットに会いに来るのではなく用事があるからに違いない。

なんとなく身構え伺っているところの女官には珍しい弱りきった表
情でエリーザが入ってきた。

「姫さま……あの……」

言い淀み、入り口で止まったエリーザの後ろからぴよこりと飛び出した――天の御遣い。

金の巻き毛、青い瞳に桃色の頬、薄く散ったそばかす。

「義姉さま！　もうお眠りでしたか！？」

ルツカが小さく肩を竦めながらエリーザの前に回り込む。我知らず、ほつと力を抜いたマルゴットは微笑んだ。

「いいえ、まだですわ。どうなさったの？」

途端にパツと顔を輝かせたルツカはマルゴットの手を取る。

「あのね！　ガッビアーノ宮からは星と海がきれいに見えるんだよっ！」

くいつと引つ張られ、どうやらルツカはマルゴットに景色を見せたいのだと判断した。次いでエリーザを見ると、彼女は渋面を作っている。それにわかっていると頷いてマルゴットはルツカの手を軽く引いた。

「見に行きたいですけど、夜はいけませんわ」
しゅん、としたルツカに胸が痛む。

「僕まだセトル王都には行ったことはないけど、海はないのでしょう？　きつと驚くんじやないかしら？　それに今がだめならいつならいいの……？　夜しか見えないのに……」

うつすらと張った涙の膜にマルゴットは慌てた。

「わ、わかつたわ！」

「姫さま！？」

「すぐに帰ってくるわ。大丈夫よ」

ほだされたマルゴットを小首を傾げて見上げ、ニッと笑う。

「兄さまはまだ執務室だから抜け出しても大丈夫！」

渋い顔をしたエリーザに内緒話のような囁いて、ルツカがもう一度マルゴットの手を引いた。

今度は逆らうことなく歩き出したマルゴットを連れて、左右を確認しながら角を曲がり続ける。いくつかの階段を昇り、唐突に空が

見えた。

一面に星が瞬いている。

「きれいいわ！」

潮の香りのする風に髪を靡かせ歓声を上げた。

ところがルツカは首を振る。

「まだまだ！ 義姉さま、目を閉じて」

感嘆の溜め息を溢したマルゴットにルツカがいたずらっぽく片目を瞑った。淡い期待をのせて、マルゴットは睫毛を伏せる。

手を引かれるままに歩き――。

「いいよ！ 目を開けて義姉さま！！」

「こんな……」

案内された屋上の柵に手をかける。思わず身を乗り出した。

「どう――？ セトルよりもきれい？」

どこまでが空で、どこからが海なのだろう。

「……こんな美しい景色は初めてです」

紗をかけたような柔らかい光を放つ真ん丸の月。

空と海を分ける水平線が一体どこにあるのか。真っ黒の海が月光を弾き、星を映し、波を輝かせている。空もまた同じように闇のキヤンバスに星が輝き、明滅を繰り返していた。

それだけではない。

手前には幻想のように家々の灯りが漏れ、港の篝火は温かい光となつて景色に色を添えていた。

「ルチエーナの全てが輝いているようですね……このような素晴らしい夜景に出会ったことはありません……」

視線を外すことが出来ないまま、震える声で告げる。ルツカが嬉しそくに笑う。

「天気が良くて波が穏やかじゃないとここまできれいに見えないん

だよっ！ 僕も兄さまが執務室にいる時にここに来るんだ！ ほら、あそこはルチエーナの港。船の灯りもきれいでしょ？ あっちの円形の灯火は中央広場で、ガツビアーノ宮から真っ直ぐに道が伸びて、そのまま港に続いているんだよ。義姉さまも通ったのではないかしら」

やっと夜景からルツカに視線を移したマルゴットは小首を傾げる。嬉しそうに海を指差していたルツカは、マルゴットを見上げた。

誘われるように疑問を口に出す。

「どうしてジエネローゾ殿下が執務室にいらっしゃる時だけなの？」

「——それはわたしの私室がこの真下だからだ」

二人はびくり、と身を強張らせた。

この冷酷な声を聞き間違える筈がない。

騒音の中でも多分マルゴットは彼の声だけは聞き分ける。

「……ジエネローゾ殿下」

昼と同じ格好だった。貴公子然としたその様子。紺碧の瞳を眇たジエネローゾは厳格に腕を組んでいる。

叱られる、と咄嗟に思った。竦然として顔を反らすと重く溜め息を溢される。

「話し声が聞こえたので何かと思ったが。——ルツカ、マルゴット王女を夜に連れ出すことはやめなさい」

「はい！」

舌を出しかねん勢いでルツカが返事をする。

「マルゴット王女、このような時刻に出歩くのは良識ある行為とは思えません」

「申し訳ありません……」

刺すような視線を感じて俯く。視界に入った夜着とガウンの前を掻き合わせた。

後悔しても後の祭りだ。

穴があつたら入ってしまいたい。

「送りましょう。ルツカは一人で戻れるな」

「うん。お休みなさい、兄さま！ 義姉さま！」

頼みの綱のルツカはあっさりと軽い足音を響かせて去っていく。階段を降りる音を鼓膜が拾うがマルゴットは不機嫌な声に身を縮めていた。

耳がさらに衣擦れの音を拾う。

ふわ、と肩に布の重みを感じて、見るとそれはジェネローゾの上衣だった。

「羽織っていなさい。あなたをガウン姿で人目に晒すわけにはいかない」

恥じ入る想いで身体に巻き付ける。

——意外……とても、温かいわ。

最もそれは当然だ。彼がどれ程冷酷だったとしても体温がない筈はない。

ただ、マルゴットに殆ど感情を見せないジェネローゾにも優しさがあるのかもしれないと、希望を持ちたかった。

——そうよ。ルツカにはとても穏やかな目を向けているもの。いつか、いつかわたくしにも打ち解けてくださる筈だわ。

そうであって欲しい。

微かな望みを胸にジェネローゾを見上げた。

彼はだが柔らかさとは無縁のひどく厳しい顔でひたとマルゴットを見つめている。

「あなたはわたしの婚約者だ。いくらルツカとはいえ夜間に他の男と出歩くなどいらぬ噂を蒔くだけです……わたしも、不愉快だ」

慌てて俯いたマルゴットに声が降る。

ぐいっと上衣の両脇を合わせられ、ジェネローゾが留め金をはめてくれた。思いの外優しい手付きに、腰を屈め視線を合わせてきた顔を見る。

彼は少しだけ片眉を上げると言い含めるように重く口を開いた。

「あなたは思っていた以上に厄介な存在だ。ご自分の立場をもう少し理解してくれないか——おいくつになられるのだ。来年にはわた

しの妃になられるというのにこのように落ち着きがないようでは困る」

「……わたくしが軽卒でした」

冷酷さはなりを潜めたが、結局マルゴットは小さくなるしかない。ジェネローゾは十六歳で、マルゴットの二つ年上だ。たった二つの差であるのに彼は随分と大人びていた。

確かに軽重さを責められるのは仕方のないことかもしれない。しかもすでに廟の前で一度警告されているのだから。

不意にせり上がった熱いものをマルゴットは必死に隠した。子供じみて恥ずかしいし、落ち着くように言われたばかりだ。

この距離で目に涙を溜めてしまったらまた何を言われるのかわかったものではない。

ごめんなさい、と呟いたマルゴットからジェネローゾは視線を外した。

「では、戻りましょう」

身体を起こして歩き出したジェネローゾを追って、マルゴットは階段を降りた。来た道とは別の、もっと近道を通って——行きに衛兵に会わなかったのはルツカがそういう通路を選んだからだろう——マルゴットに二ヶ月与えられた部屋に着く。

ジェネローゾは口を真一文字に結んだまま、にこりともせず扉を開けた。

扉のそばで困りきっていたのだろう。右往左往するエリーザが目を見開いて主と主の婚約者を交互に見る。

「良き眠りを、マルゴット王女」

「お、お休みなさいませ」

言った途端にくるりと背を向けたジェネローゾの後ろ姿に就寝の挨拶を返す。彼は振り向きもしなかったが、角を曲がってしまうまでマルゴットはずっとその長身を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5405w/>

求婚≠ロマンチック!? 【オムニバス】

2011年10月9日03時20分発行